

加古川市所在

# 坂元遺跡Ⅱ (本文編)

―東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書―

2009(平成21)年3月  
兵庫県教育委員会



加古川市所在

# 坂元遺跡Ⅱ

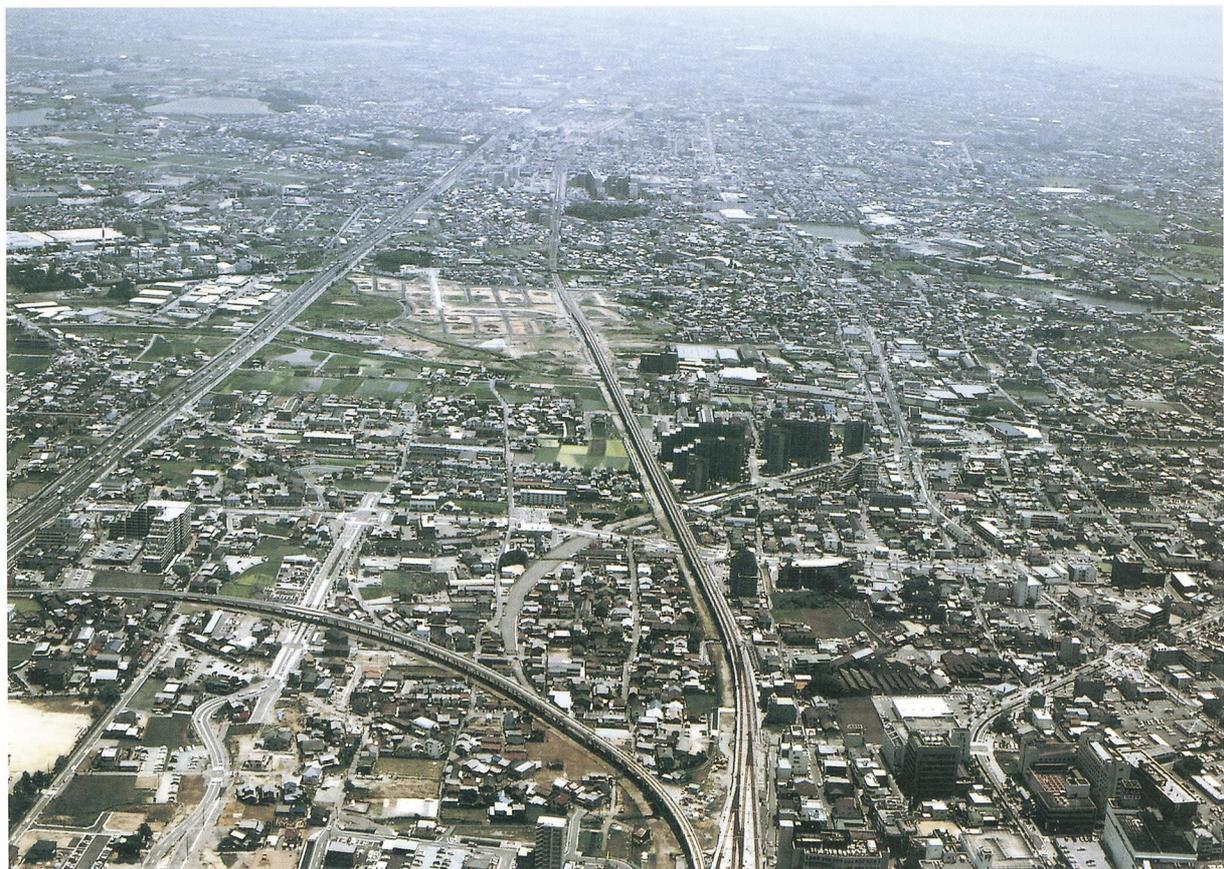
—東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴う発掘報告書—

〔本文編〕

2009(平成21)年3月  
兵庫県教育委員会



南東(古大内遺跡上空)から遠景



遠景(西から)



遠景(東から)



遠景(南西から)



調査地空中写真(北上空から)



調査地空中写真(南上空から)



調査地空中写真(西上空から)



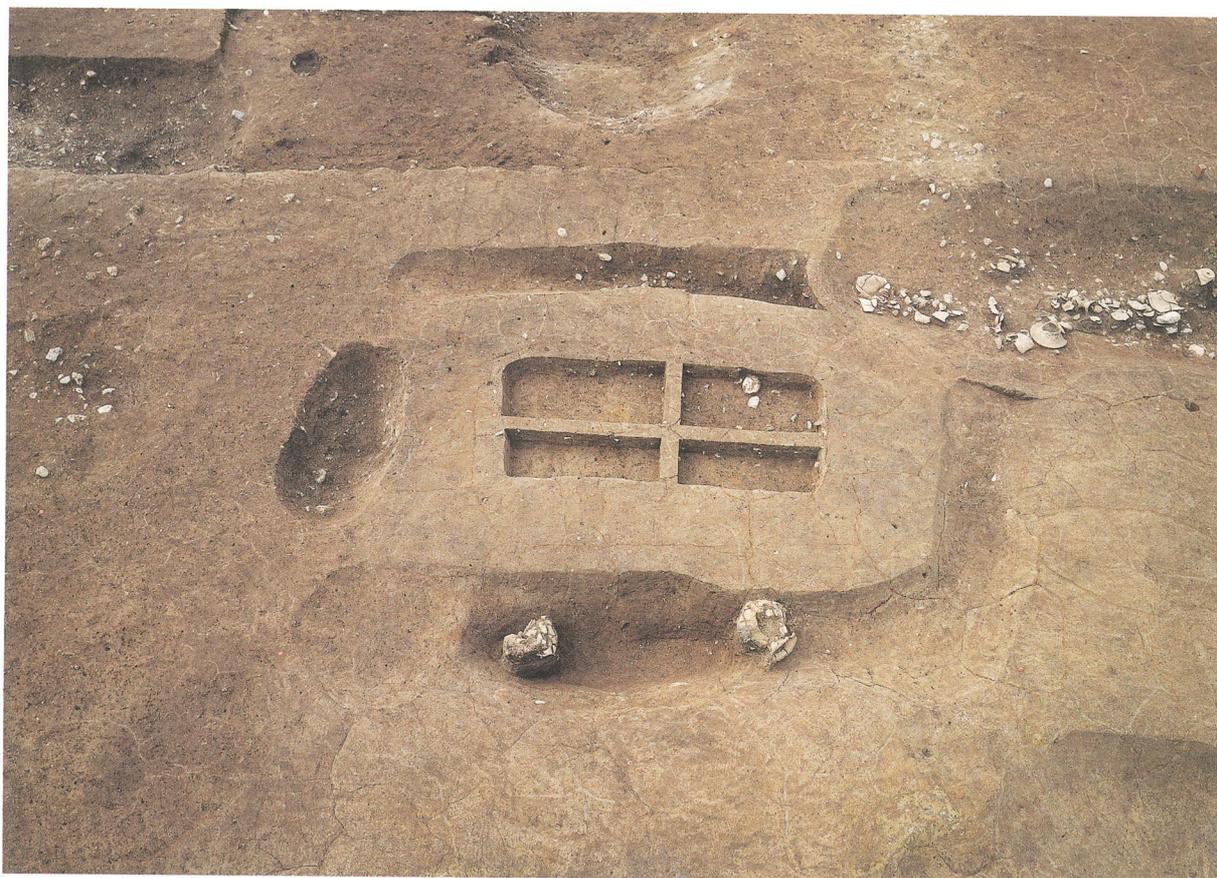
調査地空中写真(東上空から)



1区 方形周溝墓群(北西から)



1区 SX0104主体部(北西から)



1区 SX0105(北東から)



1区 SX0103周溝墓内土器出土状況(南西から)



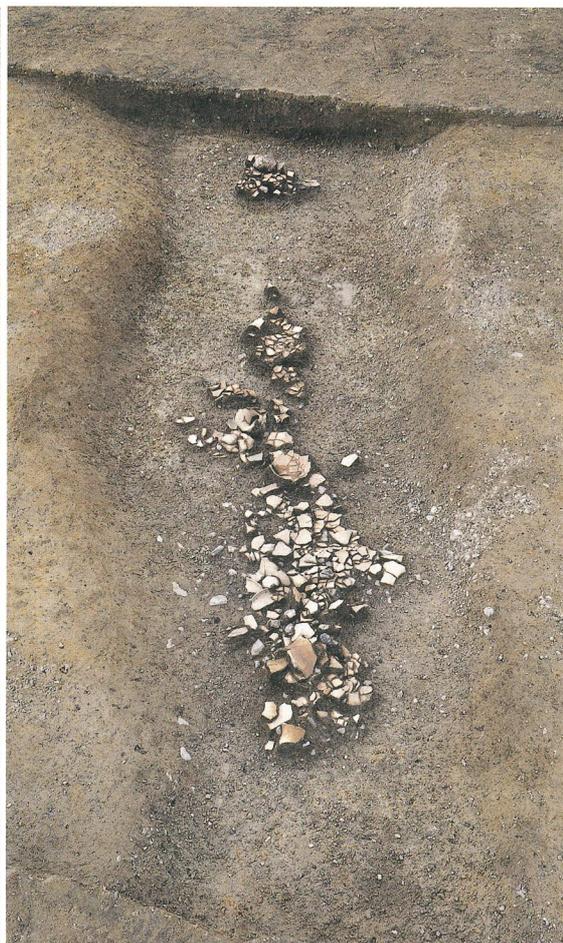
12区～14区 調査区全景(東から)



12区～14区 方形周溝墓1(北東から)



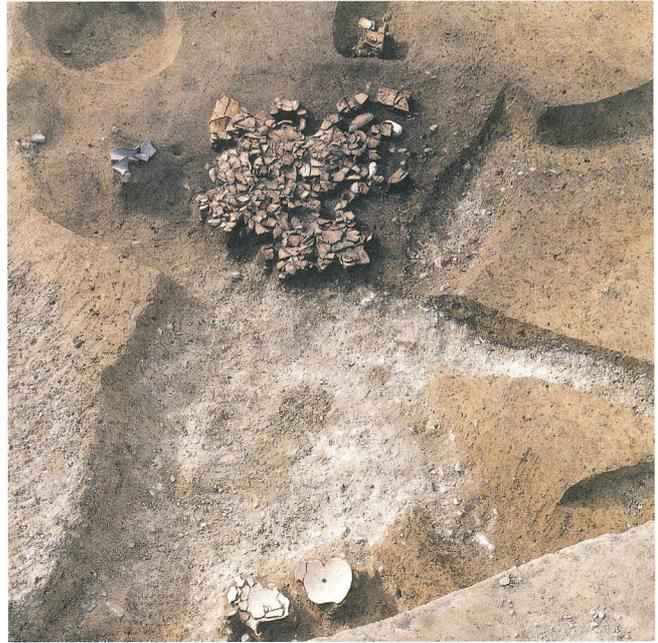
12区～14区 調査区全景(東から)



12区～14区 SD1203土器出土状況



12区～14区 方形周溝墓1(南から)



16区 埴輪・弥生土器出土状況  
(北から)



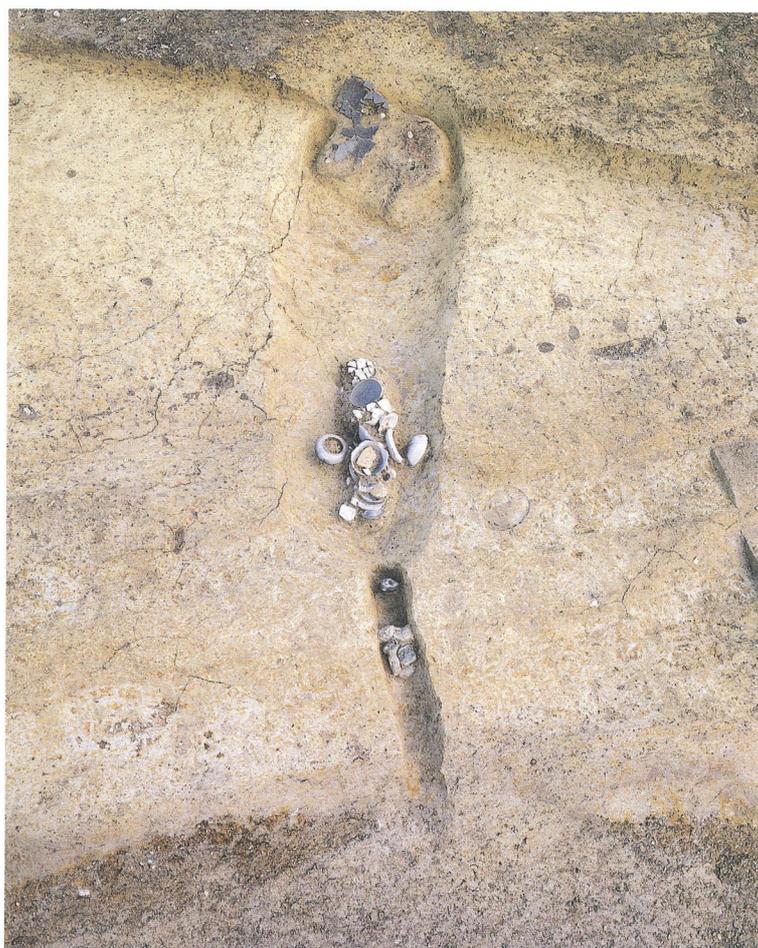
16区  
埴輪出土状況(北から)



16区  
古墳状隆起(南東から)



17区 SX1704(東から)



19区 SK1905全景(西から)



26区 調査区全景(東から)



26区 SR2601(北から)



28区 調査区全景(西から)



28区 SB2803(南東から)



28区 SR2803 北壁



28区 SR2801 北壁



28区  
SX2803土器出土状況  
(東から)



31区 西区第2面(北から)



31区 SR3101(南から)



31区 SR3101 北壁



31区 SR3101土器出土状況



37区 SH3702~SH3704(西から)



37区 SE3701断ち割り(南から)



38区 SD3804上層遺物出土状況(北西から)



38区 SB3801・SD3804(北西から)



40区 上層遺構面全景(南から)



40区 水路クランク部分の状況(西から)



40区 微高地及び水田の状況(南西から)



40区 SR4001土層堆積状況(北から)



53区 調査区全景(北から)



53区 調査区全景(南から)



53区 段丘部全景(西から)



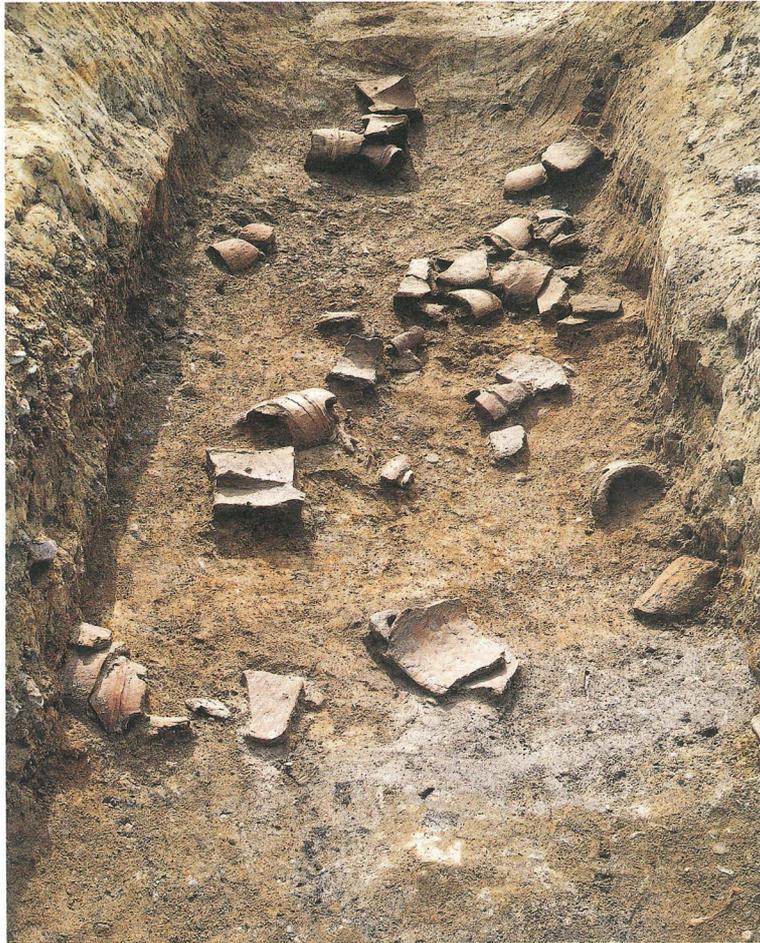
53区 古墳全景(南から)



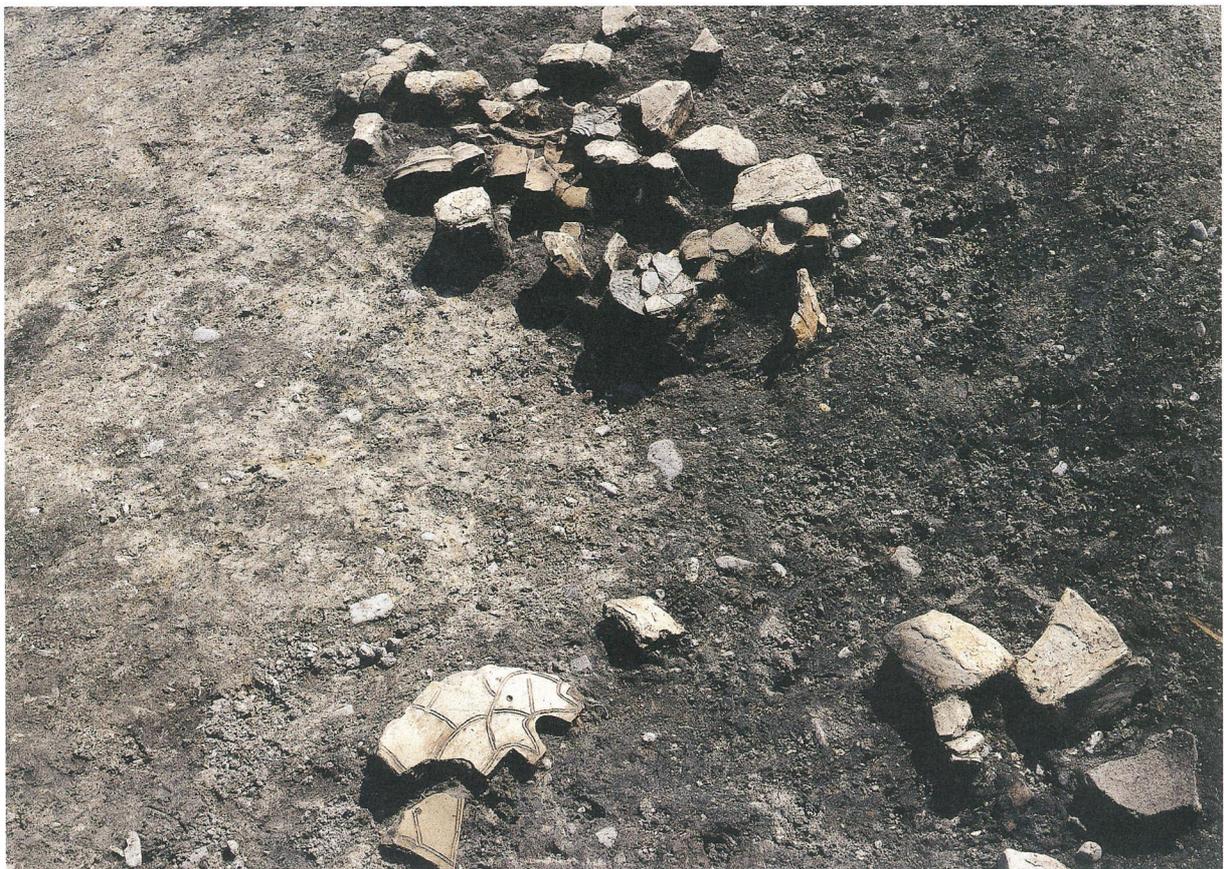
53区 窯跡周辺全景 (SX5305 北から)



53区 窯跡 埴輪出土状況(北から)



53区 埴輪出土状況(北から)



53区 埴輪窯跡灰原 埴輪出土状況(東から)



53区 窯体全景(北から)



53区 窯体断ち割り(北から)



53区 東側窯壁断ち割り



53区 西側窯壁断ち割り



55区 調査区全景(東から)



55区 桃などの種子・土馬と折敷



56区 調査区全景(西から)



56区 SH5601(北西から)



SI5601・5602・5604出土土器



弥生土器集合



SX0101・0102出土土器



SX0103出土土器



SX0104出土土器



SX0105~0109出土土器



SK0101出土土器



12区出土弥生土器



SD1203出土土器



SD1207・1208出土土器



SH2801出土土器



SK3103~3122出土土器



SD3804出土土器



1130

SX5304出土土器



SX5302・5304出土土器



SH5601出土土器



1500

石見型盾形埴輪



J1

ガラス玉



形象埴輪(石見型盾)



SX5305(窯体・灰原) 出土埴輪



SX5305(窯体) 出土埴輪



SX5305(灰原) 出土埴輪



SX1603出土埴輪



SX5701出土埴輪



旧河道出土須恵器



包含層出土須恵器



SX1704出土土器



SX1905出土土器



SE3701出土土器



イイダコ壺・土鍾集合



炊飯系土器集合



竈復原



瓦集合



T2

軒平瓦



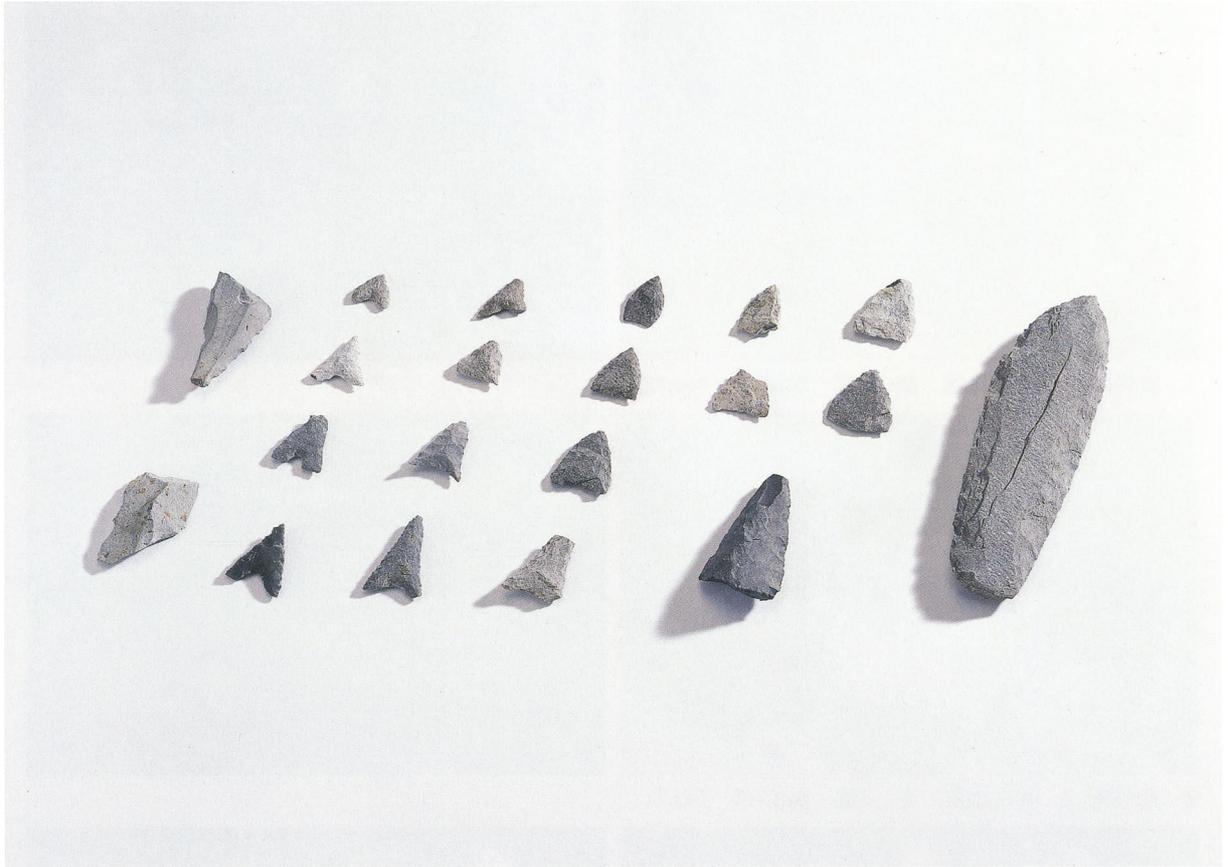
M1

和同開珎



W2・W3

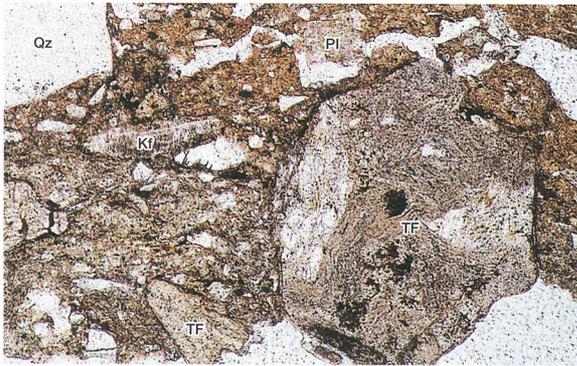
木簡



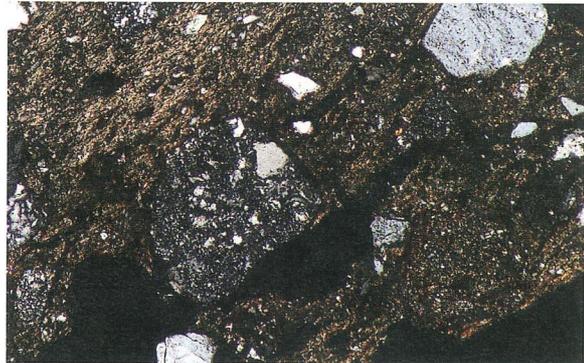
出土石器



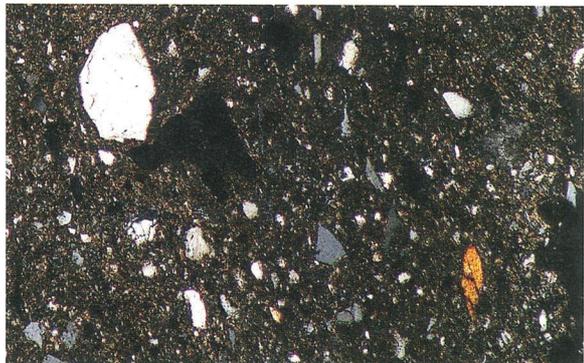
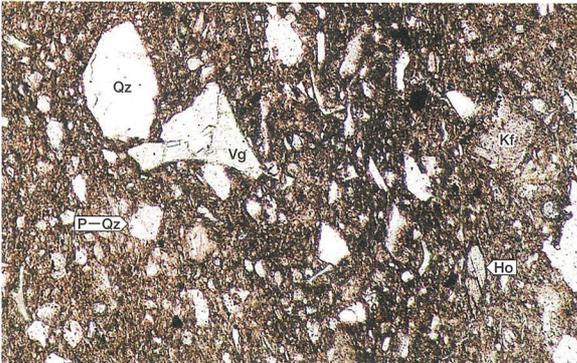
出土石器



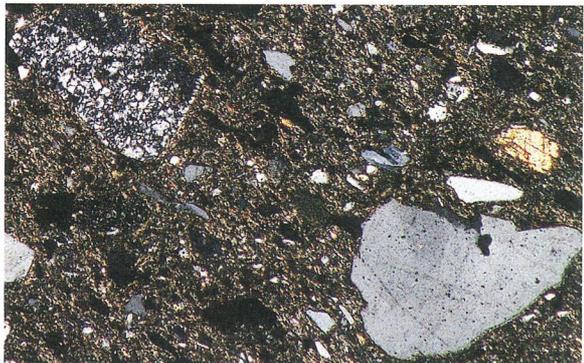
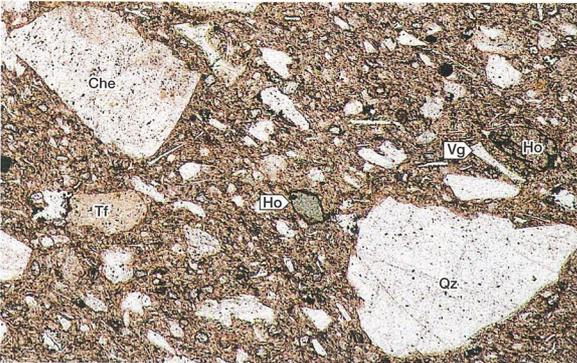
1. 資料No.1 弥生土器 壺 1区 SX0104 No.128



2. 資料No.2 弥生土器 壺 1区 SX0101 No.74



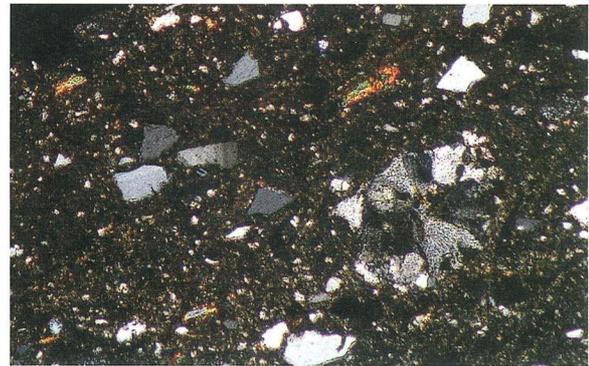
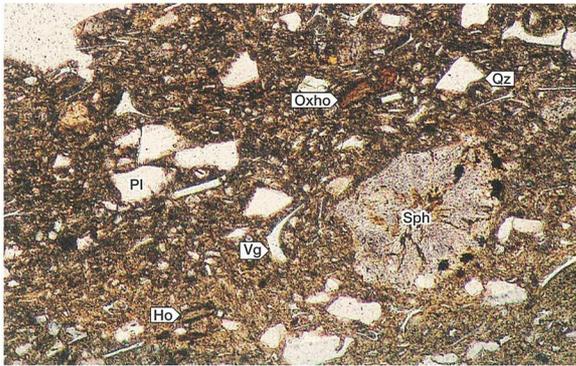
3. 資料No.3 弥生土器 甕 1区 SX0102 No.96



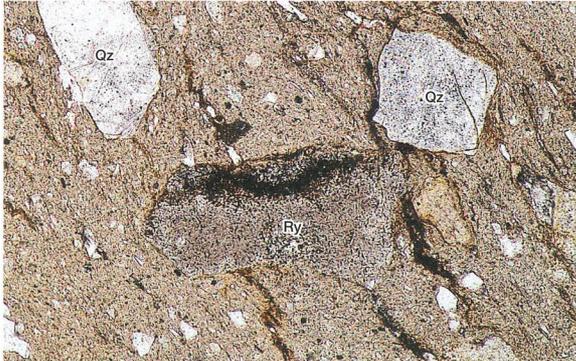
4. 資料No.4 弥生土器 壺 1区 SX0103北溝 No.109

Qz：石英，Kf：カリ長石，Pl：斜長石，Ho：角閃石，Che：チャート，Tf：凝灰岩。  
 P-Qz：多結晶石英，Vg：火山ガラス，Po：植物珪酸体。  
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

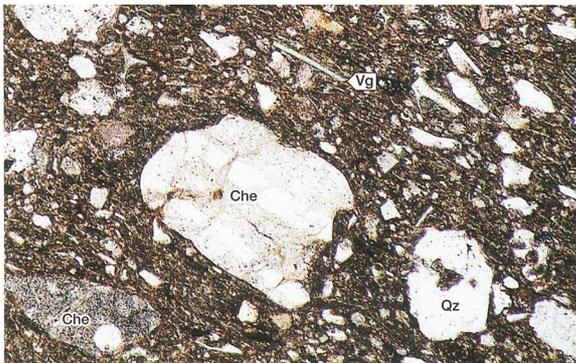
0.5mm



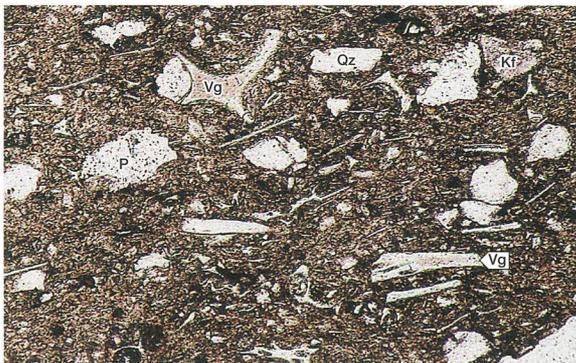
5. 資料No.5 弥生土器 壺 1区 SK0101 No.65



6. 資料No.6 弥生土器 壺 13区 SD1203 No.187



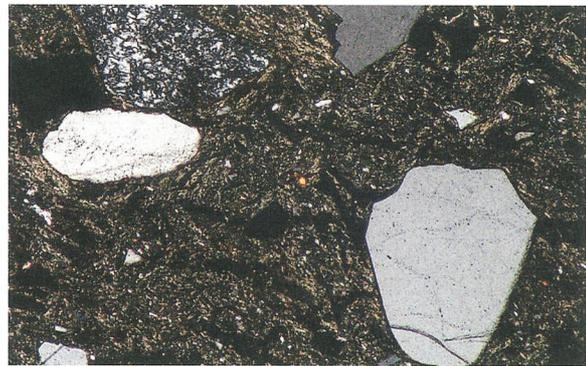
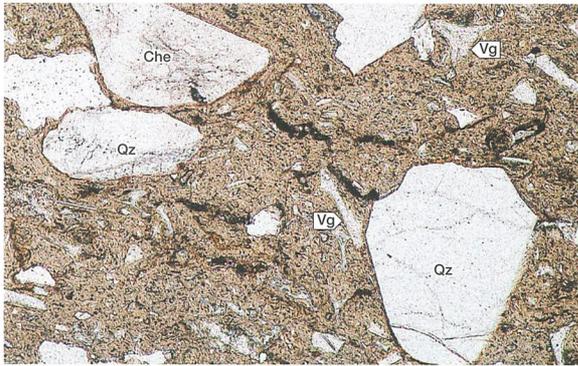
7. 資料No.7 弥生土器 壺 13区 SD1203 No.195



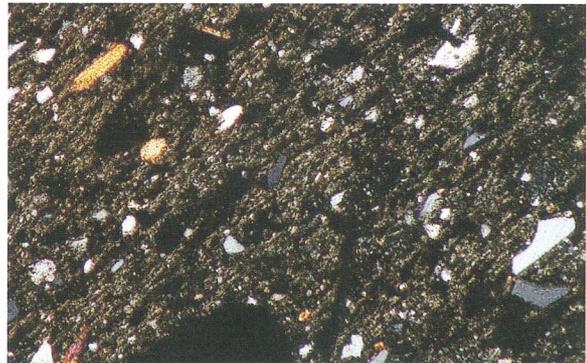
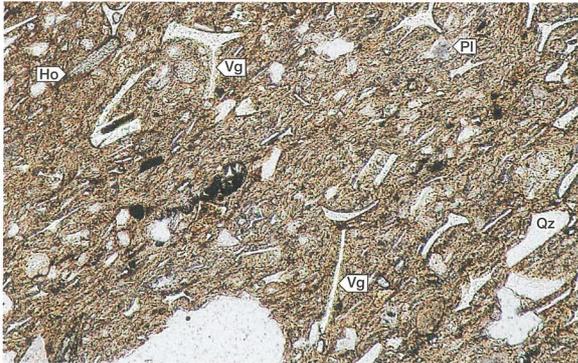
8. 資料No.8 弥生土器 壺 13区 SD1203 No.191

Qz: 石英. Kf: カリ長石. Pl: 斜長石. Ho: 角閃石. Oxho: 酸化角閃石. Che: チャート.  
 Ry: 流紋岩. Sph: スフェルライト(流紋岩). Vg: 火山ガラス. P: 孔隙.  
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

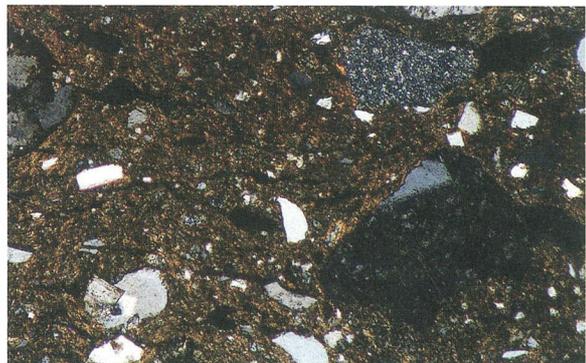
0.5mm



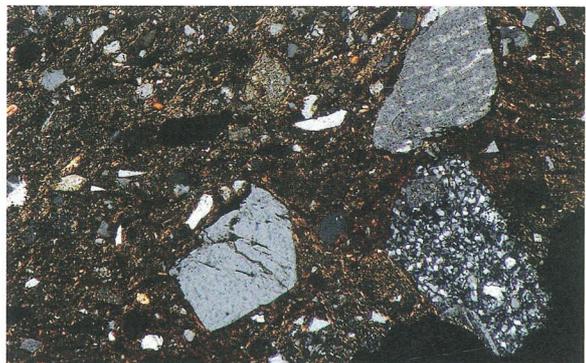
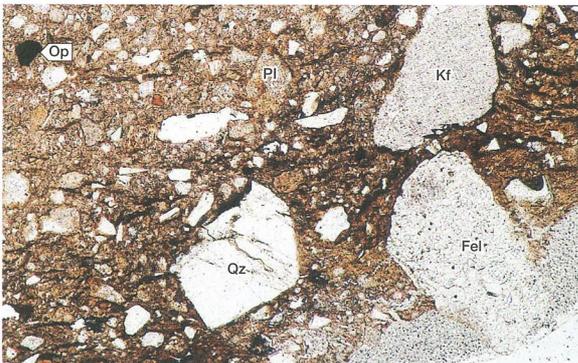
9. 資料No.9 弥生土器 壺 13区 SD1203 No.186



10. 資料No.10 弥生土器 壺 13区 SD1203 No.188



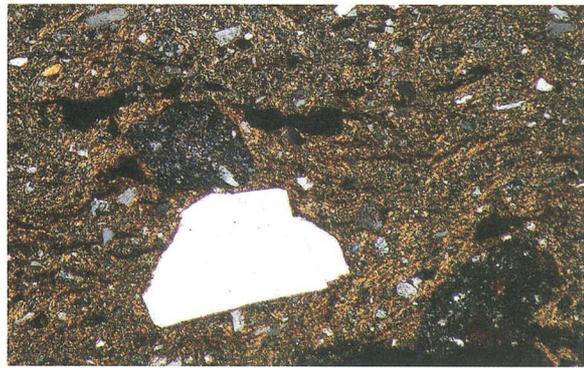
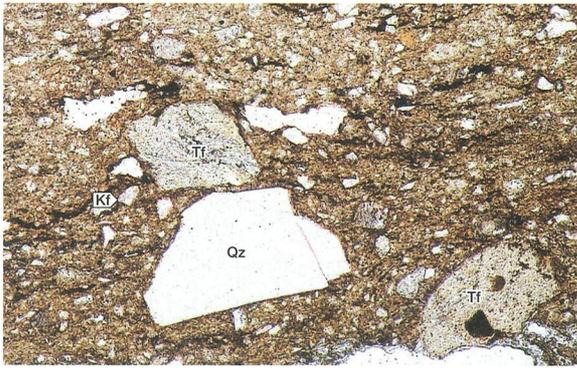
11. 資料No.11 弥生土器 壺 14区 SD1205 No.204



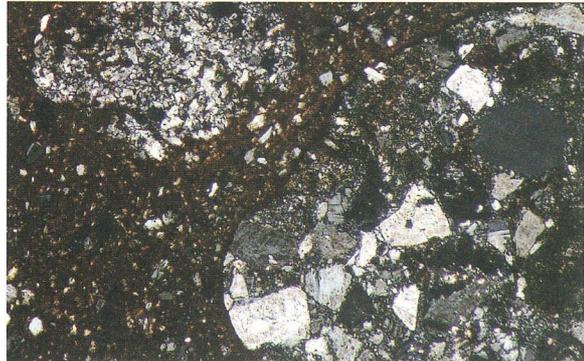
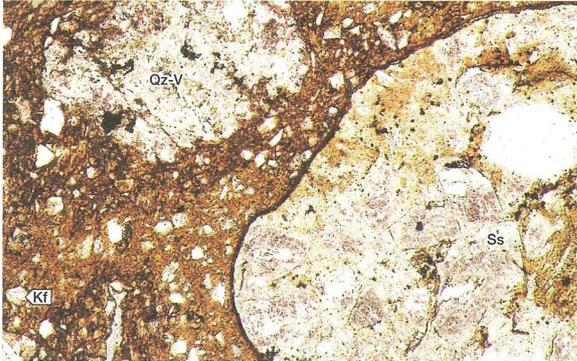
12. 資料No.12 弥生土器 壺 17区 SK2201 No.362

Qz：石英，Kf：カリ長石，Pl：斜長石，Ho：角閃石，Op：不透明鉱物，Che：チャート，  
 Tf：凝灰岩，Ry：流紋岩，Gr：花崗岩，Fel：珪長岩，Vg：火山ガラス。  
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

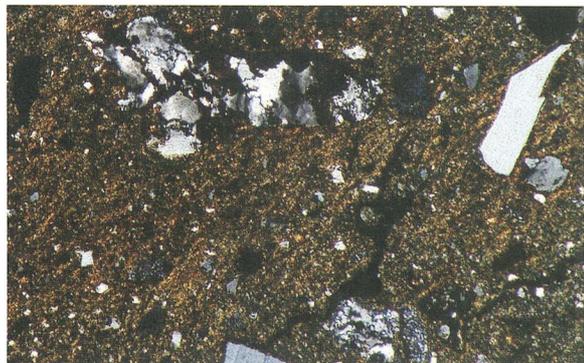
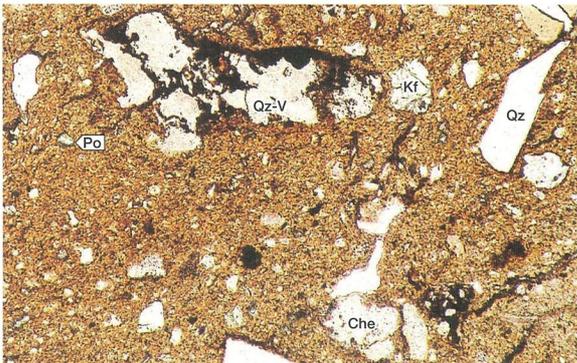
0.5mm



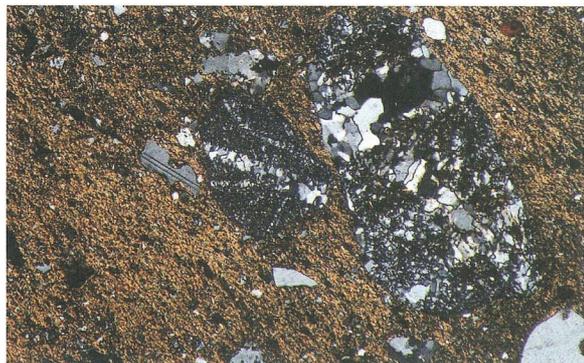
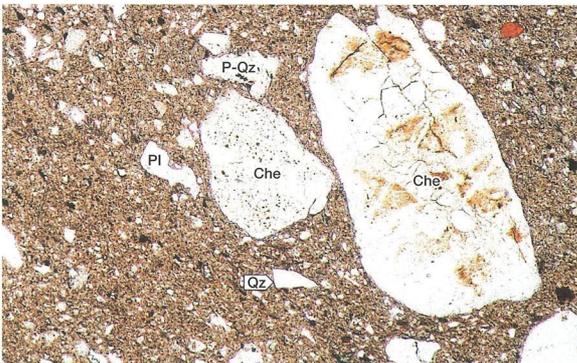
13. 資料No.13 埴輪 円筒 16区 SX1603



14. 資料No.14 埴輪 円筒 16区 SX1603



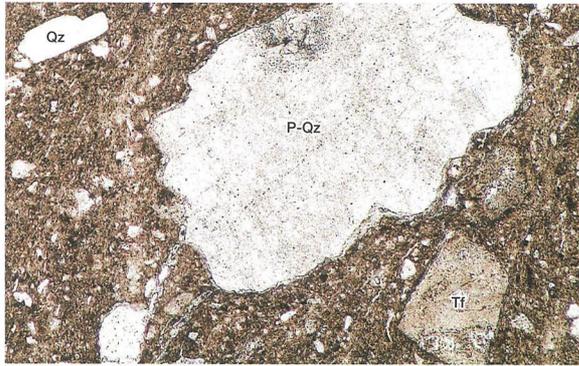
15. 資料No.15 埴輪 石見型盾 23区 SX2302



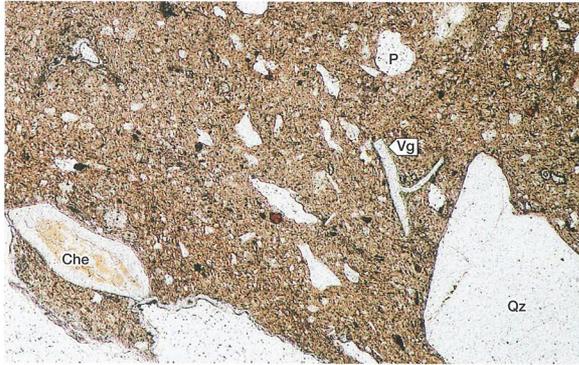
16. 資料No.16 埴輪 石見型盾 53区 SX5305窯跡灰原

Qz：石英。 Kf：カリ長岩。 Pl：斜長石。 Che：チャート。 Ss：砂岩。 Tf：凝灰岩。  
 P-Qz：多結晶石英。 Qz-V：脈石英。 Po：植物珪酸体。  
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

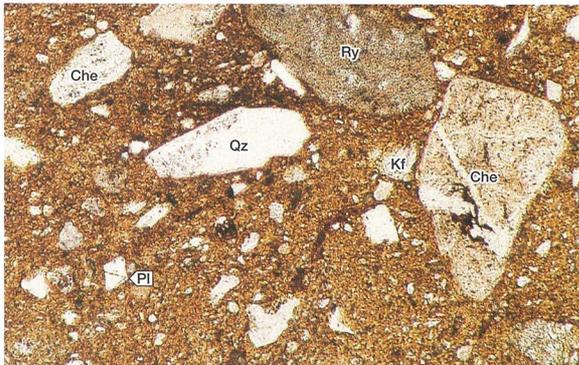
0.5mm



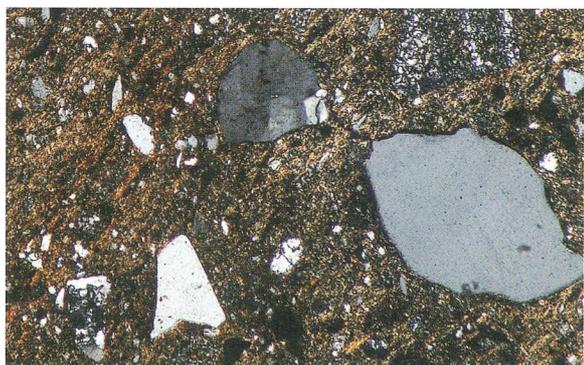
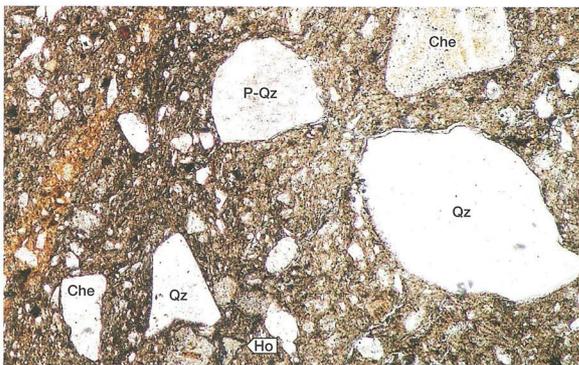
17. 資料No.17 埴輪 馬形 53区 SX5305窯跡灰原



18. 資料No.18 埴輪 円筒 53区 SX5305窯跡灰原



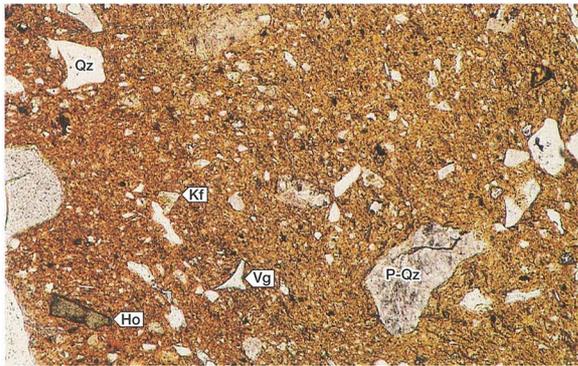
19. 資料No.19 埴輪 動物脚 53区 SX5305窯跡床面



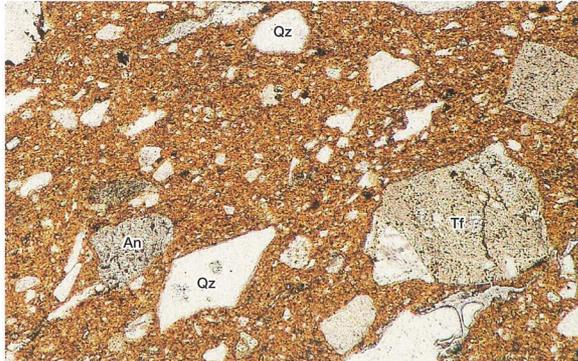
20. 資料No.20 埴輪 石見型盾 53区 SX5305窯跡床面

Qz：石英。 Kf：カリ長石。 Pl：斜長石。 Ho：角閃石。 Che：チャート。 Tf：凝灰岩。  
 Ry：流紋岩。 P-Qz：多結晶石英。 Vg：火山ガラス。 P：孔隙。  
 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

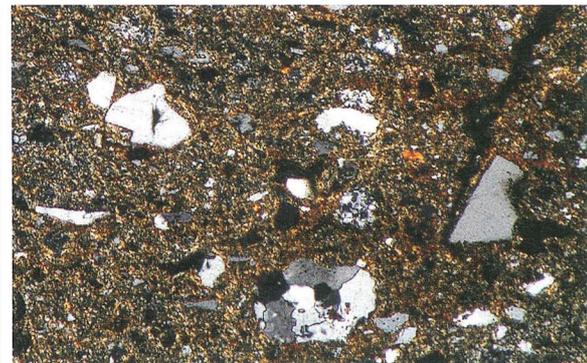
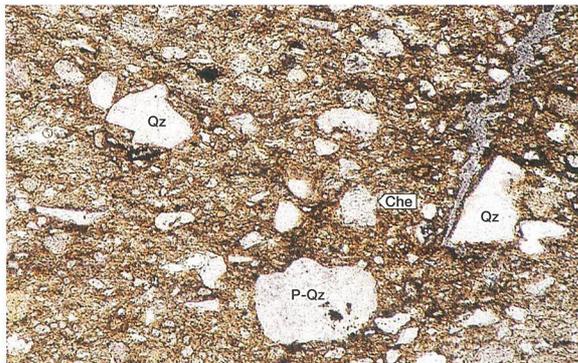
0.5mm



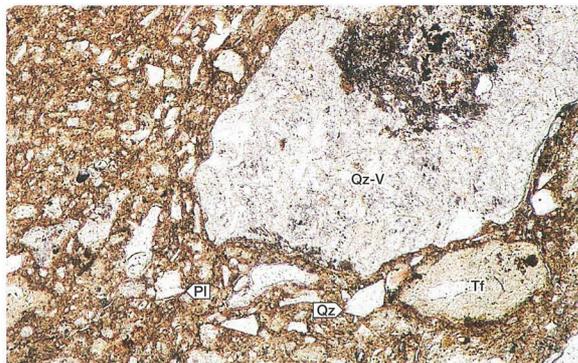
21. 資料No.21 埴輪 石見型盾 53区 SX5305窯跡床面 円筒



22. 資料No.22 埴輪 家形 53区 SX5305窯跡床面



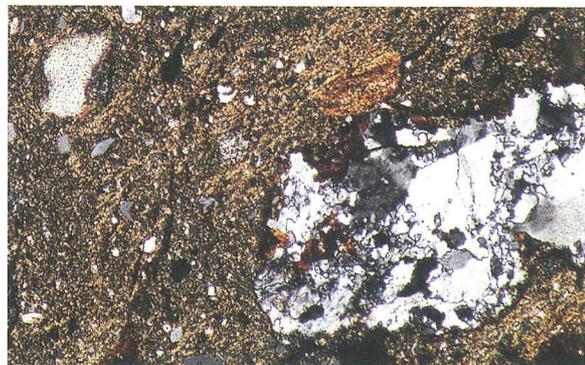
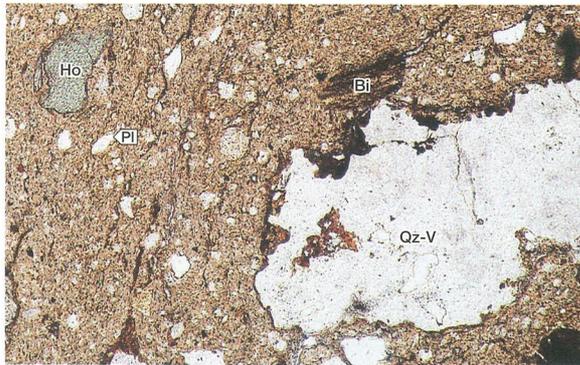
23. 資料No.23 埴輪 淡輪型技法 円筒 57区 SK5701



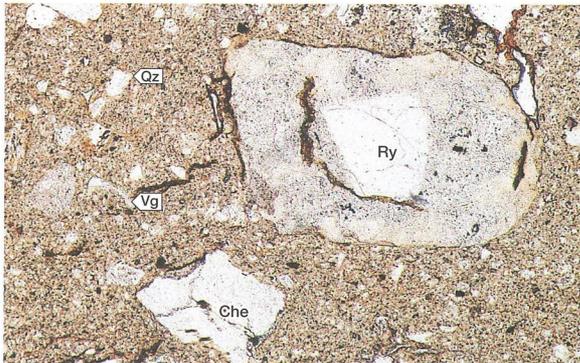
24. 資料No.24 埴輪 淡輪型技法 円筒 57区 SK5701

Qz：石英。Kf：カリ長石。Pl：斜長石。Ho：角閃石。Che：チャート。Tf：凝灰岩。  
An：安山岩。P-Qz：多結晶石英。Qz-V：脈石英。Vg：火山ガラス。  
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



25. 資料No.25 埴輪 石見型盾 23区横 表採



26. 資料No.26 埴輪 石見型盾 23区横 表採

Qz：石英. Pl：斜長石. Bi：黒雲母. Che：チャート. Ry：流紋岩. Qz-V：脈石英.  
Vg：火山ガラス.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



## 例 言

1. 本書は加古川市野口町坂元・野口に所在する坂元遺跡の発掘調査報告書である。
2. 坂元遺跡の調査は、加古川市坂元・野口土地区画整理組合が施工する東播都市計画事業坂元・野口土地区画整理事業に伴うものである。
3. 分布調査は平成11年度に、確認調査は平成14年度に、本発掘調査は平成15～17年度に行った。すべて兵庫県教育委員会が調査主体となり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が調査担当した。
4. 本発掘調査は、平成15年度は平田博幸・久保弘幸・鐵 英記が、平成16年度は岡田章一・渡辺 昇・西口圭介・山上雅弘・鐵が、平成17年度は渡辺・山上・長濱誠司が担当した。
5. 調査で使用した方位は国土座標第V系を使用し、水準は兵庫県加古川土木事務所および加古川市建設課設定の2級基準点を使用した。
6. 基準点の測量ならびに平面図の図化は㈱パスコ、㈱大設に委託して実施した。遺物出土状態や土層断面図は調査員・調査補助員が実測した。
7. 遺構写真は調査担当者が撮影した。図版1の空中写真は国土地理院撮影のものを使用した。それ以外の空中写真は㈱パスコ、㈱大設に委託して撮影したものである。遺物の写真については、一部を除いて㈱タニグチ・フォトに撮影を委託した。
8. 整理作業は、平成18～20年度の3カ年に渡って、平成18年度は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で、平成19・20年度は兵庫県立考古博物館で行った。
9. 執筆は調査担当者が行い、坂元遺跡の地形分析については立命館大学青木哲哉氏に玉稿を賜った。また、放射線炭素による年代測定は㈱加速器分析研究所、胎工分析はパリノ・サーヴェイ㈱に委託し、その成果を掲載した。
10. 編集は篠宮 正・鐵・森本貴子・矢木加奈子・川村由紀・佐々木誓子の協力を得て渡辺が行った。
11. 本書にかかる遺物や図面・写真などの資料は、兵庫県立考古博物館(加古郡播磨町大中 500)ならびに兵庫県立考古博物館魚住分館(明石市魚住町清水立合池の下630-1)に保管している。ご活用ください。
12. 発掘調査・整理調査にあたって、地元関係者をはじめ多くの方々・機関のご協力・ご指導をいただきました。感謝致します(敬称略・順不同)。

奈良文化財研究所・加古川市教育委員会・  
神戸市教育委員会・明石市教育委員会  
高橋美久二・和田晴吾・木本雅康・山中敏史  
馬場 基・青木哲哉・奥田 尚・辻川哲郎  
西川英樹・山本 崇



加古川市の位置

# 坂元遺跡Ⅱ

## 本文目次

### I はじめに

1. 調査に至る経過（篠宮）	1	4. 平成16年度本発掘調査の経過（渡辺）	8
2. 確認調査の結果（篠宮）	2	5. 平成17年度本発掘調査の経過（渡辺）	9
3. 平成15年度本発掘調査の経過（鐵）	8	6. 整理作業の経過（渡辺）	10

### II 位置と環境

渡辺	12
----	----

### III 調査結果

1区（鐵）	16	20・21区（渡辺）	40	38区（鐵）	63
2区（鐵）	22	23・24区（渡辺）	40	40区（西口）	65
3区（鐵）	25	25区（渡辺）	41	42～45区（長濱）	73
4区（鐵）	26	26区（渡辺）	42	46区（長濱）	75
5～10区（山上）	27	27区（渡辺）	44	47区（長濱）	75
11区（渡辺）	28	28区（渡辺）	44	48・49区（長濱）	75
12・13・14区		29・39区（西口）	46	50区（山上）	76
（渡辺・友久）	29	30区（西口）	47	51区（山上）	77
15区及び16区・19区		31区（渡辺）	50	52区（山上）	77
段丘下部分（西口）	32	32区（西口）	52	53区（渡辺）	78
16区・19区		33・34区（西口）	53	54・55区（渡辺）	79
段丘上部分（渡辺）	34	35区（渡辺）	54	56区（長濱）	79
17区・22区（西口）	37	36・41区（鐵）	55	57区（渡辺）	81
18区（渡辺）	39	37区（鐵）	56		

### IV 遺物

1. 縄文土器（鐵）	82	6. 土製品（渡辺）	90
2. 弥生土器（鐵）	82	7. 瓦（渡辺）	91
3. 古墳時代の遺物（渡辺）	82	8. 石器（鐵）	93
4. 奈良・平安時代の遺物（渡辺）	84	9. 金属器（鐵）	95
5. 中世の土器・陶磁器（岡田）	88	10. 木製品（渡辺）	95

### V 科学分析

1. 坂元遺跡の地形環境	青木哲哉	99
2. 坂元遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	（株）加速器分析研究所	115
3. 坂元遺跡Ⅱ出土弥生土器および埴輪の胎土分析	パリノ・サーヴェイ（株）	119
4. 和同開珎の材質同定	篠宮	133

### VI まとめ

1. 弥生時代	鐵	136
2. 古墳時代	渡辺	140
3. 奈良時代の中心遺構	渡辺	143
4. 条里型地割の復元と集落の考察	西口	146

### VII おわりに

渡辺	153
----	-----

# I はじめに

## 1. 調査に至る経過

### 1. 調査の契機

加古川市野口町坂元地区と野口町野口地区にまたがる、別府川より南東側、加古川バイパスより南西側、県道野口尾上線の北西側、国道2号とJR山陽本線とのほぼ中間から北東側の一带に土地区画整理が計画された。この一带は加古川中心部から約1.5kmと近いのにもかかわらず、進入路が狭く、不定形で小規模な耕作地が広がっていた。

このため、地権者164名が、加古川市坂元・野口土地区画整理組合を設立し、平成13年10月15日に認可を受けた。施工面積は約32.4haで、事業期間は当初、平成13年度から平成18年度にかけての6箇年を予定したが、最終的には平成21年度までの9箇年となった。事業地に含まれる地名は加古川市野口町坂元字坂之下・字クラク・字大坪・字一ツ松・字北浦、加古川市野口町野口字西ノ沢・字出水・字越水・字山ノ越・字五三味・字長箆・字土ブタイがある。

坂元・野口土地区画整理事業に先立ち、兵庫県東播磨県民局加古川土木事務所が加古川駅周辺の東播磨都市計画都市高速鉄道JR山陽本線等連続立体交差事業を計画した。平成2年12月に都市計画の決定がなされ、平成5年3月に建設省より事業認可が行われた。事業期間は平成4年度から平成15年度の12年間を予定し、事業用地内のJR山陽本線の高架化が行われ、平成15年6月26日に供用を開始した。

また、坂元・野口土地区画整理事業に併行して、兵庫県東播磨県民局加古川土木事務所がJR山陽本線に直交する主要地方道加古川小野線(東播磨南北道路)道路改良事業と白ヶ池川改修事業を計画した。

坂元・野口土地区画整理事業における埋蔵文化財の調査は、組合施工のため本来は地元教育委員会である加古川市教育委員会が実施すべきであるが、兵庫県東播磨県民局加古川土木事務所鉄道高架・東播磨南北道路対策室が担当する主要地方道加古川小野線(東播磨南北道路)道路改良事業における埋蔵文化財の調査と加古川土木事務所工務2課が担当する白ヶ池川改修事業における埋蔵文化財の調査を一体として実施することとした。事業規模が大きく加古川市教育委員会では対応できないため、兵庫県教育委員会が関連する事業を一体として埋蔵文化財の調査を実施することとした。なお、契約は区画整理組合と行い、費用負担は按分して行った。

### 2. 坂元遺跡の発見と既往の調査

#### 1). 分布調査

今回の事業予定地内では、周知の埋蔵文化財は知られていなかった。ただし大規模開発であるため、事業計画に先立ち加古川市教育委員会が加古川市加古川高架対策部加古川駅周辺整備課からの依頼を受け、事業計画予定地内の埋蔵文化財の有無を確認し、将来の措置を考慮する資料を得るために分布調査を実施した。

分布調査は平成11年2月1日から2月5日の延べ5日間、実施した。

分布調査は、休耕田など地表面の観察が不可能な場所が多く存在していたが、調査の結果、広い範囲に奈良時代を中心とした遺物が分布していることが判明した。平成10年度に新たに散布地として遺跡分布図に登録され、地名を取って坂元遺跡と命名された。

## 2). 既往の調査

坂元遺跡は坂元・野口土地区画整理事業に先立ち、JR 山陽本線等連続立体交差事業が行われた。平成11年6月29日から7月1日にかけて区画整理とほぼ同じ範囲の立体交差事業予定地内のJR線の南側の確認調査を行った。この結果、西端から70mの範囲について本発掘調査が必要であると判断した。確認調査の結果に基づき、平成12年1月17日～3月17日にかけて本発掘調査を実施した。この結果、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物20棟、弥生時代の土坑などを検出し密度の濃い遺跡であることが判明した。

平成15年度には40区の南側から国道2号に続く主要地方道加古川小野線(東播磨南北道路)道路改良事業用地内の確認調査を実施し、本発掘調査が必要であると判断した。平成16年度に本発掘調査を実施した結果、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物16棟を検出し、坂元遺跡が広範囲に広がることが判明した。

## 2. 確認調査の結果(図版6～9)

### 1. 確認調査の概要

分布調査の結果を踏まえ、確認調査を実施することとした。確認調査は平成14年9月30日付けの加古川市坂元・野口土地区画整理組合理事長からの依頼により、平成14年10月28日から平成15年3月25日までの「坂元遺跡発掘調査」の委託契約を結び、実施した。

この間、加古川市坂元・野口土地区画整理組と東播磨県民局加古川土木事務所と加古川高架対策部加古川駅周辺整備課と加古川市教育委員会に対して、JR線の北側と南側の2回に分けて発掘調査の状況説明を行った。

### 2. 確認調査の方法

確認調査は事業計画の主要地方道加古川小野線(東播磨南北道路)道路改良事業、白ヶ池川改修事業、坂元・野口土地区画整理事業の都市計画道路部分と区画道路部分を中心に約50m間隔で、図上で調査区を設定した。調査区は2m×10mの規模で当初80箇所(1T～80T)を設置した。調査区は北端を1Tと呼称し、南東に向かって2T・3T・・・とし、折り返しながら南端の80Tまで設置した。実際に確認調査を実施するにあたって、坂元・野口土地区画整理組合の役員の方に立ち会って頂き調査区を設定した。この時点で、耕作を行っている畑や、資材置き場になっている土地、JR山陽本線沿いの地点については、近接する地点にずらして調査区を設定した。また、畦を跨ぐ調査区や掘削残土置き場が確保できない地点も近接する地点に調査区をずらした。これにより、21地点で道路等の範囲内から外れた。調査区の設定時における聞き取りにより、当初図上で設定していた44T部分の水田は旧国鉄山陽本線の線路敷きのために大きく掘削していることが判明し調査不要と判断したため、欠番とした。調査を進めていくうちに補足調査が必要になった2箇所(81T・82T)を追加し最終的に81箇所の調査区の調査を行った。

調査は、遺構・包含層の有無や深さなどを確認することを目的として行ったため、遺構を検出しても完掘を行わない調査区や最終面まで調査を行わなかった調査区もある。調査は表土である盛土や水田耕作土などの無遺物層などをパワーショベルによって掘削し、遺物包含層以下は人力によって掘削した。耕作土と下層の土は分けて掘削を行い、調査終了後は埋め戻しを行った。記録は写真と図面をとった。複数の遺構検出面が存在する場合は、それぞれの検出面で記録をとった後、下層へ調査を進めていった。平面的な位置関係は調査区的位置を座標で管理し、高さは水準で管理した。

確認調査に併行して、地形の改変などの聞き取り調査を、組合理事を中心とする地権者に実施した。また現況地図から微地形の等高線を復原し、確認調査の成果と合せて調査の必要範囲の判断材料とした。

### 3. 確認調査の担当

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 藤本 修三

主幹 苦瓜 一成

主幹 輔老 拓治

企画調整班 主任調査専門員 井守 徳男

主査 深井明比古

総務課 課長 森 俊雄

調査担当 調査第3班 調査専門員 小川 良太

主査 篠宮 正

主任 仁尾 一人

調査補助員 折井千枝子

森崎由起子

船曳 景子

松尾有里子



調査風景

### 4. 確認調査の結果

確認調査の発掘調査成果と微地形の復原及び聞き取り調査から、本発掘調査の必要範囲の線引きを行った。

微地形の復原は現地での聞き取りや地形観察を行うとともに、地籍図を参考に計画段階の標高入りの1/1,000の地形図で等高線を復原した。

本発掘調査が必要であると判断した地域は次のとおりである。

1T・10Tが存在する地区は別府川の左岸に位置し段丘上に立地する。中世の土坑と溝を確認し、土師器・須恵器・瓦が出土した。

4T・7T・8T・9T・11Tが存在する地区は白ヶ池川の右岸の段丘縁辺に立地する。古代の柱穴・溝を確認し、土師器・須恵器・弥生土器などの土器が出土した。

6T・22Tが存在する地区は別府川の左岸に位置し低地に立地する。古墳時代の水田畦畔・水路を確認し、土師器が出土した。

16T・81Tが存在する地区は白ヶ池川の右岸に位置し段丘縁辺に立地する。弥生時代の土坑と溝、時期不明の柱穴を確認し、多量の弥生土器と土師器が出土した。

23T・30T・31Tが存在する地区は白ヶ池川の左岸に位置し低地に立地する。水田畦畔・溝を確認し、埴輪・瓦が出土した。

24T・25T・26T・19T・20Tが存在する地区は白ヶ池川の左岸に位置し段丘縁辺に立地する。土坑・ピット・溝を確認し、土師器・須恵器が出土したが、量は少ない。

36T・37T・38T・39T・45T・46T・47T・53T・54T・55Tが存在する地区は別府川と白ヶ池川の左岸に位置し段丘縁辺に立地する。古代の柱穴・溝、古墳時代の土坑、弥生時代の土坑など遺構の密度が

濃く、土師器・須恵器・弥生土器などの土器が多量に出土したほか、瓦、鉄製品が出土した。

33T・35T・41T・49T・50T・51T・57T・58Tが存在する地区は段丘内部に立地する。ピット・溝を確認し、土師器・須恵器などの土器、瓦などが出土した。

59Tが存在する地区は別府川の左岸に位置し低地に立地する。古代の遺物包含層で土師器・須恵器などの土器、木器、和同開珎銅銭が出土した。

60T・61T・62T・63T・64T・68T・69T・70T・71T・76T・77Tが存在する地区は別府川の左岸に位置し段丘上に立地する。古代の柱穴・溝・落ち込みを確認し、土師器・須恵器などの遺物も多量に出土した。

66T・73T・74Tが存在する地区は段丘内部に立地する。古代のピット・落ち込み・溝を確認し、古代の土師器・須恵器・瓦が出土したが、量は少ない。

なお、本来16T・81Tと同じ地区に含まれる15T部分の掘削を行ったところ、耕土直下で基盤となるにぶい黄橙色極細砂層を検出した。地権者に聞き取りを行ったところ、近年大型機械を入れて、2筆の水田を1筆にしており、かなり削平を行っているため、本発掘調査範囲から除外した。

また、36T・37T・38T・39T・45T・46T・47T・53T・54T・55Tと同じ地区に含まれる当初44T(欠番)とした網掛けのA地区は旧国鉄の線路敷設時に盛土として大きく掘削しており、本来の地形を表していないことが聞き取り調査で判明した。

白ヶ池川の流路は別府川改修時にC-Dの流路からC-E間を掘削して付け替えており、新たにC-Dは道路となり、網掛けのB地区は河川掘削の残土置き場となり地形が改変している。

以上、別府川と白ヶ池川の段丘縁辺に立地する、古代を中心として、縄文時代から中世の遺跡であることが判明し本発掘調査が必要であると判断した。

これ以外の地区は、本発掘調査の必要がないと判断した。

## 5. 確認調査の成果

確認調査による成果は基本的には、本発掘調査の調査区の中に含まれるものは本発掘調査の報告の中で合せて記述した。ここでは、確認調査を実施した後、道路や河川部分にかからなかった確認調査区の成果について報告する。

なお、北端に位置する1Tと10Tの区域は主要地方道加古川小野線(東播磨南北道路)道路改良事業として平成18年度と平成20年度に本発掘調査を実施しており、『坂元遺跡Ⅳ』として報告する予定である。

### 1). 確認No.6T(図版10・272)

調査区北端の別府川左岸の低地に立地している。別府川に平行する調査区である。大きく2面の遺構面を検出した。

上層は水田面を検出し、下層では溝を検出した。上層の水田面では調査区のほぼ南端の水路に伴う大畦畔を検出した。水田面の標高は約3.7m、大畦畔の高さは約40cmである。

下層の溝は調査区の北端で東西に流れる溝である。幅1m程度、深さ約40cmである。

遺物は下層面から土師器小型丸底壺1が出土した。

### 2). 確認No.10T(図版272)

調査区北端の別府川左岸の段丘上に立地している。段丘に平行する東西方向の調査区である。攪乱が大部分を占めていたが、直交する溝を検出した。遺物は包含層から土師器土錘2が出土した。

4). 確認No.14T(図版272)

事業地東端の4区の東側に位置し、白ヶ池川左岸の段丘上に立地する。JR線に平行する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。東側と西側で落ち込みを検出した。

遺物は包含層から須恵器鉢8が出土した。

5). 確認No.18T(図版272)

2区と4区の間位置し、白ヶ池川左岸の低地に立地する。JR線に平行する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。

遺物は黒褐色土層から須恵器碗6が出土した。

6). 確認No.20T(図版272)

事業地東端の4区の東側に位置し、白ヶ池川左岸の段丘上に立地する。JR線に平行する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。北側で落ち込みを検出し、須恵器甕7が出土した。

7). 確認No.22T(図版10・272)

52区の西側で別府川の川沿いに位置する。JR線に平行する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。大きく2面の遺構面を検出した。

上層では水田面を検出し、下層では溝を検出した。上層の水田面は調査区のほぼ中央に直交する畦畔を検出し、東西2筆の水田面を検出した。水田面には約6cmの植物質混じりの洪水砂が被っている。標高は東側の水田が4.1m、西側の水田が4.05mである。下層の溝は調査区の南端で東西に流れる溝と中央部に位置する溝である。南端の溝SD01は幅1.4m、深さ約60cmである。

遺物は黒色土から土師器高坏3・小型器台4、製塩土器5が出土した。

9). 確認No.35T(図版273)

5区の南側に位置しJR線に平行する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。3条の溝を検出した。遺物は包含層から須恵器鉢16が出土した。

8). 確認No.46T(図版11・272)

20区と18区の交点付近に位置しJR線に平行する調査区である。調査区の西側1/3は20区に含まれているが、東側2/3は本発掘の調査区外である。本発掘の調査区外で土坑を1基(SK01)検出した。

土坑SK01は東西方向に長軸をもつ不整楕円形で、長さ2m以上、最大幅1.3m、深さ0.4mを測る。方形周溝墓の溝の一部である可能性もある。

遺物は弥生時代中期の広口壺9・10・脚付無頸壺11・甕12・13・イダコ壺14が出土した。壺9・10と甕13の底部には穿孔が存在する。上層の包含層からは須恵器鉢F15が出土した。

9). 確認No.50T(図版273)

9区に一部かかりながらJR線に直交する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。溝を検出した。遺物は包含層から土師器羽釜17が出土した。

10). 確認No.59T(図版12・273)

28区と30区の間位置し、別府川左岸の段丘直下の低地に立地する。JR線に直交する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。別府川左岸の段丘直下から別府川方向に向かって傾斜する堆積層がある。第6層から奈良時代の土師器や須恵器とともに和同開珎銅銭が出土した。

遺物は第4層の灰色砂層から土師器小型甕19・坏20~22、須恵器坏蓋25・皿B蓋26が出土している。土師器坏20の底部外面にはヘラ描きの「×」と墨書「无」が存在する。坏21の底部外面には墨書「神」が存在

する。坏蓋25の内面には墨痕が存在する。

第6層のオリーブ黒色シルト層から弥生土器台付鉢18、土師器高坏23・椀24、須恵器皿27・甕C28・提瓶29・甕30が出土している。

和同開珎の銅銭M1は、厚さ1.34mmと薄手で精密な「新和同」で遺存状態は良好である。銭径縦24.72mm、横24.82mmで、重さ2.50gを測る。面の輪郭幅は1.5mmから2.1mmで、方孔は縦6.26mm、横6.37mm、内郭は縦7.6mm、横8.0mmを測る。表面には、時計回りに「和同開珎」と表記されており、裏は無文である。第V章で成分分析の結果を詳述している。

#### 11). 確認No61T(図版12・274)

31区と40区の間位置し、別府川左岸の段丘上に立地する。JR線に平行する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。溝と柱穴を検出した。遺構の切り合いが著しく、多量の遺物が出土したため遺構の完掘は行わなかった。このため、北壁沿いに深さを確認するために幅30cmのトレンチを入れた。

調査区の全体に斜め方向に走る複数の溝と柱穴を検出した。

遺物は、遺構を検出するまでに遊離した状態で出土している。奈良時代の土師器高坏40・甕43・44・イイダコ壺41・42・土鍾45・円筒形土器46・竈47・48、須恵器坏A49～53・坏B54・坏蓋55・56・壺Q58・鉢F60・61・甕62などが出土している。

55・56は須恵器坏B蓋である。55は天井部を丸い笠形に作り、口縁部は強く屈曲する。天井部外面の中心部分には降灰のない部分が存在する。56は天井部が扁平で頂部が突出する摘みを持つ。天井部には中心に向かって放射状に2箇所の押印があり、間隔から推定して、本来は3箇所に押印されていたものと考えられる。印影は陽出の「全」一字の周囲に、縦2.5cm×横2.0cmと縦2.0cm×横1.4cmの二重の長方形の陽出郭がある。焼成前に刻印されているため、本来の印のサイズからは縮んでいると考えられる。押印箇所の内面にのみ繊維痕跡が存在しているため、内面を布で押さえて、押印したと考えられる。57は表面採集の須恵器であるが、56と同様に「全」の押印があるため、ここで報告する。小破片であるため、不確かではあるが56と同様に蓋である可能性が高い。

「全」を押印している須恵器は加古川市西ノ池窯から出土しており、同じ印影であるため、西ノ池窯で生産された可能性が高い。県内で出土している刻印土器は多紀郡衙推定地の篠山市東浜谷遺跡の「郡」と姫路市丁・柳ヶ瀬遺跡の「榎」の逆字、芦屋市芦屋廃寺の「寺」刻印須恵器鉢がある。

#### 12). 確認No67T(図版273)

事業地西端の55区の南側に位置し、別府川左岸の低地に立地する。JR線に平行する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。弥生時代の流路を検出した。遺物は黒色土層から弥生時代後期の甕31が出土した。

#### 13). 確認No76T(図版12・273)

30区と31区の交点付近の西側に位置するJR線に平行する調査区であり、本発掘調査の調査区外である。溝(SD01)と柱穴を検出した。

溝SD01は調査区の東端に位置し調査区に直交している。幅約4m、深さ2.3mで、最下層に黒色の礫を多量に含む極細砂が堆積している。規模と位置関係から30・31区のSR3101と同一である。

遺物は、溝SD01の最下層の黒極細砂層から弥生時代後期の壺・甕・鉢の底部(32～36)が出土し、上層の黒褐極細砂から奈良時代の土師器椀37・甕38と須恵器壺39が出土した。

第1表 坂元遺跡確認トレンチ一覧

確認	本発掘	本発掘調査区	遺構	主要遺物	縄文	弥生	古墳	古代	中世	不明	量
01	必要	南北道	溝 中世土坑	須恵器 瓦					○		少ない
02		×									無し
03		×									無し
04	必要	51区	溝	弥生 須恵器		○			○		少ない
05		×									無し
06	必要	確認(52区)	古墳水田大畦畔・溝	土師器 桃核		○	●				多い
07	必要	49区		土師器					○		少ない
08	必要	49区	古代柱穴	須恵器 土師器				○	○		多い
09	必要	11区	古代柱穴	須恵器 土師器				○	○	○	多い
10	必要	南北道	溝	須恵器 土師器 土錘				○			少ない
11	必要	確認(48区)	ピット・溝	土師器						○	少ない
12		×		須恵器 土師器				○			少ない
13		×									無し
14		×	自然流路	須恵器 土師器					○	○	多い
15		×									無し
16	必要	1区	柱穴・弥生土坑	弥生 古墳		●	○				多い
17		×		須恵器 土師器						○	少ない
18		×		須恵器 土師器			○			○	少ない
19	必要	4区	溝	須恵器 土師器				○	○		多い
20	必要	確認(4区)	落ち込み	須恵器 土師器					○		少ない
21		×		須恵器 土師器							少ない
22	必要	確認(52区)	水田面・古墳溝	土師器			●				多い
23	必要	確認(15区)	水田面 溝	縄文土器	○						少ない
24	必要	確認(14区)	土坑								無し
25	必要	2区	断面に小ピット								無し
26	必要	2区	溝・ピット	須恵器 土師器				○			少ない
27		×	包含層のみ(足跡)	須恵器 土師器				○	○		少ない
28		×		須恵器 土師器							少ない
29		×									無し
30	必要	53区	水田面 溝	須恵器 土師器 丸瓦 埴輪				○	○	○	多い
31	必要	19区	水田畦畔 溝								無し
32		×		須恵器 土師器					○	○	少ない
33	必要	3区	ピット	須恵器 土師器				○	○		少ない
34		×	包含層のみ	須恵器 土師器				○	○		少ない
35	必要	確認(6区)	溝3	須恵器 土師器 瓦				○	○	○	多い
36	必要	23区	柱穴列・古墳土坑	須恵器 土師器 弥生 円筒埴輪		○	●				多い
37	必要	37区	古代柱穴	弥生 須恵器 土師器 青磁		○		○	○		多い
38	必要	22区	古代大溝	須恵器 土師器 製塩土器 平瓦		○		●			多い
39	必要	17区	溝	須恵器 土師器					○		少ない
40		×		須恵器 土師器						○	少ない
41	必要	3区	溝	土師器						○	少ない
42		×	土坑?	土師器						○	少ない
43		×	溝?	須恵器 土師器 丹波焼					○		少ない
44	欠番										無し
45	必要	37区	ピット	須恵器 土師器				○	○		少ない
46	必要	一部20区	弥生土坑 溝2	弥生土器 須恵器 土師器 製塩土器 瓦		●	○	○	○	○	多い
47	必要	18区	ピット	須恵器 土師器				○			少ない
48		×		須恵器 陶器					○		少ない
49	必要	3区	溝・ピット	須恵器 土師器 青磁				○	○		多い
50	必要	9区	溝	須恵器 土師器 白磁				○	○		多い
51	必要	確認(7区)	溝	須恵器 土師器					○	○	少ない
52		×		須恵器 土師器				○			少ない
53	必要	25区	土坑	弥生 土師器		○		○			多い
54	必要	37区	古代柱穴	須恵器 土師器 弥生 墨書土器 砥石 製塩土器 竈 平瓦		○		●			多い
55	必要	確認(21・27区)	溝	須恵器 土師器				○	○	○	多い
56		×		須恵器 土師器				○	○		少ない
57	必要	確認(10区)	溝・ピット	須恵器 土師器				○	○		多い
58	必要	確認(9区)	溝・ピット	須恵器 土師器				○	○	○	少ない
59	必要	確認(30区)	古代包含層	須恵器 土師器 弥生 竈 墨書 土器 瓦 和同開珎 木器 砥石		○	○	●			特に多い
60	必要	31区	古代柱穴・溝	須恵器 土師器 瓦				●		○	多い
61	必要	確認(39区)	古代柱穴・溝	須恵器 土師器 瓦				●			特に多い
62	必要	確認(29・32区)	ピット・足跡	須恵器 土師器				○			少ない
63	必要	確認(29区)	ピット	須恵器				○			少ない
64	必要	35区	溝	須恵器 瓦				○			少ない
65		×									無し
66	必要	確認(47区)	ピット 落ち込み								無し
67	必要	確認(55区)	流路	弥生		○					少ない
68	必要	31区	古代柱穴・落ち込み	須恵器 土師器 竈 イイダコ壺			○	●			多い
69	必要	40区	古代溝・柱穴	須恵器 土師器 土錘 瓦				●			多い
70	必要	一部32区	古代溝	須恵器 土師器				○			少ない
71	必要	33区	溝	須恵器 土師器				○			少ない
72		×									無し
73	必要	確認(45区)	ピット								無し
74	必要	確認(44区)	溝	須恵器 土師器 瓦				●	○		多い
75		×									無し
76	必要	確認(31区)	古代大溝・柱穴	須恵器 土師器 瓦				●	○		多い
77	必要	一部40区	古代溝・ピット	須恵器 土師器 竈				○			多い
78		×									無し
79		×		須恵器 土師器				○	○		少ない
80		×									無し
81	必要	1区	溝	弥生 須恵器		○			○		多い
82		×	ピット?	須恵器 土師器				○			少ない

●中心となる遺物

### 3. 平成15年度の調査経過

平成15年度に本発掘調査は、平成14年度の確認調査により遺構が分布すると判断した範囲のうち、事業地内の道路敷き部分と白ヶ池川の河川改修対象部分について、4地区にわたり実施した。うち1区(調査番号2003162)は北から南に延びる段丘面前端の緩斜面上に位置している。弥生時代の方形周溝墓をはじめとする遺構が検出された。また、この地区は調査の進展に伴い、遺構が当初の調査対象地よりも広がることが明らかになったため、兵庫県教育委員会、兵庫県加古川土木事務所、加古川市都市計画部、加古川市坂本・野口土地区画整理組合の四者協議を経て南東部を拡張した。

2区(調査番号2003197)、3区(調査番号2003198)、4区(調査番号2003199)は白ヶ池川左岸の完新世段丘面に位置し、中世初頭の遺構と水田を検出し、下層では縄文時代の遺構も検出した。調査面積は4地区の合計で7,626㎡、調査期間は平成15年10月23日から平成16年3月6日である。

平成16年2月7日には1区の調査成果を中心に地元説明会を開催した。

#### 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 平岡 憲昭

主幹 輔老 拓治

総務課 課長 織田 正博

企画調整班 主任調査専門員 井守 徳男

主査 深井明比古

課付 稲田 毅

調査担当 調査第1班 主査 平田 博幸・鐵 英記

調査第2班 主査 久保 弘幸

調査参加者 松井利可子・赤壁千恵子・井守 芳美・覚野 郁子



地元説明会風景

### 4. 平成16年度の調査経過

本調査2年目の平成16年度は最も広い面積を対象として調査を実施した(調査番号2004001)。前年度の調査区(1～4区)を継承して、5区から調査区名を与えた。当初5区～40区までの36区の計画であったが、工事計画から早期に橋脚工事を発注するために36区の南側も年度内調査終了の必要性が生じたことから、41区を追加し計37区の調査を実施した。調査面積は最終的に18,502㎡となった。

調査は梅雨明け間際の7月7日に現地立会を行い、調査準備は翌週に調査区の伐採作業や調査区設定を行った。調査準備期間を経て翌々週の7月21日に32区の機械掘削から着手した。32区の機械掘削終了後、引き続き31区に移動し機械掘削を行った。平行して別の機械で36区の調査も着手した。原則的に3地点ずつ平行して調査を進行していった。32区から33・34区へ移動し、36区からは40区へと調査地区を変えている。5区から10区にかけては昨年度の調査で遺跡の末端であることが判明していたので、本調査を直に行わず確認調査に変えた。この年は台風の上陸も複数あり、豪雨もあった。低地が多い調査区であったことから冠水によって調査の障害となったが、無事終了した。8月12日に1回目の空中写真を

撮影した。確認調査地点も含めて11の調査区を対象とした。8月20日に第1回の中間検査を受け、断ち割り作業などの補足調査を実施した。36区は東播磨南北道路予定地になっており、その部分については埋め戻し作業を行った。調査は継続して18区など新たな地区の機械掘削に入り、調査面積の広い40区とともに平行して作業を行った。10月7日に5地区を対象として2回目の空中写真を撮影し、10月11日に現地説明会を開催した。主にJR山陽本線より南側を対象として実施した。翌週から同様に26区などの作業を開始し、5地区を対象として11月12日に3回目の空中写真を撮影した。続いて37区など11地区を対象として12月16日に4回目の空中写真を撮影した。本体工事の都合から当初契約に入っていなかった41区を新たに追加し5地区を対象として5回目の空中写真を平成17年1月20日に撮影した。翌日の1月21日に2回目の現地説明会を実施した。主にJR山陽本線より北側を対象とした。最後に28区など5地区を2月17日に6回目の空中写真を撮影した。その後断ち割り作業などと37区などの埋め戻し作業を行い、3月14日に器材・遺物などを魚住分館・兵庫県埋蔵文化財調査事務所に搬出し、今年度の調査を終了した。

#### 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

	所長 平岡 憲昭
	主幹 輔老 拓治
総務課	課長 織田 正博
企画調整班	主査 深井明比古
	課付 稲田 毅



調査風景

調査担当	調査第1班	主査	岡田 章一・渡辺 昇・西口 圭介・山上 雅弘・鐵 英記
	調査参加者		折井千枝子・松井利可子・森本 文子・浅井 達也・黒川 清夏 前田 陽子・菊島 昌子・五百蔵道代・佐藤 朋子・藤田 由美

## 5. 平成17年度の調査経過

本調査3年目にあたり、残りの16地区を対象とした(調査番号2005001)。調査面積は6,807㎡である。今年度の調査は5月26日から行った。現地立会を行ったのち、6月1日に調査区を設定し、杭を打設するとともに調査前の検測を行った。JR線路の南側で、区画整理事業南東部の42区から調査をはじめ、43・44区と移り、平行して事業地南西部の54・55区も調査を行った。続いて52区そして面積の最も広い53区と開始していった。42区など5区を7月14日に空中写真を撮影した。続いて8月10日に46区など4地区を対象として2回目の空中写真を、そして最後に9月2日に53区など2区を対象に3回目の空中写真を撮影した。9月10日に現地説明会を実施した。兵庫県はじめての埴輪窯跡の調査ということもあり、400人近くの方が訪れた。断ち割り作業などの補足調査を行い、昨年度同様、東播磨南北道路部分の53区だけ埋め戻し作業を行った。9月28日に遺物・写真類や器材を搬出して、坂元遺跡の調査を終了する。

#### 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

		所長	平岡 憲昭
		主幹	輔老 拓治
総務課		課長	織田 正博
企画調整班		主査	深井明比古
		課付	稲田 毅
調査担当	調査第1班	主査	渡辺 昇・山上 雅弘
		長濱	誠司
調査参加者			森崎由起子・松井利可子
			森本 文子・赤壁千恵子・山本 香織・大川 歩美・前田 陽子
			菊島 昌子・五百蔵道代・佐藤 朋子・藤田 由美



調査風景

## 6. 整理作業の経過

整理作業は現地調査事務所で発掘調査の進捗に応じて実施していった。各年度出土遺物の洗浄・注記作業や台帳作成などを実施した。現地説明会などに合わせるために、一部接合復原作業も実施したが、僅かである。

本格的に作業に入ったのは、整理作業契約を交わした平成18年度からで、3カ年に渡って作業を行った。平成18年度は主に魚住分館で遺物の洗浄作業・注記作業を実施した。平成19年度に組織は兵庫県立考古博物館に変わったが、継続して作業を行った。1区出土土器の接合から順次実施し、平行して実測作業も行った。平成19年度第1四半期は名称変更だけで荒田庁舎で作業を継続し、引越しを行い、第2四半期からは大中遺跡の横に本拠を移して作業を行った。本格的な作業に入ったのはこの時期からである。兵庫県立考古博物館の最初の接合作業として開始した。原則的にI区から順に作業を行った。総遺物量が多いことから、すべての遺物を搬入することはできないので、魚住分館において粗作業を行い、区単位で兵庫県立考古博物館に運んだ。接合作業と平行して実測作業も行った。

平成20年度は石器・金属器の実測から始め、トレース・遺物写真撮影から報告書刊行までの作業を実施した。作業量が多く、嘱託員の方々には大変なご迷惑とご協力を得た。感謝致します。

### 調査の組織

調査主体 兵庫県教育委員会

(平成18年度)

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

	所長	平岡 憲昭
	主幹	池田 正男
	主幹兼総務課長	若生 晃彦
	主査	内匠 靖彦
整理保存班	主任調査専門員	岡崎 正雄
	主査	菱田 淳子
	主任	岡本 一秀
	嘱託員	早川亜紀子



整理作業風景

(平成19・20年度)

調査事務 兵庫県立考古博物館

事務担当 埋蔵文化財調査部長 若生 晃彦

主幹 岡崎 正雄

総務部 総務課長 若狭 健利

課長補佐 山下 裕恵

主査 橋本 弘昭

整理保存班 調査専門員 西口 和彦

森内 秀造

主査 菱田 淳子

篠宮 正

整理担当 担当課長補佐 岡田 章一・渡辺 昇

主査 西口 圭介・山上 雅弘

鐵 英記・長濱 誠司

嘱託員 池田 悦子・古谷 章子

森本 貴子・栗山 美奈

八木 和子・宮田 麻子・前山三枝子・眞子ふさ恵・友久 伸子

島田 留里・岡崎 輝子・西口 由紀・島村 順子・佐伯 純子

垣本 明美・矢木加奈子・蔵 幾子・宮野 正子・前川 悦子

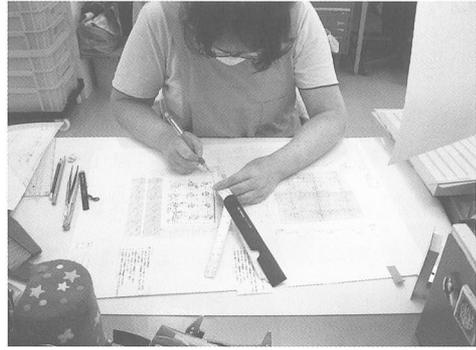
高瀬 敬子・奥野 政子・川村 由紀・佐々木誓子・又江 立子

早川 有紀・長濱 重美・西村 美緒・荒木由美子・藤池かづさ

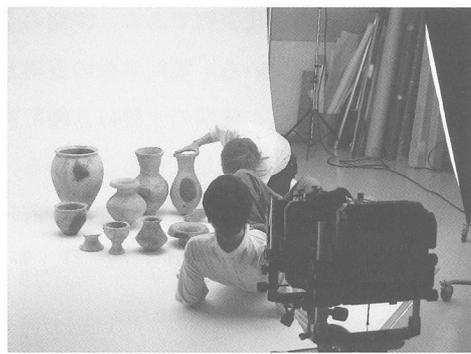
嶺岡 美見・吉村あけみ・大西 美緒

保存処理担当 主査 岡本 一秀

嘱託員 大前 篤子・藤井 光代



整理作業風景



整理作業風景

## II 位置と環境

坂元遺跡は加古川市野口町坂元・野口にまたがる遺跡である。加古川左岸の低湿地に広がる遺跡で、今回の区画整理事業まで周知されていなかった遺跡である。現状では北は国道2号加古川バイパス、南側は国道2号、西側は別府川、東側を県道加古川別府港線で画された範囲である。中央に南北を分断するようにJR山陽本線(神戸線)が通っている。地形的には北側から東側に段丘面が広がり、その部分は大きく削平を受けるなどして遺構面は残存していない。西側は別府川が南流し、その低地が周辺に広がっている。北東から南西に向かって白ケ池川が流れ、調査地内で別府川に合流している。

加古川は兵庫県最大の河川で丹波(佐治川)と北播磨の水を集めて播磨灘に注いでいる。上中流域を流れ日岡丘陵を越えてから加古川平野となるが、地形的には段丘面や自然堤防などが広がり、旧河道も多く存在し複雑な地形をしていたようである。坂元遺跡周辺もそのような地形を呈しており、段丘面と低地に分けられ、そこに旧河道が複数走っている。

坂元遺跡周辺では溝之口遺跡や古代山陽道と加古駅家などがよく知られた遺跡であるが、それ以外にも多くの遺跡が存在する。旧石器時代の遺物は播磨では主に溜池で採集されている。段丘面に構築された溜池の開削が洪積層まで達していることから、旧石器が出土することになったものである。多数の溜池から採集事例が報告されている。兵庫県下の旧石器遺跡の多くがこのようなところで確認されている。遺跡数は加古川市周辺が最も多く知られている。加古川市志方町広尾東遺跡の調査が行われたことで、新しい兵庫県の旧石器研究が進んだ学史に残る遺跡である。志方町は七ツ池遺跡もあり、比較的状況が明らかな地域である。小型のナイフ形石器から国府型ナイフ、有舌尖頭器まで採集されている。坂元遺跡近くでは北側の日岡山遺跡でナイフ形石器や楔形細石刃が出土している。加古川市街では表面採集や軽易な調査ならびに他時期主体の調査で出土しているだけで層的な調査は行われていない。播磨町と接する山之上遺跡で包含層が確認されているだけである。ナイフ形石器や翼状剥片などが出土している。明石市では西脇遺跡で明美礫層の上下で石器が出土している。

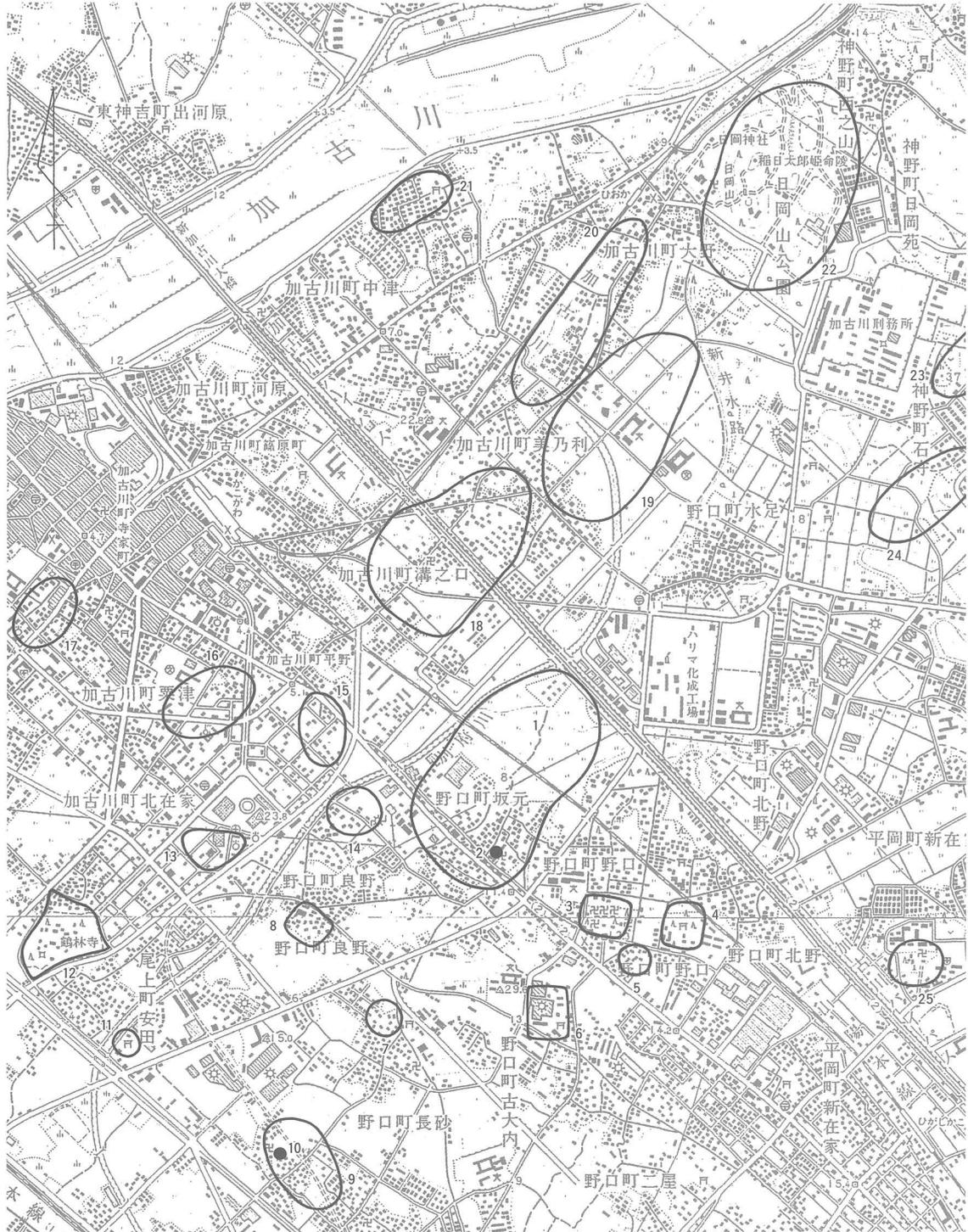
縄文時代の遺跡は余り知られていない。八幡町宮山遺跡で後期の敷石住居跡が確認されており、複数の遺構が検出されているのが代表例である。晩期の土器は東神吉遺跡や砂部遺跡・岸遺跡があり、すべて弥生前期の土器と共存している。晩期単独の遺構として検出された今回の坂元遺跡の調査例は、加古川市の晩期の代表例になろう。後期の土器は八幡町宮山遺跡・志方町東中遺跡で採集されている。有舌尖頭器が志方町や西神吉町で出土していることから、早期の遺跡も存在し、遺構も確認されるであろう。

弥生時代になると遺跡数は急激に増加する。前記の縄文晩期の土器を出土した遺跡では前期の土器が



溝之口遺跡(1968年)

出土している。東神吉遺跡・岸遺跡は前期で生活を終え、後期に再開するムラである。岸遺跡では晩期の土器に糊圧痕があることで注目された。砂部遺跡は前期の焼成土坑が興味深い遺構である。大きな溝も存在する。東中遺跡は中期まで継続し、志方町の拠点集落である。弥生時代の大きな集落は加古川左岸に移動し、坂元遺跡北西部に集落を構える。拠点集落は加古川町溝之口遺跡でその北西に美乃利遺跡・大野遺跡と続いている。坂元遺跡は中期になっ



- |                 |            |           |
|-----------------|------------|-----------|
| 1. 坂元遺跡         | 10. 聖陵山古墳  | 18. 溝之口遺跡 |
| 2. 伝和泉式部宝篋印塔    | 11. 安田構居跡  | 19. 美乃利遺跡 |
| 3. 教信寺          | 12. 鶴林寺    | 20. 大野遺跡  |
| 4. 野口庵跡         | 13. 北在家遺跡  | 21. 中津構居跡 |
| 5. 野口城跡         | 14. 具平塚遺跡  | 22. 日岡古墳群 |
| 6. 古大内遺跡 (賀古駅家) | 15. 平野遺跡   | 23. 石守古墳群 |
| 7. 長砂構居跡        | 16. 栗津遺跡   | 24. 水足古墳群 |
| 8. 細田構居跡        | 17. 栗津大年遺跡 | 25. 横倉城跡  |
| 9. 長砂遺跡         |            |           |

坂元遺跡の位置と周辺の遺跡



宮山古墳群

流の大野遺跡でも中期から後期に至る集落が形成されている。これらの遺跡群は別府川沿いに展開しており、有機的な関係にあると思われる。前期から継続していることも注目される。播磨を代表する加飾する壺の生産地であることもよく知られている。坂元遺跡では中期後半から後期に至る集落が確認されており、別府川の下流部(溝之口遺跡から約600m)に位置している。さらに下流には加古川町北在家遺跡が存在する。後期からのムラである。低地以外の段丘上でも遺跡は確認されている。西条廃寺下層からは中期後半の竪穴住居跡が検出され、平岡町長畑遺跡でも中期後半の竪穴住居跡が検出されている。加古川右岸では平荘町平山遺跡で中期後半のやはり円形住居跡が調査されている。平山遺跡と中西台地遺跡は丘陵上のムラで眺望に優れており、高地性集落の範疇に入れる意見もある。典型的な高地性集落は確認されていない。砂部遺跡は後期になって居住を再開し大型集落で、右岸の拠点集落と考えられている。同様に溝之口遺跡南東から6 km離れている大中遺跡は、溝之口遺跡から分村し後期からの拠点集落に成長した遺跡であろう。特殊なものとして銅鐸がある。八幡町望塚の大地上で銅鐸が出土している。大正初期に古墳状隆起の下から扁平紐式の袈裟襷文銅鐸が工事中に出土したもので、最近の調査で方墳が確認され、銅鐸埋納との関連が注目されている。

弥生時代後期後半になると丘陵部に墓が構築され、墳丘墓としてとらえられる。著名な八幡町西条52号墓が代表である。木の蓋となる竪穴式石室を主体部とするもので内行花文鏡・鉄剣と弥生土器が出土している。神吉山5号墓・八つ塚古墳群も貼石をめぐらす墳丘墓と考えられている。西播磨に墳丘墓が多いと思われるが、加古川下流部でも遺跡が増加している。

前中期古墳が集中している地域である。日岡丘陵から西条にかけて前方後円墳を中心に多数の古墳が造築されている。弥生の遺跡と比べると左岸に集中するようになる。日岡山古墳群は坂元遺跡北西部の丘陵上に広がる古墳群で5基の前方後円墳と20数基以上の円墳から成っている。山腹斜面の円墳は後期の古墳である。尾根最高所に全長85mの褶墓と呼ばれる日岡陵古墳があり、南側に前方後円墳である西大塚・南大塚・勅使塚の3基と東西車塚・狐塚の円墳が集中して所在する。確実ではないが、竪穴式石室を主体部としており、同範関係のある三角縁神獸鏡も複数出土している。他の鏡や石釧・埴輪も出土している。北東に約2 km離れた城山から南に延びる尾根上に立地する西条古墳群が築かれている。日岡山古墳群よりは新しい時期に主に築かれるが、西条52号墓のような弥生末期の墓も存在し、次代の西条廃寺まで台地上に存在する。5世紀に大型の古墳が構築される。全長100mの前方後円墳である行者塚を東端に帆立貝式の尼塚・人塚が北西に向かって並んでいる。行者塚古墳は後円部に3基の粘土槨を主体部としており多くの副葬品が出土している。2ヶ所に造り出しも作られており祭祀に使われた土製品が出土している。各種埴輪も豊富に出土している。古墳群中には3基の中期古墳以外は後期の古墳で、



溝之口遺跡(1968年)



西条廃寺

横穴式石室を主体部とするものもあるが、多くは木棺直葬であり、群によって方墳主体のグループもある。まとまった中期までの古墳群は左岸であるが、右岸にも存在する。長慶寺山古墳や天坊山古墳で竪穴式石室を主体部とし鏡などが出土している。池尻2号墳がそうで、後期になると逆に大型石室の古墳は左岸に存在する。平荘湖古墳群に多数の古墳があり、特に稚児窟とも呼ばれる池尻16号墳は兵庫県最大級の石室である。両袖式の全長14m 近くの大型石室で竜山石製の家形石棺が置かれていた。古墳群からは初期須恵器など興味深い遺物も多数出土している。舩田山古墳も最大級の横穴式石室で大型石室も多く築造されており、右岸の方が突出していることがわかる。加古川周辺は竜山石の産地である。周辺の石材を切り出して石棺に利用したことは明白である。中世になって石棺仏として数多く利用されており、今もその製品が各地に残っている。石棺そのものも多く遺存している。家形石棺と組み合わせ石棺の両者がある。

奈良時代になると、西条古墳群の存在する段丘上に西条廃寺が建立される。また、北東側の低い段丘面には石守廃寺が、坂元遺跡東側には野口廃寺が存在する。加古川右岸には中西廃寺・山角廃寺が建立されており、上流の加西市域とともに古代寺院の多い地域である。西条廃寺は西条古墳群の立地する丘陵上に立地する法隆寺式の伽藍配置を採る寺院である。瓦積基壇で現在遺跡公園として整備されている。遺物には瓦類以外に風鐸・水煙・相輪の銅製品が出土している。創建瓦は単弁八葉蓮華文軒丸瓦で、播磨国府系瓦の1種である毘沙門式のセットも出土しており、7世紀末から9世紀中ごろまで継続する寺院である。石守廃寺も法隆寺式伽藍配置の寺院で8世紀前半に創建され9世紀まで存続した寺院で、水煙・風鐸などが出土している。低い段丘面に立地しており、周囲の眺望は余りよくない。野口廃寺は坂元遺跡東側に位置しており、古代山陽道の北側に建立された私寺と考えられている。現在野口神社が鎮座しているところである。礎石建物が確認され8世紀初頭創建で9世紀まで存続した寺院と考えられている。隣接して教信寺があり、南側には古大内遺跡が存在する。古大内遺跡は賀古駅家推定地で馬40疋が配されたとされる日本最大の駅家である。古大内遺跡では鬼瓦や瓦当類が出土しているが、全体像は明らかになっていない。古代山陽道の駅家の推定は確実視されており、賀古駅家の規模・内容が明らかになることは古代交通史研究を進める上で重要である。



駅ヶ池

### Ⅲ 調査結果

#### 【1区】

この地区は白ヶ池川北側の位置し、段丘の先端部から低地への変換点で、地形分類では完新世段丘面と現氾濫原を含む。現耕土の下には黄灰砂質シルト(図版14: C-C'断面、以下略: 1層)、褐灰砂質シルト(2層)があり、中世の遺物を含む。その下には暗褐灰シルト(3層)があつて、この層の上面が中世の遺構面となっている。弥生時代の遺構面は暗褐砂質シルト(21層)、暗灰褐シルト質砂礫(24層)や黄灰白細砂質シルト(25層)の上面で検出されている。中世の掘立柱建物跡、古墳時代遺構の大畦畔、弥生時代の方形周溝墓等を検出した。特に、弥生時代の方形周溝墓は中期後半に属するもので約10基を検出した(図版13)。

#### 遺構

##### 掘立柱建物 SB0101(図版15)

調査区南東部で検出した。2×2間の総柱建物である。棟軸はN37°Eで、柱間は一定しておらず、1.8~2.7mを測る。柱穴の直径は30cm程度、柱痕跡の直径は10~15cm程度で、検出面からの深さは30cmである。

##### 柱穴 P0114(図版17)

調査区南東部、SB0101の南西で検出した。直径約80cmの円形を呈し、検出面からの深さは30cmである。灰黄褐粗砂とにぶい黄褐細砂で埋まっていた。

SB0101、P0114の周辺およびSX0104の周溝上面には直径20~30cm程度の柱穴が多数検出されている。特にSB0101の南東側では、方向と同じくする掘立柱建物が少なくとも1棟以上存在していた可能性がある。

#### 土坑(図版16・17・19)

SK0101 調査区の中央の南端、SD0101に近接した位置にある。長さ6.3m、幅2.2m、検出面からの深さ50cmを測る溝状の土坑である。黒褐砂質シルトを主体とする埋土で埋まっていた。

ここからは弥生土器の広口壺63・65・67、太頸広口壺64・69、細頸壺68、甕70等が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と思われる。なお、63~65・69は体部下半あるいは底部に明らかな焼成後穿孔が認められることから、方形周溝墓の一部である可能性も捨てがたい。

SK0102 調査区中央部の東寄り検出された。長さ2.7m、幅1.1m、検出面からの深さ55cmを測る。暗褐~褐シルトと黒褐中砂によって埋まっていた。図化できる遺物は出土していないため、所属時期は不明である。

SK0103 調査区中央部の北寄り、SK0111とSX0106の間で検出された。長さ3.05m、幅1.3m、検出面からの深さ20cmを測る。暗褐色から褐色細砂で埋まっていた。

弥生土器の直口壺71が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

SK0107 調査区中央部の南端、SX0109の北側に隣接し、SD0101に切られている。残存部分で、長さ4.1m、幅1.9mを測り、検出面からの深さは46cmである。黒褐シルト混じり細砂が薄く堆積した後、灰黄褐砂礫で埋まっている。

弥生土器の小型直口壺72と縄文土器の浅鉢73が出土している。弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

**SK0108** 調査区中央部の南端で検出した。南側は大きく攪乱されている。残存部分で長さ4.0m、幅1.9m、検出面からの深さ30cmを測る。

**SK0111** 調査区中央、北端に位置する。長さ1.05m、幅0.37m、検出面からの深さ10cmを測る溝状の土坑である。埋土はにぶい黄橙色の細砂から中砂である。弥生土器の壺が出土したが、残存状況が悪く、図化できなかった。

#### 方形周溝墓・土坑墓

##### **SX0101**(図版20・21)

調査区中央部東寄りに位置する。現状では三方に周溝が配された方形周溝墓である。南から西にかけて逆L字状に区画され、西溝と北溝の間には切れ目があり、東溝は検出できなかった。周溝内周で計測した場合、長辺8.4m、幅4.5mを測る。溝の深さは平均で約20cmである。

主体部は組み合わせ木棺と考えられ、墳丘のほぼ中央で検出した。掘方の規模は長さ2.7m、幅1.0mで、木棺痕跡の規模は長さ2.3m、幅0.85mを測る。木棺痕跡の両小口には小口板の痕跡があり、幅約45cm、厚さ15cmで、底面からの深さは東側が12cm、西側が25cmを測る。棺痕跡南東部で打製石剣 **S20** と石鏃 2点 **S8・S13** が出土している。出土した土器には広口壺 **66・74~78**、太頸広口壺 **79**、細頸壺 **80・81**、直口壺 **82・壺83~85**、甕 **86・87**、その他 **88~92** がある。**86・87** が北東周溝、**78・80・82・83** が南西周溝の西コーナー、**74・76・77・85** が南西周溝の中央、**66・81・84・88~92** が南西周溝東端で出土している。

##### **SX0102**(図版13)

**SX0104**の南東に接して検出した。北西の周溝は **SX0104** と共有し、南東の周溝は途切れ、南西側は **SD0101** によって削平されている可能性がある。周溝内周の規模は約4.0m×4.0mで、周溝の深さは約60cmを測る。主体部の痕跡は確認できなかった。出土した土器には広口壺 **93**、口縁内突帯広口壺 **94**、甕 **96**、高杯 **97・98・99**、脚台 **100・101** と縄文土器の小片 **102・103** がある。うち、**97・98** が北西周溝で、**93・96・100** が北東周溝から出土している。また、北西周溝からは石棒 **S50** も出土している。

##### **SX0103**(図版22・23)

方形周溝墓群のほぼ中央部で検出した。**SX0105・SX0106** を切る。北東角、南西角、北西角の3箇所周溝が切れ、南東の周溝は **SX0101** と共有、南西の周溝は **SX0102・SX0104** と共有する。周溝内周の規模は、長辺約10.8m、短辺約6.0mを測る。周溝の深さは30~35cmである。

主体部は木棺と考えられ、2箇所その痕跡を確認している。主体部1は墳丘東寄りで長軸がマウンドの長辺に平行する。掘方は長さ2.3m、幅1.0m、木棺内法は長さ1.9m、幅0.73m、検出面からの深さは約10cmである。主体部2は墳丘西寄りで長軸がマウンドの短辺とほぼ平行する。掘方は長さ2.0m、幅0.85m、木棺内法は長さ1.65m、幅0.6m、検出面からの深さは8cmである。主体部2からは石鏃 **S12** が出土している。

周溝からは、弥生土器の広口壺 **105~111**、短頸壺 **112**、小型無頸壺 **113・114**、壺底部 **115**、甕 **116・117**、脚台 **118~120** が出土し、うち、**107・110・112・117・118** が北西の周溝から、**105・106・108・109・114・116・118・120** が北東の周溝から出土している。また、遺構検出時に古墳時代の高杯脚部片 **121** と中世の土師器鍋片 **104** が出土している。

##### **SX0104**(図版24・25)

方形周溝墓群の北西端で検出した。周溝内周の規模は長辺が12.7m、短辺が7.0mで、群内で最大の

ものである。墳丘南西側は **SD0101** によって削平されている。周溝の状況から東角と南角は周溝が途切れていた可能性がある。周溝の深さは約50cm である。

主体部は木棺であると思われる、墳丘の中央部東寄り、長辺に平行して並置された2基の木棺痕跡を検出した。主体部1は掘方が長さ2.4~2.55m、幅1.0m、木棺外法が長さ1.92m、幅0.82mで、検出面からの深さは10cm程度である。主体部2は掘方が長さ2.47m、幅1.26m、木棺外法が長さ1.8m、幅0.65mで、検出面からの深さは同じく10cm程度である。

周溝からは、広口壺**122・123・125**、無頸壺**124・135**、直口壺**126~128**、水差**129**、甕**130~132**、鉢**133**、高杯**134・136**、脚台**137**が出土している。うち、**124・127・137**が北西の周溝から、**122・123・126・129・131**が北コーナー部付近から、**125・128・130・132・134・135・136**が北東の周溝が **SX0103** 北西周溝を切った付近から、**133**が東コーナー部から出土している。

#### **SX0105** (図版26・27)

方形周溝墓群の北東部で検出した。**SX0101**の北東に隣接し、**SX0103**に切られ、**SX0106**を切る。周溝の内周は長辺が2.85m、短辺が1.9mで、周溝の深さは約40cmを測る。周溝の東角と南角に切れ目がある。墳丘中央で主体部の痕跡を検出した。長さ2.0m、幅0.95mで、検出面からの深さは約13cmを測る。

周溝からは広口壺**139**、細頸壺**140**、甕**141・142**、高杯**143**が出土している。うち、**139・142・143**が北東の周溝から、**140・141**が南西の周溝から出土している。

#### **SX0106** (図版26・27)

方形周溝墓群の北東部で検出した。**SX0103**と**SX0105**に切られる。周溝の内周は2.1m×2.15mで、周溝の深さは17~20cmを測る。周溝の東角に切れ目がある。墳丘中央で主体部状の落ち込みを検出した。長さ1.07m、幅0.78mで、検出面からの深さは約13cmを測る。周溝北コーナー部付近から甕**144**が出土している。

#### **SX0107** (図版28)

調査区の東端近くで検出した。直径1.6m程度の浅い土坑状の落ち込み2基からなる。方形周溝墓の北角と南角になる可能性があるため、一括して**SX0107**とした。北側の土坑は深さ約40cmで、広口壺**145**が出土している。南側の土坑は深さ約20cmで、こちらからも広口壺**146**が出土している。

#### **SX0108** (図版28)

調査区の中央北東端で検出した。検出面からの深さが5cm程度の溝状遺構で、中央で一度途切れている。残存部の長さは約2.5m、幅は30から50cmを測る。横たわった直口壺**147**が半分以上削平された状態で出土している。

#### **SX0109** (図版19)

調査区の南東端で検出した。南西側を **SD0101** に切られている。周溝内周規模は長辺が約8.0m、短辺が約6.2mで、周溝の深さは約40cmである。周溝の北角と東角は切れている。北東周溝から広口壺**148**と水差**149**が出土している。

#### **SK0105** (図版18)

調査区中央、北端近くに位置し、**SK0106**とほぼ間隔なしで並んでいる。掘方は長さ2.9m、幅1.9m、検出面からの底面までの深さ40cmを測り、中央南寄り、木棺の痕跡を検出した。木棺痕跡は長さ1.97m、幅0.6mで、断面観察によると、組み合わせ式木棺であったと考えられる。木棺痕跡内から石

鏃 S9が出土している。

#### SK0106(図版16)

調査区中央、北端近くに位置し、SK0105とほぼ間隔なしで並んでいる。長さ2.15m、幅0.9~1.0m、検出面からの深さ18cmを測る長方形の土坑である。底は2段掘りとなっており、下段の長さは約1.8mである。埋土は炭を含んだにぶい黄褐細砂からなり、ほぼ中央からサヌカイト製の打製石鏃 S4・S10・S17・S19と土器細片が出土した。詳細な時期は不明ながら、弥生時代の木棺墓ではないかと考えられる。

#### 溝 SD0101(図版13)

調査区南半で方形周溝墓群を分断し、南東から北西へ流れる流路である。総延長は約85m、幅2.6~4.8m、検出面からの深さは最大で75cmを測る。弥生時代中期後半の壺150・151、後期の甕152、古墳時代前期の土師器甕153と壺1351、奈良時代の須恵器壺底部154が出土している。弥生時代後期末頃に開削され、奈良時代にかけて埋没していったものと思われる。

#### SD0102(図版28)

調査区中央部の北側に位置し、SX0104に切られる。残存部の長さ約6m、幅0.8~1.4m、検出面からの深さは約15cmを測る。広口壺155と水差156・157が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と思われる。方形周溝墓の一部である可能性もある。

#### 大畦畔(図版29)

調査区の北西脇で検出した。幅1.4~2.7mで、長さ約15mにわたって北西・南東方向に延びる。上部が削平されているため、高さは10cm程度で、北側に幅1.5mで深さ10cm程度の溝状の落ち込みが並行して走る。構築時期を直接示す遺物は出土していないが、畦畔南側の湿地部から6世紀代の須恵器杯蓋1284が出土しており、それ以降のものと思われる。

### 遺物

#### SK0101出土遺物(63~70：図版275・276)

広口壺、太頸広口壺、細頸壺、甕が出土している。広口壺は頸部に凹線、体部上半に櫛描文で加飾し、体部最大径が中位に来る。63は口縁部の加飾がなく、底部に穿孔を施している。65は口縁部が垂下し、凹線を施すとともに口縁部内外面、体部上半に浮文を施した加飾性の強いものである。底部付近に焼成後に穿孔を施す。67は口頸部のみであるが、口縁内突帯を持ち、垂下した口縁部には凹線と円形浮文を施し、頸部には押圧突帯を付加する。太頸広口壺は口縁部に凹線と大型の円形浮文、頸部から体部上半に櫛描は縄文と直線文を施している。文様構成・調整技法はほぼ同じだが、口縁の形態が少し異なり、64に比べて69は頸部がより太くなる。64は体部下半、65は底部に焼成後穿孔を行う。68は口頸部を欠くが、細頸壺で櫛描波状文・直線文に加え、連続刺突文も施している。70はくの字口縁を持つ甕である。これらの土器は篠宮編年の東播磨Ⅳ-3期(以下、同様)に位置付けられる。

#### SK0103出土遺物(71：図版276)

71は頸部の長い直口壺である。口縁直下に凹線を施す。底部に焼成後穿孔を行う。東播磨Ⅳ-3期である。

#### SK0107出土遺物(72・73：図版276)

72は小型の直口壺である。装飾を施さず、底部に穿孔を持つ。体部の張りが強く、東播磨Ⅳ期でも後半のものであろう。

#### SX0101出土遺物(74～92：図版276～278)

広口壺、太頸広口壺、細頸壺、直口壺、甕、高杯、無頸壺、鉢、脚台がある。74～78は広口壺で、78を除いて、頸部に凹線を巡らせるもので、拡張した口縁端部には凹線を施している。74は体部上半に櫛描直線文・波状文を施すとともに、連続刺突文も付加している。75は小型で、体部の文様は連続刺突文だけである。いずれも底部に焼成後穿孔を施す。76は体部に施文を行わないもので、底部付近に焼成後穿孔を行う。77・78は口縁部だけの破片で、77は口縁内にも浮文を巡らせている。79は太頸広口壺である。体部と頸部の境界が明瞭で、頸部が直立し筒状になる。櫛描波状文と直線文が頸部から体部上半に施される。80・81は細頸壺で、口縁部には凹線を施している。80は口頸部のみ破片であるが、頸部には加飾が及ばないようである。81は口縁部がやや膨らむとともに、櫛描文が頸部から始まって体部上半まで施され、円形浮文も付加される。82は直口壺で、口縁部にのみ凹線文を施す。83は壺の体部片で沈線が2条残る。84・85は壺の底部片で84には焼成後穿孔がある。86・87はくの字口縁甕で、86は小型のものである。両者とも体部外面下半にヘラミガキを施している。88は水平口縁を持つ高杯で、口縁端部を垂下させる。杯部の底に焼成後穿孔を施している。89は口縁部に蓋を固定する把手を持ち、浅い体部に脚台が付くもので、無頸壺とする。90は台付鉢の口縁部片と思われる。91・92は脚台で、裾部に面を持つ。これらは東播磨Ⅳ-3期のものと思われる。

#### SX0102出土遺物(93・94・96～103：図版278～279)

広口壺、口縁内突帯広口壺、甕、高杯、脚台と縄文土器の小片が出土した。93は広口壺で頸部に凹線を持たず、体部上半には連続刺突文を2列施す。94は口縁内突帯広口壺で、口縁部内面に断面三角形の突帯と扇形文を加え、頸部にも断面三角形突帯を巡らせる。体部上半は櫛描文で加飾し、底部に焼成後穿孔を持つ。96はくの字口縁甕で体部外面は全体にハケ目を施している。97～99は高杯である。97は水平口縁の杯部片で、口縁端部を垂下させる。100・101は脚台の破片である。これらの土器は94にやや古い要素が認められるものの、東播磨Ⅳ-3期でよいと思われる。102・103は縄文土器の小片で、晩期ものと思われる。

#### SX0103出土遺物(104～121：図版279～281)

広口壺、直口壺、小型無頸壺、壺底部、甕、脚台と古墳時代の土師器高杯、中世の土師器鍋が出土している。

105～111は広口壺で拡張した口縁端部に凹線を施し、頸部の残っているものについては頸部にも凹線を施す。105は口縁部片で、棒状浮文を施す。106は小型円形浮文と口縁内に扇形文を加え、体部には櫛描文が施されたと考えられる。107は口縁部には円形浮文を加えるが、体部には装飾を持たず、底部付近に焼成後穿孔を行う。108は口縁部の内外面に円形浮文を加え、体部に連続刺突文を施している。109は口縁の内外面の浮文に加え、口縁内面に櫛描波状文を施す。また、体部上半には直線文、波状文に加えて斜格子文、円形浮文も施した加飾性の高いものである。110は頸部に押圧突帯を施し、体部は無文の可能性が有る。111は凹線を持たず、小型の太頸広口壺としておく。112は短頸壺で頸部全体に凹線を施し、体部上半には櫛描直線文・波状文を施し、体部下半は丁寧なヘラミガキを行う。底部付近に焼成後穿孔を行う。内部に113が収められていた。113・114は紐孔がないイダコ壺状のもので、小型無頸壺としておく。115は壺の底部で、焼成後穿孔を施している。116・117はくの字口縁甕の体部片である。118～120は脚台である。119には楕円形の透かしが認められる。これらの土器は東播磨Ⅳ-3期に相当すると思われる。

121は古墳時代の高杯脚部片で円形の透かしを持つ。104は中世の土師器鍋片である。

**SX0104出土遺物(122～138：図版281～283)**

広口壺、無頸壺、直口壺、水差、甕、鉢、高杯、脚部が出土している。

122・123・125は広口壺である。122は折り曲げて垂下した口縁部の内外に連続する扇形文を施し、体部上半を櫛描文で飾り、突帯や凹線は持たない。底部に焼成後穿孔を施す。123は口縁部のみであるが、垂下した口縁には凹線を施し、内外に浮文を持つ。また、頸部には断面三角形突帯を複数付加している。125は小型の太頸広口壺とも言う器形で、装飾を全く持たないものである。126～128は直口壺である。126は口縁部および頸部に断面三角形突帯を巡らせ、体部も丸みを帯びるものである。体部上半に櫛描文を施し、底部の焼成後穿孔を持つ。127は口縁部に凹線を施すのみで、2個一組の紐孔が穿たれている。128は口唇部に刻みを入れ、口縁部を下方に拡張する。頸部から体部にかけて櫛描直線文のみを施す。底部に焼成後穿孔を施す。124・135は無頸壺である。124は図示はしていないが、同一個体と思われる脚台がある。体部上半に櫛描文を施している。135は口縁部が内側に折れ曲がる器形で、口縁直下に紐穴を穿つ。129は水差で、口縁部に凹線を施し、頸部には押圧突帯、体部中央に断面三角形突帯を巡らせる。体部上半は櫛描文を施す。130～132は甕である。130と132は小型、131は大型で、いずれも体部外面下半にヘラミガキを施す。131は底部外面に焼成後穿孔を行う。133はくの字口縁鉢で、口縁端部を僅かに跳ね上げている。134は椀形の杯部を持つ高杯で、口縁端部を拡張し、凹線を施す。136・137は脚部で、136には櫛描直線文が認められる。これらの土器は東播磨Ⅳ-3期に相当すると思われる。

**SX0105出土遺物(139～143：図版283)**

広口壺、細頸壺、甕、脚部が出土している。139は広口壺で口縁部に凹線と円形浮文、頸部に押圧突帯を巡らせる。体部は無文で、底部に焼成後穿孔を施す。140は細頸壺で口縁部に凹線、頸部から体部にかけて櫛描直線文・波状文を連続で施す。141・142はくの字口縁を持つ甕で、端部を少し跳ね上げる。142は体部外面下半にヘラミガキを施している。143は高杯あるいは無頸壺の脚部片で、底部に焼成後穿孔を施している。これらの土器は東播磨Ⅳ-3期に相当すると思われる。

**SX0106出土遺物(144：図版283)**

144はくの字口縁を持つ甕である。胴部の張りも弱く、口縁部のつまみ上げも殆どない。体部外面下半にヘラミガキを施している。底部に焼成後穿孔を行う。この土器は東播磨Ⅳ-3期に相当するものと思われる。

**SX0107出土遺物(145・146：図版284)**

広口壺が2点出土している。両者とも垂下した口縁に凹線を施し、口縁の内外に浮文を持つ。頸部にも凹線を施し、底部に焼成後穿孔を行う。145は体部上半の痛みが激しいが、櫛描波状文の痕跡があり、146と同様櫛描直線文・波状文を施していたと思われる。これらの土器はⅣ-3期に相当するものと思われる。

**SX0108出土遺物(147：図版284)**

147は直口壺である。口縁部に凹線を施し、体部は無文で、底部に焼成後穿孔を施している。東播磨Ⅳ-3期に相当するものと思われる。

**SX0109出土遺物(148・149：図版284)**

広口壺と水差が出土した。148は広口壺で、巻き込むように拡張した口縁部に凹線と円形浮文を施し、頸部に押圧突帯を付加する。体部上半に連続刺突文を3列施している。149は水差で胴の張る体部に脚

台が付く。口縁部に凹線、体部に連続刺突文を施している。東播磨Ⅳ－3期に相当するものと思われる。

#### SD0101出土遺物(150～154：図版285)

弥生土器の広口壺、受口口縁壺、甕、土師器の甕、須恵器の壺が出土している。150は広口壺で、拡張した口縁部に凹線を施し、頸部にも凹線を持つ。151は受口壺の口頸部片と考えられる。この2点は東播磨Ⅳ－3期頃のものと思われる。152の甕は口縁部を上方に拡張し、体部はタタキ調整を行う小型のもので、弥生時代後期前半のものと思われる。153は土師器の甕で、球形の体部を持ち、タタキの後ハケを施している。古墳時代前期のものと思われる。154は須恵器壺の底部である。外に踏ん張った高台を持つ。奈良時代のものと考えられる。

#### SD0102出土遺物(155～157：図版285)

広口壺と水差が出土している。155は広口壺で、頸部に凹線、体部上半にやや簡略な櫛描文を施している。156・157は水差である。両者とも体部が張る器形で、脚台が付く。156は無文、157は口縁部に凹線を施し、体部は無文である。これらの土器は東播磨Ⅳ－3期に相当するものと思われる。

#### 小 結

この地区では中世の掘立柱建物および、弥生時代中期後半の方形周溝墓群と木棺墓などが検出された。方形周溝墓群は溝や土坑として認識していたものを含めれば10基以上に上る。方形周溝墓から出土した土器の時期は、おおむね東播磨Ⅳ－3期に収まると考えられる。

これらの方形周溝墓は切り合い関係から、調査区北西の高い部分から低い部分へ順次築造されたと思われる。

(鐵)

## 【2区】

調査区は白ヶ池川の左岸に位置し、完新世段丘面にあたる。おおむね逆L字形を呈するため、実際の方位では北東から南西に延びる部分を南北部分、北西から南東へ延びる部分を東西部分と呼称する。調査区南北部分北半と東西部分では耕土層直下で灰白極細砂～細砂層(図版31、以下略：21・29層)からなる基盤層となる。調査南北部分南半で耕土下に、白ヶ池川の氾濫堆積層と考えられるにぶい黄褐細砂～粗砂層(2層)、灰黄褐極細砂～細砂層(24層)が堆積し、その下が灰白極細砂～細砂層(21・29層)の基盤層となる。12世紀頃の遺構と遺物、およびそれ以降に営まれた水田関連の遺構を検出した。

#### 遺 構

##### 掘立柱建物 SB0201(図版32)

調査区南北部分のほぼ中央で検出した。桁行は約6.9mで3間、梁行は約4.6mで2間の総柱建物である。桁の軸方向はN110°Eである。中の間の間隔が広いので、1間×2間の建物が東西に並ぶ可能性もある。柱穴の規模は直径25～30cmで、検出面からの深さは20～45cmを測る。

柱穴から土師器の鍋158と須恵器の椀159が出土した。11世紀後半から12世紀前半のものと思われる。

##### SB0202(図版33)

調査区東西部分の東端で検出した。桁行は約6.8mで2間、梁行は約4.6mで2間の総柱建物である。桁の軸方向はN110°Eである。柱穴の規模は約30～40cmで、検出面からの深さは15～40cmである。図示はしていないが、柱穴から東播系須恵器椀の破片1502が出土している。

#### SB0203(図版32)

調査区東西部分の東端で検出した。SB0202の南側に位置する。桁行は約4.4m以上で2間以上、梁行は約2.0m以上で1間以上の掘立柱建物である。桁の軸方向はN100°Eである。北側に雨落ち溝が付随し、調査区内で南への折れが認められることから、桁行は3間で収まるものと推定できる。柱穴の規模は約30cmで、検出面からの深さは30～50cmである。

#### 土坑(図版33～35)

SK0201 調査区南北部分と東西部分の交点近くで検出した。SK0205の南側に位置する。平面形は長軸52cm、短軸42cmの少し角張った楕円形を呈し、検出面からの深さは19cmである。炭を含む黄灰極細砂～細砂で埋められていた。

SK0202 調査区東西部分の西半で検出した。SK0203・0204の東側に位置する。平面形は長軸62cm、短軸50cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは13cmである。炭と灰、焼土ブロックを多く含む灰褐細砂～中砂層で埋められていた。

SK0203 調査区東西部分の西半で検出した。SK0204の西に隣接する。平面形は長軸105cm、短軸56cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは15cmである。炭を少し含む灰極細砂～細砂層で埋められていた。須恵器の椀160～162・1503が出土している。12世紀前後の遺構と考えられる。

SK0204 調査区東西部分の西半で検出した。SK0203の東に隣接する。平面形は長軸75cm、短軸58cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは20cmである。地山ブロックを含んだ灰極細砂～細砂で埋められていた。土師器の托163と鍋164が出土している。12世紀前後の遺構と考えられる。

SK0205 調査区南北部分と東西部分の交点近くで検出した。SK0201の北側に位置する。平面形は長軸53cm、短軸47cmのやや歪んだ円形を呈し、検出面からの深さは18cmである。地山ブロックを含む、黄灰細砂層で埋まっていた。

SK0206 調査区南北部分の中央で検出した。SB0201の南側に位置する。平面形は直径68～70cmの円形を呈し、検出面からの深さは6cmである。

SK0207 調査区南北部分と東西部分の交点で検出した。SD0202の東に位置する。長さ2.55m、最大幅1.15mで、検出面からの深さは約7cmである。

SK0208 調査区東西部分の西半で検出した。SK0202の南側に位置する。平面形は直径42～44cmの円形を呈し、検出面からの深さは8cmである。須恵器椀165が出土している。12世紀前後の遺構と考えられる。

SK0209 調査区東西部分の西半で検出した。SK0203の西側に位置する。平面形は長軸56cm、短軸44cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは26cmである。上面に灰黄極細砂～細砂が少量堆積していたが、殆どが灰と炭で埋められる。

下層土坑(図版39) 調査区南北部分の北端、縄文晩期の土器を含んだ層の下層で検出した。土坑そのものからの出土遺物はないが、縄文時代晩期以前の土坑と思われる。

SK0221 平面形は長径1.4m、短径0.88mの楕円形を呈し、検出面からの深さは16cmである。にぶい黄褐色と暗褐色の細砂で埋められていた。

SK0222 平面形は長径1.75m、短径1.1mの楕円形を呈し、検出面からの深さは10cmである。にぶい黄褐シルト混じり細砂で埋まっていた。

SK0223 平面形は長さ1.95m、幅0.6mの長楕円形を呈し、検出面からの深さは10cmである。にぶい

黄褐細砂で埋まっていた。

#### 不明遺構 SX0201 (図版34)

調査区南北部分の北端で検出した。SD0211の南側に位置する。平面形は長辺1.15m、短辺0.64mの隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは12cmである。壁面には焼土が見られ、内部には下層から炭、灰、灰・炭混じりの灰白および浅黄極細砂～細砂層で埋められていた。

#### 溝 (図版35～38)

SD0201 調査区南北部分と東西部分の交点で検出した。東側にSD0202がほぼ平行して流れている。検出長は14.0m、最大幅は約0.8m、検出面からの深さは6cmである。褐灰極細砂～中砂で埋まっていた。図化はしていないが、東播系の須恵器碗1501が出土している。

SD0202 調査区南北部分と東西部分の交点で検出した。西側にSD0201がほぼ平行して流れている。検出長は16.8m、最大幅は約0.9m、検出面からの深さは24cmである。褐灰極細砂～中砂で埋まっていた。

SD0203 調査区南北部分と東西部分の交点で検出した。検出長14.8m、幅0.35～1.1mを測り、検出面からの深さは10～23cmである。埋土はにぶい黄橙と灰黄細砂と粗砂で、弥生土器底部166が出土している。

SD0204 調査区東西部分の西半で検出した。SK0203・0204・0209の北側に位置する。検出長11.5m、幅27cmを測り、途中で直角に曲がる溝である。検出面からの深さは8cmで、褐灰細砂～中砂で埋まっていた。

SD0205 調査区東西部分の中央、北への突出部分で検出した。検出長4.8m、幅1.4m、検出面からの深さ44cmを測る。下から、灰極細砂～粗砂、灰白極細砂～中砂、灰黄極細砂～細砂、黒褐極細砂～細砂、褐灰シルト質細砂～細砂が堆積していた。

SD0206 調査区東西部分の中央、南への突出部分で検出した。検出長4.8m、幅0.52m、検出面からの深さ22cmを測る。灰黄極細砂～細砂と灰褐シルト質細砂～細砂で埋まっていた。

SD0207 調査区東西部分の中央で検出した。検出長18m、幅0.45から0.8m、検出面からの深さ8cmである。黄灰細砂で埋まっていた。

SD0208 調査区東西部分の東端で検出した。検出長13.5m、幅約1.7m、検出面からの深さ50cmを測る。下から灰極細砂～細砂、暗灰黄シルト質極細砂～細砂、灰細砂～極細砂、灰黄シルト質極細砂～細砂、灰オリーブ極細砂～細砂で埋まっていた。須恵器碗167と土師器鍋168が出土している。

SD0209 調査区南北部分の南半で検出した。検出長12.7m、幅1.3～2.4m、検出面からの深さ14cmを測る。灰黄褐極細砂～中砂で埋まっていた。図化はしていないが、東播系須恵器碗の破片1504が出土している。

SD0210 調査区南北部分の北半で検出した。SB0201の北側に位置する。検出長13m、幅0.3m、検出面からの深さ6cmを測る。にぶい黄橙極細砂～細砂で埋まっていた。

SD0211 調査区南北部分の北端で検出した。検出長13m、幅1.2m、検出面からの深さは30cmである。灰黄褐細砂～極細砂で埋まっていた。

#### 遺物

##### SB0201出土遺物(158・159：図版286)

158は土師器の鍋である。緩く開く口縁部を持ち、ハケ調整を施している。139は東播系の須恵器碗である。見込み部がくぼみ、明確な平底を持つ。11世紀後半から12世紀前半のものと考えられる。

#### SK0203出土遺物(160～162：図版286)

160から162はいずれも東播系の須恵器椀である。見込み部にくぼみがあり、明確な平底を持つ。11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

#### SK0204出土遺物(163・164：図版286)

163は土師器の托である。平底で回転ナデ成形である。164は土師器の鍋で、緩く開く口縁部を持ち、片口が付く。

#### SK0208出土遺物(165：図版286)

165は東播系の須恵器椀である。見込み部にくぼみがあり、明確な平底を持つ。11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

#### SD0203出土遺物(166：図版286)

166は弥生土器の底部片である。焼成前穿孔を行っている。

#### SD0208出土遺物(167・168：図版286)

167は東播系須恵器椀である。見込み部にくぼみがあり、明確な平底を持つ。168は土師器の鍋である。これらの土器は11世紀後半～12世紀前半のものと考えられる。

#### 小 結

この地区では11世紀後半～12世紀前半のものと思われる建物群と土坑群を検出した。土坑群にはSX0201のように炭・灰で埋まり、壁面が焼けたものや、SK0201・0202・0205・0209のように炭・灰を含む埋土で埋まったものがある。竈の羽口、鉄滓などの遺物は確認できていないが、小鍛冶が行われた可能性を持つ遺構群と思われる。また、溝と鋤跡といった水田に関連する遺構群が調査区全体で見ついているが、溝の方向は条里地割に添うものではなく、自然地形に即して設けられたようである。また、これらの水田関連遺構の時期は建物や土坑と近接すると考えられることから、当地区においては12世紀前半以降は条里制が施行されていないと考えられる。(鐵)

## 【3区】

西に大きくカーブを描く調査区で、北東から南西に向かって下る地形である。耕作土の下には黄褐細砂～粗砂層(図版41、以下略：1層)があり、その下には上から黄灰細砂～中砂層(2層)、明黄褐極細砂～細砂層(3層)、黄灰シルト質細砂～細砂層(4層)が堆積し、一部に包含層である褐灰シルト質細砂～細砂層(5層)を挟んで、基盤層である灰白シルト質細砂～極細砂層(6層)が堆積している。この6層は調査区南西部では沈降し、その代わりに旧河道の埋土と考えられる灰シルト質細砂～細砂層が広く堆積している。

#### 遺 構

##### 溝(図版42・43)

SD0301 調査区北西隅で検出した「鉤」形に屈曲する溝である。検出長約8.3m、最大幅0.96m、検出面からの深さ4～9cmを測る。埋土は灰シルト質細砂～極細砂である。

SD0302 調査区北端付近で検出した。SD0304とはほぼ平行して流れ、最終的には繋がっている。検出長約25.0m、最大幅2m、検出面からの深さ28～35cmを測る。合流部分より東では下から灰細砂層、黄灰極細砂層、黒褐細砂層が堆積し、西側では灰細砂の上に黄灰色の極細砂が堆積している。

**SD0303** 調査区中央で検出した。北東から南西に延び、調査区境界で大きく屈曲する。**SD0305**・**SD0306**を切る。検出長約31m、最大幅0.65m、検出面からの深さ3cmを測る。

**SD0304** 調査区北端付近で検出した。**SD0302**とほぼ平行して流れ、最終的には繋がっている。検出長約13.3m、最大幅1.2m、検出面からの深さ30cmを測る。下から黄灰極細砂層、黄灰細砂層、灰黄極細砂層が堆積している。

**SD0305** 調査区中央で検出した。調査区を斜めに横切り両端とも調査区外に延びる。**SD0306**を切り、**SD0303**に切られる。検出長約40.0m、最大幅1.2m、検出面からの深さ24~36cmを測る。埋土は黄灰極細砂~細砂である。白磁碗の口縁片**1505**が出土している。

**SD0306** 調査区中央で検出した。調査区を横断する溝で、**SD0303**・**SD0305**に切られる。検出長約12.5m、最大幅1.1m、検出面からの深さ9~11cm、埋土は灰極細砂~細砂である。

#### 自然流路 SR0301 (図版43)

調査区北端付近で検出した。幅約9m、検出面からの深さ25cmである。埋土は灰シルト質細砂~細砂で、**SD0304**と**SD0305**に挟まれる位置にあって調査区を横断している。ただし、堆積状況から見て、**SD0304**と**SD0305**が流れていたときには、すでに埋まっていたと考えられる。

#### 遺物

**SD0305**から白磁碗の口縁片**1505**が出土している。これは山本分類(\*)のV類にあたり、12世紀後半~13世紀前半に位置付けられる。この地区では遺構からほとんど遺物が出土しておらず、包含層の遺物にはヘラ描きの樹木文を持つ壺体部片**1512**があるが、全体に量が極めて少なく、12世紀~14世紀のものが主体である。

#### 小 結

調査区の北半を中心に6条の溝を検出した。その中で**SD0302**・**0304**・**0306**は東西方向に走り、**SD0303**は南北方向に走る。**SD0305**は調査区東壁から出て、西進後、南北方向に走る。途中で交わる**SD0303**・**0306**は別として、これらの溝は同一の方向性を示さないことから、条里に伴うものではなく、自然地形に即して設けられた用水用の溝と思われる。これらの所属時期については、包含層出土遺物の時期からすれば、12世紀~14世紀の中で考えてよいと思われる。(鐵)

\*山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』(1995)

## 【4区】

北西から南東に延びる本線部分と途中から分かれて北東に延びる支線部分からなる調査区である。耕作土・床土の下には灰黄褐シルト質細砂~極細砂(図版45、以下略:19)が広く堆積し、その下にある褐灰シルト質細砂~細砂(13)、浅黄シルト質細砂~細砂(34)の上面で遺構を検出した。この地区は細砂~中砂を中心とした砂層が広く分布し、2区・3区に比べて安定していない。

#### 遺 構(図版46・47)

**SD0401** 本線部分で一部だけ確認した。検出長2.5m、最大幅0.98m、検出面からの深さ15cmを測る。上層にはにぶい黄褐極細砂、下層には灰黄褐極細砂が堆積し、いずれにも少量の炭化物が認められた。須恵器の甕**169**が出土した。

**SD0402** 本線部分で検出した。検出長11m、最大幅1.32m、検出面からの深さ50cmを測る。下層に灰

白極細砂～中砂が堆積し、中間に黒褐シルト、上層に灰黄褐砂層が堆積する。

**SD0403** 支線部分で検出した。北側の肩は調査区外にあり、検出長6m、最小幅1m、検出面からの深さ77cmを測る。灰極細砂で埋まる。床土、旧耕土を切って流れており、区画整理前の水路と考えられる。

**SD0404** 本線部分と支線部分の交点で検出した。南西－北東に流れ、途中でやや南に方向を変える。検出長12.7m、最大幅2.6m、検出面からの深さ40cmを測る。基本は灰白色系砂の埋土だが、検出幅が広がる屈曲箇所付近は褐灰色系砂層の上に灰色系砂層の埋土が堆積する。

**SD0405** 支線部分で検出した。検出長5.9m、最大幅1.3m、検出面からの深さ28cmを測る。褐灰シルト～細砂で埋まる。

**SD0406** 本線部分と支線部分の近く交点で検出した。南北に流れる。検出長6.1m、最大幅1m、検出面からの深さ16cmを測る。灰褐色系の埋土である。

#### 遺物

##### SD0401出土遺物(169：図版286)

169は須恵器の甕の口縁部片である。口縁部直下に沈線を巡らせ、肩部にはカキ目が認められる。体部内面には当て具の痕跡がある。古墳時代後期のものと思われる。

#### 小 結

本線部分北半および支線部分を中心に、溝、鋤跡からなる水田関連遺構を検出した。**SD0401**で古墳時代後期の須恵器が出土しているが、他の溝からは図示は出来なかったものの12世紀代を中心とする土器片が少量出土しており、水田遺構の所属時期を示すものと思われる。(鐵)

## 【5～10区】

5～10区は調査地点の東端に位置する。周辺は平成14年度に確認調査が行われ、遺跡の広がり把握された。ただし、遺構の密度が低く、遺物の散布状況も極めて少量であったため、再度平成16年度に確認調査を行った。調査の結果、5区の西側半分については、用水溝が検出され本発掘調査の必要が認められた。その他の地区では、用水溝が検出されたものの、密度が希薄であることから本発掘調査の必要がないと判断された。また、このうち8区については一部に攪乱が認められたため、調査区の状況に応じてさらにトレンチを①～③の3カ所に分割した(図版48～50)。

**5区**(図版48・286) 確認調査の結果、5～9区は遺構の密度が希薄な上、包含される土器も少量であったため、2m幅のトレンチで追加の確認調査をおこない、本発掘調査範囲を5区西側の80m<sup>2</sup>に決定した。この範囲では2本の溝(**SD0503・0504**)を中心に、比較的稠密な遺構の分布が見られた。確認調査範囲の面積は40m<sup>2</sup>である。

調査の結果、5区では水田址に伴う可能性の高い用水溝が多数検出された。主なものは表土直下に平行して流れる溝 **SD0504・SD0503**の2本と東側の **SD0506～0509**がある。前者は幅0.5～1.5m、深さ20～30cmである。さらに、この2本の溝には東西から小規模な溝 **SD0505**が合流し、周囲には浅い鋤溝が検出された。この状況から2本の溝を幹線とする用水溝とその周囲の水田の景観が、調査区周辺に広がっていたことが判明した。

出土遺物は **SD0503**から須恵器椀**170**が出土した。体部が直線的に立ち上がる個体で、口縁部を丸く

おえる。器壁の厚さは3.5mm前後で、調整はやや丁寧な印象の個体である。SD0503からは須恵器碗1041・172・捏鉢173が出土した。171は口縁部をやや肥厚させて丸くおえる。調整などに退化が認められるもので、13世紀前後のものと思われる。172は高台がしっかり残り、体部下半は腰を残しながら立ち上がるため、11・12世紀前後のもの可能性がある。173は口縁部が上方に肥厚し、内面に凹線状の沈線が観察される。14世紀前後の製品である。

以上のように出土した3点はそれぞれ時期が異なるが、溝の埋まった時期は1042より14世紀頃と判断される。

**6・7・9区**(図版49・382) 5区の南側に広がる水田地区である。調査の結果、各地点において水田址に伴う溝が検出された。ただしこれらは、遺構の密集度が低く、遺物の散布状況も極めて少量であるため、今回追加の確認調査を行うこととなった。

調査の結果、各地区で小規模な溝を数本検出した。これらの溝は5区の用水溝と同じ軸方位を持つものが多く、規模や埋土も小規模である。このため5区と同じ水田面が広く広がっているものと推定される。全体的には同じ方向の溝で占められるが、7区西端や9区北端では異なる方向の溝が検出された。このため水田は時代によって軸方位を変遷した可能性がある。ただし、個々の遺構からはほとんど遺物が出土しなかったため、遺構の時期を特定することはできなかった。

出土遺物は9区包含層から土師器甕1450が出土した。頸部をくの字に外反させ、口縁部上方に面を持つ。口径26cm、残存高3.5cmを測る。

**8区**(図版50・378) JR加古川線に沿った地点に位置する地区である。なお、この地点については前述のように、一部に攪乱が認められたため、調査区の状況に応じてさらにトレンチを①～③の3カ所に分割した。

耕作土から30cm前後で黄シルトが検出され、この面で水田址に伴う溝数本を検出した。この上層には黒褐シルトが10～20cm前後堆積し、古代～中世の遺物が少量出土した。このほか、8区①のSD0801からは中世の須恵器碗が出土した。このほか、包含層から須恵器杯蓋1363が出土した。奈良時代後半のものである。

**10区** 8区の西側に設定した確認調査のトレンチである。長さ2.5m、幅2mのトレンチである。調査の結果、耕作土から20cm前後で黄シルトないし灰シルト面が検出され、上層に黒褐シルト層が10cm前後堆積している。遺構・遺物は検出されなかった。水田に関連する用水溝が検出されたが、集落などに関連する遺構は検出できなかった。(山上)

## 【11区】

調査区北側の調査区で307㎡と小面積である。加古川バイパスに近い南北に長い調査区である。他の調査区より一段高い段丘面(完新世段丘I)に位置している。調査区内に段丘崖が東西方向に認められ、南側の一部が低い段丘面に相当する。低い部分は大きく盛土がなされており、早い段階に削平された部分に水田とするため盛土されたものと思われる。低い部分では遺構は確認されていない。地山そのものは北から南に向かって緩やかに下がっており、自然堆積と思われる地山の2次堆積や灰黄褐シルト質極細砂が堆積している。近現代の水田にする際に盛土されて水平になっている。

一部分のみ2面で調査したが、大半は1面の調査を行った。遺構を検出した高い方の段丘面である遺

構面で標高は8.3m前後を測る。検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、不明遺構2基、土坑3基、溝2条と柱穴数基である(図版51)。

**掘立柱建物跡(図版53)** **SB1101**は2間×3間の東西棟である。主軸はN25°Eを採っている。側柱建物で、南北方向が梁行となり3.8mを測る。東西方向が桁行となり5.4mを測る。柱穴の心々間距離は西から1.7m・2.1m・1.6mである。柱穴の規模はやや大きく、最大長90cmを測る。梁行の2本の中央柱だけ柱痕跡を確認している。それ以外は柱を抜いたのではないと思われる。出土遺物は須恵器片があるが、時期を断定できるものではない。

**SB1101**の南側に位置している柱穴群がある。明瞭に復原することはできなかったが、**SB1101**の南側に位置する2間×3間の建物の可能性のあるものである。建物とするなら、主軸方向は**SB1101**と比べて45°振っている。柱の間隔は広がっている。

**不明遺構(図版51・287)** 土器廃棄遺構と想像できる程度である。

**SX1101**は、調査区中央西側にあり、深さ15cm程度の浅い落ち込みである。埋土は褐灰シルト質細砂が上層で須恵器・土師器が出土している。各々3点ずつ6点図化している。土師器は3点で**178**は内湾する皿で端部は丸い。**180**は口径15.3cmと大形の皿で底部は丸い。**182**は甕口縁部で外反し端部角張りぎみ。須恵器は3点で**179**は杯身で底部を欠く。**181**は高杯の杯部で口縁部は外傾し凹線を有する。**183**は甕で内湾する体部はタタキ成形で口縁部はロクロナデで緩やかに外反する。端部は外側につまみ出す。

**SX1102**は東側の調査区外に延びている遺構で、**SD1102**に切られている。比較的遺物は多く出土しており、須恵器・土師器を確認している。**184**は須恵器杯身で不安定な底部から内湾し端部近くで内傾ぎみになる。

**土坑(図版51・52・287)** 3基確認している。**SK1101**は、西壁沿いで検出しており、調査区外へ続いている。深さ20cm余りと浅い遺構である。遺物は土師器片のみで、時期は確定できない。

**SK1102**は、調査区南東隅で確認している。径0.8~1.05mの楕円形の土坑である。深さも50cmを測る。縄文土器が出土しており、縄文時代晩期の土坑である。**177**は内湾する体部から浅い頸部となり直口ぎみに開く口縁部で外側にやや肥厚する。内外面とも条痕文で整形する。

**SK1103**は、**SK1101**の南側に位置する不定形の土坑である。形状などから自然の落ち込みの可能性が高い。

**溝(図版51)** **SD1101**は調査区を横断する溝である。幅80~110cmで、深さは10~15cmである。溝は緩やかに蛇行している。遺物はやや多めで須恵器・土師器が出土している。

**SD1102**は、南側に近いところで検出した溝で、西側には延びず、調査区内で終息している。東側には調査区外に延びている。幅30cmの狭い溝で、深さは14cmである。直線的に延びており、人工の溝である西側より東側の方が幅が広く深くなっている。(渡辺)

## 【12・13・14区】

遺跡北東近くに位置する十字形の調査区で、同時に調査したことから合わせて報告する。北側が12区(94m<sup>2</sup>)、南側が13区(207m<sup>2</sup>)、東西方向の62mが14区(434m<sup>2</sup>)である。合計735m<sup>2</sup>調査した。溝は方形周溝墓と考えられ、調査地区をまたがっていることから合わせて報告する。

弥生時代から中世までと時期幅があるが、調査遺構面は1面で検出した。遺構は、掘立柱建物跡1棟、

不明遺構 3 基、土坑 5 基、溝 12 条、水田畦畔を調査した(図版 54)。

掘立柱建物跡(図版 54) **SB1201**は調査区外へ延びている遺構で、南北 2 間、東西 4 間以上の東西棟と思われる。柱穴の径は 20~40cm である。遺物は出土していないが、埋土から中世かと思われる。

不明遺構(図版 55) 南側で 3 基確認している。共に性格は不明である。**SX1201**は西側の調査区外へ延びている。最大幅 2.5m と広い。長さ 4.4m 以上と大型の落ち込みである。

**SX1202**は、径 2.0m のほぼ円形プランの落ち込みである。深さ 10cm と浅い。

**SX1203**は、**SX1202**南にあり、現代の排水溝や **SD1210**に切られている。**SX1201**同様に大型の落ち込みである。

土坑(図版 54・55) 調査区南側に 5 基の土坑を確認している。性格は不明。形状は円形・楕円形・不定形と変化がある。

溝(図版 54~60) 12 条検出している。南側にある溝 **SD1201**・**1202**・**1210**・**1211**は、土坑などと同時期中世の溝と思われる。同じく東側で検出した **SD1212**も中世と考えられる。

**SD1207**は、中央部分を東西に走る溝で、**SD1208**に切られている。埴輪などの遺物から古墳時代後期の溝であることが確認された。最大幅 4.5m で旧河道かもしれない。ただ、下層には弥生時代の溝もあったようで、底からは弥生中期の土器が出土している。上層の遺物は須恵器を 2 点図化した。**219**は甕口縁部で外反し端部は肥厚する。**220**は立ち上がりを欠いている。受部は水平に延び端部丸い。体部は歪みに内湾する。

方形周溝墓(図版 56・57・59・288~292) 方形周溝墓 1 は、**SD1207**・**1206**・**1203**に囲まれており、西側溝は調査区外である。**SD1207**の一部が南側に突出している個所があり、それが西側溝と思われる。溝で囲まれた部分は、東西 11.0m、南北 7.5m である。埋葬施設は確認されなかった。南辺の **SD1203**には多量の弥生土器が出土している。胴部や底部に焼成後に穿孔した土器が多く、供献用の土器群と思われる。溝底ではなく少し浮いた位置で検出している。南北の両側から暗褐色シルト質細砂層が堆積し、中央部分の底から上に多量の土器は置かれている。弥生土器堆積層の上には 3 層の土層があり僅かに中央が凹む堆積である。最上層には地山ブロックが混じっており、人為的な埋め土である。(渡辺)

**SD1203**では中央付近からは多くの土器が出土している。広口壺 6 点、直口壺 2 点、短頸壺・細頸壺・無頸壺・甕・イイダコ壺各 1 点が出土している。広口壺はいずれもほぼ全形を見ることができ、底中央または体部下半に焼成後穿孔が施されている。**186**・**187**・**189**・**202**は(いわゆる播磨系装飾壺とされる)多くの装飾要素が見られる広口壺である。いずれも頸部には断面三角形の突帯をめぐらし、垂下した口縁端面には凹線文・斜行文・浮文が施されている。また口縁内面にも扇形文や波状文が施され、円形浮文や刻み目突帯が貼り付けられている。体部上半にはハケ調整の後、櫛状工具により、直線文・波状文・斜格子文をそれぞれ組み合わせて施し、**187**・**189**・**202**ではその上に 2 帯の円形浮文を貼り付けている。いずれも体部中位の張りが顕著で、算盤玉に近い体部である。**188**はいわゆる太頸広口壺で、上下に肥厚した口縁端面に凹線文・円形浮文、体部上半に櫛状工具により直線文・波状文を施して加飾する。体部の重心はやや下よりであるが、広口壺同様に張りは大きい。**194**は大きく開く長い口頸部を持ち、口径は体部最大径を凌ぐ大型広口壺である。頸部下端に指頭圧痕文突帯が貼り付けられるが、他の加飾要素は認められない。**191**は細頸壺で口縁・脚部を欠くが算盤玉形に鋭角に尖る体部で、その上半を櫛描き直線文・円形浮文で加飾する。**190**・**192**は直口壺で、**190**では頸部下端に刺突文が、**192**では口縁端部に刻み目がそれぞれ施される。**200**は短頸壺である。口縁部への加飾は見られず、体部上半に櫛

状工具による刺突文が2段にめぐらされるのみであるが、下半部はヘラミガキで丁寧に仕上げられ、底部に焼成後穿孔が施される。199は体部下半のみであるが、ミガキが施され焼成後穿孔が穿たれた壺である。195は深いカップ状の体部に高い脚が付き、ヘラミガキで丁寧に仕上げられ赤色化粧土が塗布される無頸壺である。この時期の中部瀬戸内地方で見られるタイプである。201のイイダコ壺は口のすばまる薄手のものである。紐孔等は確認できない。

SD1207からは、広口壺・短頸壺・細頸壺・無頸壺・高杯・甕が出土している。209の広口壺は肥厚した口縁端面に凹線文・斜行文・円形浮文、口縁内面に櫛描き波状文、体部上半に櫛描き直線文・波状文・斜格子文を施して加飾する。中位が張る体部で、底部には焼成後穿孔が施される。210は体部下半のみであるが、底部及び体部下半下よりに焼成後穿孔が施されている。215はカップ状の体部に筒状の脚部が付く台杯の無頸壺である。口縁外面に突帯がめぐり、途切れた一方に円筒状の注ぎ口が付加されていた痕跡がある。216は水平に伸びる口縁端部を持つ高杯である。脚柱部に涙滴形の透かし孔が穿たれ、中位に沈線がめぐらされる。杯部底の充填された円盤の中央に焼成後穿孔が穿たれる。SD1206では遺物は少なく、甕の底部と高杯の脚端部が出土するが、小片である。(友久)

方形周溝墓2は、方形周溝墓1と溝(SD1206)を共用している。北溝(SD1207下層)も延長上に続いており、計画的に構築された可能性が高い。東側のSD1205からは中央で高杯の杯部の完形品が上向きに出土している。SD1204からは直口壺の完形品(203)が出土している。SD1203と異なり、1点だけが置かれていた。溝内部の部分は、東西4.5m、南北7.5mを測る。方形周溝墓1の半分以下の面積である。規模は明らかにできないが、SD1208・1209も埋土や土器の出土状況などが類似しているので、方形周溝墓の溝と考えられる。両溝に接した片側は確実に方形周溝墓と思われるので4基の存在は明らかで、それ以上の可能性が高い。(渡辺)

SD1205からは広口壺・高杯・甕が各1点出土している。広口壺204は頸部に断面三角形の突帯を2条めぐらし、体部中位に刺突文がめぐり。205は倒卵形の体部の甕で、口縁端部は上方に引き上げられている。206は水平口縁端部をさらに下方に大きく垂下させた高杯である。216同様に脚柱部中位に沈線がめぐられ、杯部底の充填された円盤の中央に焼成後穿孔が穿たれる。

SD1208はSD1207の西に続く溝で、出土土器は広口壺1点と直口壺2点である。221は広口壺で、肥厚した口縁端面に凹線文と円形浮文、口縁内面に櫛描き波状文と扇形文、体部上半に櫛描き直線文・波状文を施し、さらに円形浮文を貼り付けて加飾する。中位が張る体部で、底部には焼成後穿孔が施される。直口壺は凹線文が施されるもの222と無文のもの223がある。

SD1203とSD1207は方形周溝墓1のそれぞれ南側と北側を画する溝で、出土遺物はいずれもほぼ同一時期に属するものと考えられ、特に壺と確認できる個体の底部には全て焼成後穿孔が穿たれており、方形周溝墓におけるの葬送儀礼にかかわる供献土器と考えて問題ない。

SD1204とSD1205は方形周溝墓2のそれぞれ南側と東側にあり、出土土器は周溝墓1とほぼ同時期の様相を示すが、若干新しい要素を示すと思われる。(友久)

水田畦畔 上層がすでに削平されていたが、北側を中心に水田畦畔が確認された。時期は明確ではないが、古代のものと思われる。(渡辺)

## 【15区及び16区・19区段丘下部分】(図版61～67・292・299)

15区・16区・19区はアルファベットのF字形に連結する調査区である。段丘下にあたる部分はほぼ同様の景観を見せることから、段丘下に位置する部分をまとめて述べることにする。

15区及び16区・19区の段丘下の調査区は、いずれも段丘面上から2～3m前後下面に広がる低地に位置しており、厚い洪水砂の下に湿地状堆積が広がる。

段丘下の湿地部分は基本的には扇状地を形成するⅧ層礫層をベースに、Ⅶ層湿地堆積の黒シルト・Ⅵ層褐色の水田土壌・Ⅴ層洪水起源の砂礫層・Ⅳ層古代末から中世前期にかけての黒灰色の水田土壌・Ⅲ層暗灰色の水田土壌(中世後期)・Ⅱ層厚く堆積する近世の洪水砂・Ⅰ層現耕作土の順に堆積する。

Ⅰ層礫層の出現レベルは15区西半・19区北半で高く、近世以降の洪水や水田耕作による削平を受けて、中世以前の層は礫面の凹凸に従い斑に残存している。これに対して16区・19区の段丘崖直下にあたる部分は低く、谷部を形成しており、中世以前の堆積層が厚く遺存していた。

遺構は15区では柱穴3個・溝21条・水田区画痕跡、16区では溝、19区では溝・水田遺構(区画・畦畔)を検出している。

検出できた遺構の大半は溝・畦畔・水田区画痕跡である。その殆どが水田跡に伴う遺構と認識でき、低湿地部分は生産領域として使用されていたと考えられる。

### 15区の遺構

15区は北西・南東方向に設定された幅約6.0m・全長約50.0mの調査区である。

溝(図版63・292)

**SD1501** 調査区東端において検出した。西肩のみを検出しており、16区・17区・29区・33区から延びる流路肩部の可能性が残る遺構である。黒褐粗砂混じりシルトが堆積している。遺物は弥生時代から古墳時代前期の土器器甕・高杯などが出土している。225は弥生時代の壺である。

**SD1502～SD1521** いずれも幅約50cm・深さ15cm程度の小規模な溝であり、その軸方向を北西もしくは直交する北東方向にとるもの **SD1502・1503・1511・1512・1513・1514・1517**と、南北方向にとる **SD1505・1506・1516**がある。出土遺物が乏しく時期が判然としないが、**SD1516**からは9世紀～10世紀にかけての須恵器が出土している。

**SD1502** 調査区南肩において検出した。**SD1502・1511・1512**の3本の溝は約1mの間を持ち北西方向へ延びる。ところどころ途切れ、屈曲を見せることから、水田区画に付随する中規模の畦畔に付随する一連の水路と考えられる。北西から南東に流れる幅40cm・深さ20cmを測る皿形の溝である。黒褐細砂混じり極細砂が堆積し、上層に黄中砂が堆積する。

**SD1511** 調査区南肩において検出した。北西から南東に流れる幅40cm・深さ10cmを測る丸底の溝である。黒褐細砂混じりシルトが堆積している。

**SD1512** 調査区南肩において検出した。北西から南東に流れる幅60cm以上・深さ30cm以上を測る箱形の溝である。黒褐シルトが堆積している。

**SD1503** 調査区東端において検出した。**SD1502**と直交する。北東から南西に走る幅30cm・深さ5cmを測る浅い皿形の溝である。褐灰極細砂混じり細砂が堆積する。

**SD1513** 調査区西半において検出した。**SD1513・1514・1515・1517**の4本の溝は固まって調査区を横断している。北東から南西に流れる幅90cm・深さ20cmを測る皿形の溝である。黒褐シルト混じり細砂

が堆積する。

**SD1514** 調査区西半において検出した。北東から南西に流れる幅50cm・深さ10cmを測る皿形の溝である。灰褐細砂混じりシルトが堆積する。

**SD1515** 調査区西半において検出した。溝は掘り替えられ一部二股の溝として検出されている。北東から南西に流れる幅80cm・深さ20cmを測るU形の溝である。灰褐シルトが堆積しており、上層には浅黄中砂が堆積する。

**SD1517** 調査区西半において検出した。北東から南西に流れる幅45cm・深さ10cmを測る箱形の溝である。黒褐腐植質シルトが堆積している。

**SD1505** 調査区中央付近において検出した。**SD1506・1509・1510**の3本の溝は固まって調査区を横断している。南北方向に流れる幅55cm・深さ10cmを測る皿形の溝で、腐植質を含む黒褐細砂混じり極細砂が堆積する。

**SD1509** 調査区中央付近において検出した。南北方向に流れる幅40cm・深さ15cmを測る丸形の溝で、腐植質を含む黒褐細砂混じり極細砂が堆積する。

**SD1510** 調査区中央付近において検出した。南北方向に流れる幅80cm・深さ8cmを測る浅い皿形の溝である。黒極細砂混じり細砂が堆積する。

**SD1506** 調査区東端において検出した。南北方向に流れる幅30cm・深さ10cmを測る丸形の溝である。黒褐礫混じり中砂～細砂が堆積する。

**SD1516・SX1504** 調査区西半において検出した。**SX1504**と重複し溜まりとなる。東西方向に流れる。**SX1504**の中層部分において検出される部分では幅80cm・深さ10cmを測る。浅い皿形の溝である。暗灰黄粗砂が堆積する。

**SX1504**部分からは弥生土器甕底部226が出土している。時期は弥生時代後期と考えられる。

**SD1521** 調査区西端において検出した。南北方向に流れる幅80cmを測る溝である。

**水田区画 SX1502a・1502b**(図版63)

調査区中央において検出した。**SD1509**と切り合いほぼ同じ方向をとる水田区画である。**SD1510**との間に幅50cmの畦畔と考えられる空間がある。水田区画の規模は南北3.0～4.0mである。

#### 16区の遺構

16区は北西・南東方向に設定された幅約6.0m・全長約45.0mの調査区である。その内の約15mを段丘下の湿地が占めている。遺構の残りは悪く、東西方向に走る溝状遺構 **SK1608・SD1608**を検出した。

遺物は湿地状に堆積するVI層水田土壤中から須恵器円面硯を含む8世紀代の遺物が出土している。

**SK1608**(図版67)

段丘下において検出された。不整な長方形を呈する。規模は長軸約3.5m・短軸1.0m、深さ約10cmを測る。土坑底には凹凸がある浅い皿状の断面形状を呈する。黒腐植質シルトを埋土としている。図示できる出土遺物はない。

**SD1608**(図版63)

段丘下において検出した。**SK1608**の北側にある。東西方向及び分岐して北側に延びる。南北方向部分では幅120cm・深さ15cm、東西方向部分では幅50cm・深さ8cmを測る。浅い皿形の溝で、黒腐植質シルトを埋土としている。

## 19区の遺構

19区は北東方向に設定された幅約6.0m・全長約80.0mの調査区である。そのうち約60mを段丘下の湿地が占めている。

遺構の大半は調査区を東西もしくは南北方向へ横切る状態で検出された。その大半は東西あるいは南北方向に軸をもつ水田区画である。

19区の遺構からの出土遺物は乏しく個々の遺構の時期は判然としないが、VI層水田土壤中からは、段丘上より投棄された律令祭祀遺物(斎串)・墨書土器(須恵器杯『林』)を含む8世紀代の遺物が多量に出土しており、水田の時期についても8世紀代と捉えてよいものと考えられる。

### 水田区画(図版67)

#### SX1901・SX1902

調査区北半において検出した。SX1901・1902は浅い微地形の窪み(小規模な流路)を細い畦畔によって区切り水田として利用したもので、皿状のやや不整な形状を呈している。SX1901の規模は東西方向7.0m以上・南北幅約3.0mを測る。SX1902の規模は東西方向3.5m以上・南北幅1.5mを測る。

#### SX1903

調査区中央において検出した。ほぼ東西方向に走る溝状遺構である。両肩には幅約50cmの畦畔を持ち、周囲が水田化していたことが判明した。また、溝内には多数の足跡があり、VI層水田土壤がSX1903内にも堆積していることから、水田としても利用されていたと考えられる。規模は東西長6.5m以上、南北幅約2.5m・深さ約50cmを測る。

### その他の水田区画(図版67)

SX1902・1903間において検出されている。

SX1903から北へ延びる畦畔とSX1902西側に畦畔痕跡が検出されている。南北約12.0m・東西11.5mの方形区画が復元できる。

溝 SD1901・1904は幅50cm・深さ15cm程度の小規模な溝で、その軸方向を東西か南北方向にとる。

#### SD1901(図版67)

調査区中央より検出した。北西方向に延びる。幅40cm・深さ20cm前後を測る。SD1904と切り合い新しい。黄褐シルト質細砂を埋土としている。

#### SD1904(図版67)

調査区中央より検出した。東西方向に延びる。幅50cm・深さ30cm前後を測る。方位から15区SD1516へと繋がる可能性が高い。黒褐シルト混じり極細砂を埋土としている。(西口)

## 【16区・19区段丘上部分】(図版68～76・292～295・299・300)

16区・19区は、調査区内に段丘崖があり、低い部分である16区は西側に、19区は北側に水田跡が確認されている。段丘上の堆積土は薄く、I層耕土下にII層褐シルト質極細砂、III層にぶい黄褐シルト質極細砂が広がっている。包含層であるIV層黒褐シルト質極細砂が部分的に堆積している。

16区での遺構は、大溝1条、不明遺構3基、土坑7基、溝7条を調査した。調査区東端に南側の18区・17区へ続いていく大溝(SR1601)が確認されている。東肩は調査区外で検出していない。幅2.5m、深さ1.2mを測る。

不明遺構は3基あり、**SX1601**は須恵器大甕を据えた遺構である。南北1.2m、東西0.8mを測る。須恵器は小片に割られてから据えられている。復原できなかったが、1m近い大型のものである。

**SX1602**は溝交錯部分の落ち込みである。溝状遺構で、**SD1604・1603**も同じ空間に位置している。溝(**SD**)は下層の遺構になる。逆に土坑(**SK**)は上層の遺構になる。旧河道であろうか。

**SX1603**は**SD1601~1603**が交錯した部分で、底面で多量の埴輪が出土している。形象埴輪が多く、円筒埴輪が少ないのが特徴である。最大長3.2mの楕円形の落ち込みである。埴輪と須恵器が出土しているが、樹立しているような状態ではない。須恵器は大甕が2点出土している。**232**は口縁部で外反し端部は幅の広い面を折り返して作っている。端面下部分に1条の凹線があり、頸部にも2条の凹線が施されている。その上に刺突文帯があり、さらに上部に突帯がある。**234**は頸部で内湾する体部から外反する頸部になる。体部はタタキで内面は同心円の外面は平行のタタキが残る。頸部はロクロナデで、下から3条凹線—波状文—2条凹線—波状文と装飾している。他にも椀**233**が出土している。埴輪には円筒埴輪と形象埴輪がある。円筒埴輪には径から2種あり、さらに形象埴輪の脚台になろうかと思われる製品がある。口径は20cmと24cmに分かれ、1点**240**のみ16.6cmと小形である。すべて縦方向の粗いハケで整形している。径は異なるが高さはほぼ同じである。タガは2段ありその間に円形透孔が存在する。内面はユビ成形で粘土紐の継ぎ目が明瞭に残る。口縁部は外反し端部は角張るかその端面中央を凹ませている。体部は裾に向かって狭くなっていく。タガは台形かM字で、径の大きい方**239**などがタガは大きく高い。裾部は直立になり角張るもの**244**、内傾して直立し端部角張り肥厚するもの**243**、内傾するもの**238**、外傾ぎみになるもの**239**と個体差が強い。**246~248**は形象埴輪の脚台である。**246**は全体的には直立しているが歪で屈曲している。タガも稜線が不明瞭で低くなっている。53区で出土した脚台と似ている。**247**は裾部で僅かに外反し端部角張って肥厚する。**248**は直立するもので、裾端部は内側に尖らす。タガは台形で外面は縦方向の粗いハケである。**249~259**は形象埴輪である。**249~252**は同一個体と思われる人物埴輪である。**249**は半球形で側部に円孔のある眉庇付きの甲冑で四方に2本の直線の間大に綾杉状の装飾を加えている。頂部が割れており、グラス状の装飾が付加されていたようである。**250**は顔の上半部で右目と額部分である。冑部分眉庇は水平で周辺に三角の大き目の刻みを入れている。綾杉状の装飾もみられる。綾杉状の装飾は**251**にもある。裾部分で広がっており、端部は角張る。**252**は衣服の裾と思われ、内面には脚台に続く部分で割れている。縦方向のハケで整形している。武具を装着した武人埴輪であろう。**253**は人物埴輪の腕部分である。大きいことから、武人埴輪とは別個体かと思われる。ユビ成形からハケ整形している。**254~259**は家形埴輪の可能性があるので、囲い形かもしれない。

土坑は7基検出しているが、性格は不明である。平面形は不定形のもが多く、円形・楕円形と変化がある。遺物はほとんど保有していない。

溝は7条ある。**SD1601**は北東から南西に延びる最大幅2.3mの溝で南側になると幅が狭く深くなっている。**SD1602**は**SD1601**より古い段階の溝で、ほぼ同じ位置を流れているが、南側も幅は変わらず、深度も浅い。**SD1602**は自然地形かと思われる。**SD1603**は幅1.0mの北西から南東に鍵状に屈曲して延びる溝で、埋土に2時期ある。下層の溝は**SD1607**とつながっている可能性が高い。2本の溝は方形周溝墓の溝と考えられる。**SD1604**は、**SD1603**から南西に延びる溝である。やはり、鍵状に屈曲しており、方形に巡っている。埋土は**SD1603**の上層埋土(黒褐シルト質極細砂)と同じである。**SD1607**は、**SD1601・SX1603**に切られている。北壁近くだけ残っており、そこから弥生時代中期の完形に近い壺が出土している。

SD1605はSR1601の西側に3.0m離れた位置に直線的に南北に延びている。幅40cmで、南側に続いている。SD1606は、段丘崖沿いに平行して築かれた溝で、幅50～80cmを測る。

19区の段丘上では大溝、溝、土坑、柱穴を検出している。溝は6条あり、SD1907～1909は3条ともSR1901東肩に平行して延びている。SD1906は段丘崖に平行に走る溝で、東側の調査区外へ延びている。SD1905はSD1906と直交方向に主軸を持つ溝で、同一遺構の溝と思われ、方形周溝墓SX1904になる溝である。溝中央から焼成後に穿孔した壺完形品が出土している。壺周辺に円礫が数石置かれている。広口壺324はやや大きめの平底に球形の体部となり、直立の頸部から大きく外反し垂下する口縁部になる。口縁部は肥厚し端面を作っている。端面上下には刻み目を行い、端面には2個1対の円形浮文を付けている。4方向にある。ハケ整形ののちヘラミガキを行っている。体部上半には装飾を施している。上から直線文一波状文一直線文一波状文一直線文となっている。頸部には2本の断面三角形の突帯がある。底部上部に焼成後の穿孔が認められる。325は器高の高い小形の壺である。平底は大きめで、内面はユビ成形からナデ、外面はハケ整形である。

土坑は8基検出している。SK1905は東西方向に主軸を持つ細長い土坑である。東西2.6m、南北0.86m、深さ20cmを測る。床面は東側が僅かに高くなっている。西側に集中して遺物が置かれている。少量の土師器を含むが、須恵器が主体である。完形の杯・高杯が10個体以上置かれている。東側には土坑肩部に浅い段が敷設されており、そこで火を焚いている。須恵器甕が焼土上に散乱した状況で出土している。また、西側の大溝に近い部分には、土坑底から大溝に排水するような細かい溝が付加されている。幅20cmで、溝中央に礫を詰めている。同様の遺構が17区で検出されている(SX1704)。ともにSR1901の東側に位置し、約8.0m離れている。平行にあり、溝を付けていることなど、類似遺構である。308～310は杯蓋で、309は緩やかな稜線を持つが他は天井部が丸い。311～315は杯身で立ち上がりや受部の状況には変化がある。314にはヘラ記号があり、315には内面に当て具の痕跡がある。316～320は高杯で円形の透孔があるが、3方と4方がある。321は短頸壺、322は甕である。

SK1904・1906・1907・1908は礫を伴った土坑である。特にSK1907は土坑上面一面に礫を敷いている。長さ2.3m、最大幅1.3m、深さ25cmの中央がくびれた楕円形の平面をしている。土師器小片しか出土していない。

大溝SR1901は段丘北側の段丘崖につながっている。流路の方向は不確実である。調査時のレベルは北側(19区)の方が低く南から流れるもので段丘崖に抜けている。段丘崖とSR1901は直交する。17区・20区・27区・40区と続いている。幅3.5m、深さ1.4mを測る。断面U字形で底は丸くなっている。底は弥生～古墳時代である。他地区の大溝と比べると炊飯具の破片が少ない。326～332は土師器で、326はつまみ部を欠く杯蓋で水平に近い天井部は緩やかに口縁部になり端部は外反する。327は杯で不安定な平底から内湾し端部近くで反って端部丸い。ヨコナデとミガキで仕上げる。328は高台部で外傾し端部尖りぎみ。329は皿で端部僅かに反る。内面はミガキで仕上げる。330は平底の杯で歪に外傾し端部丸い。331は僅かに上げ底になるもので体部との稜線明瞭で、短く外傾し端部丸く反る。332は外傾する口縁部を持つ甕でハケ整形である。333～346は須恵器で、333は脚部で円孔が1ヶ所ある。外傾する裾部は端部に向かって屈曲し端部外側につまみ出す。334は稜線蓋でつまみ部端部は外側につまみ出す。天井部は丸く端部は外反し丸い。335は杯蓋で内湾する体部が水平に短く開き端部角張り下側に引き出す。336～338は杯Aで外傾する体部で、端部と底部には変化がある。336は一部上げ底で端部丸い。337は端部外側に引き出し尖る。338は端部尖る。339は杯Bで外側に踏ん張る高台で端部内外に肥厚する。内湾する

底部から体部で口縁部に向かって直立する。340は皿で断面方形の高台が付く。平坦な底部で体部外傾する。341は短く外傾し端部丸い皿で器壁厚めである。342はつまみの小さい蓋で体部外傾し端部反る。343は裾が広がり外反する脚台で3方に小さな円孔がある。底部は平たい。344は壺口縁部で外反し端部水平になり内外に肥厚する。345・346は甕口縁部である。347は管状土錘で中央が膨らむものである。T38は凹凸面がやや大きめの格子タタキ(Ⅱ種格子タタキA)である。(渡辺)

## 【17区・22区】(図版77～83・296～298・301・302)

17区・22区は37区北東端から南東方向へのびる幅約8.0m・全長約100mを測る調査区である。段丘上に位置する。両地区は連続しており、まとめて述べる。

調査の結果、弥生時代中期の土坑1基・古墳時代後期の祭祀土坑1基・奈良時代の掘立柱建物跡2棟・鎌倉時代の掘立柱建物1棟、奈良時代と考えられる水田跡、弥生時代から鎌倉時代にかけての流路2本を検出した。

調査区は2本の流路によってほぼ3等分されており、SR1701より西側からは、弥生時代から奈良時代の遺構が検出されており、状況は隣接する37区と同じである。弥生時代中期の土坑SK2201・奈良時代の掘立柱建物跡2棟(SB1702・1703)・柱穴群・奈良時代の溝SD2201～2205を検出している。

中央のSR1701・1702間では、古墳時代後期から鎌倉時代にかけての遺構を検出している。古墳時代後期の祭祀土坑(SX1704)、奈良時代の水田跡・土坑、鎌倉時代の建物跡(SB1701)などである。

水田跡は、建物の下層から洪水砂を挟み不整形な水田が検出された。層序から推して、奈良時代の水田と考えられる。奈良時代の遺構は水田跡の他に祭祀土坑の東側に集中する不整形な土坑群がある。

東半にあたるSR1702より東では主に、溝・畦畔からなる水田遺構が検出された。

流路(図版77・83・297・298)

### SR1701(SR2201)

40区・27区・21区・20区を通り、更に19区を通り段丘崖・段丘下へと流れだす流路である。本調査区では幅4.0m・深さ1.7mを測るV字溝である。17区・22区の両地区に跨る遺構である。

開削された溝の溝底付近は黒褐シルト質中砂(Ⅲ層)・中層は褐灰シルト質細砂(Ⅱ層)・上層には灰黄褐シルト質細砂(Ⅰ層)が堆積している。

遺物は283～287・292～303・T11が出土している。283～291は流路中の下層(Ⅲ層)からの出土である。283は須恵器杯Aである。8世紀後半と考えられる。284は須恵器杯蓋である。平城宮Ⅱ段階 8世紀前半と考えられる。285は須恵器稜椀である。投松6号窯に類例を見る。9世紀初頭前後の時期が考えられる。286・287・289は須恵器杯Bである。いずれも8世紀前半代の時期が考えられる。289はやや口径が大きく器高は低い。平城宮Ⅲ段階 8世紀中頃と考えられる。288は小型の土師器甕である。胴部が張り、口が広い。290は長胴の土師器マダコ壺である。291は大型の土師器高台付鉢(もしくは椀)である。投松1号窯の須恵器椀と比較するならば8世紀中頃の時期を当てはめても良いと考えられる。T11は丸瓦である。292～303のうち、293・296・300・303を除いてⅡ層から出土した。292は長胴の土師器甕で、293は土師器鍋である。8世紀後半～9世紀前半の時期があてはめられる。294は須恵器杯蓋である。札馬47号窯に類例がある。平安京Ⅱ古段階 9世紀中頃の時期が考えられる。295は須恵器杯B、平城宮Ⅴ 8世紀後半と考えられる。296は須恵器平瓶の底部・体部と考えられる。297は須恵器Ⅲ、298は

須恵器杯Bと考えられ、杯部の高い個体である。299は須恵器杯A、300は須恵器碗、札馬47号窯に類例をみる。9世紀中頃と考えられる。301は須恵器台付壺の下半である。302は須恵器広口壺の胴部である。口径・胴部径は破片のため検討の余地を残すが西ノ池1号窯に類例を見る。8世紀前半代の時期が考えられる。303は須恵器高杯の脚部である。遺物は溝底付近には8世紀中頃～後半、上・中層には9世紀代の遺物が多いことが分かる。

#### SR1702

17区を横断するSR1702は32区・29区・27区・18区を経て更に16区・15区へと延びる流路である。本調査区では幅5.5m・深さ1.8mを測るV字溝である。

開削された溝の溝底付近は黒褐粗砂・中層は灰黄褐極細砂、上層は水田土壌暗褐砂とその上層に灰黄褐粗砂が堆積している。水田は畦畔は明確ではないが、両肩近くに溝がつき、内側が平坦であることから40区と同様に水田として利用されたと判断できる。遺物は平瓦T54・T73が出土している。

#### 土坑 SK2201 (図版80・301)

調査区西端より検出した。不整な隅丸方形を呈する。規模は長辺約1.3m、短辺約1.25m、残存する深さ約20cmを測る。土坑は北半部分が深く長方形に掘られている。土坑底より弥生中期の壺362が出土している。

#### 祭祀土坑 SX1704 (図版80・296)

SR2201に流れ込む細い溝が取り付いた長楕円形の土坑である。長径約2.6m・短径約1.0m・深さ約20cmを測る。断面形状は箱形で、埋土は灰黄褐色極細砂が堆積している。土坑内の中央には土師器甕・須恵器甕を置き、東端には須恵器蓋杯と小型の提瓶を並べている。同様の土坑は19区においても検出されており、祭祀土坑と考えられる。

遺物は須恵器杯蓋263～267、須恵器杯身268～272、須恵器甕273・275、土師器甕274、小型の須恵器提瓶276が出土している。杯は蓋・身とも田辺編年MT85型式に並行する個体で占められており、272はやや新しい様相をもつ。他の遺物の時期についてもばらつきはない。土坑の時期は6世紀後半である。

#### SB1702・SB1703・柱穴群 (図版77・296)

調査区西端に柱穴が集中している。掘立柱建物1棟が復元でき(SB1702)、切り合い更に1棟(SB1703)が存在する可能性が高い。ともに方形の柱穴を持つ1間×1間以上の掘立柱建物跡である。

SB1702は東西2.0m×南北2.4m、SB1703は東西1.8m×南北1.0mの規模を測る。SB1702はSB1703と切り合い先行する。遺物はSB1702に伴うP005より須恵器甕260が出土している。

#### 不整形な土坑群 (図版77・81・297)

奈良時代の遺構は柱穴群・溝・水田跡の他に祭祀土坑の東側に集中する不整形な土坑群がある。

**SX1705** SX1704の東側に位置する。長軸約4.2m・短軸約2.3m・深さ約20cmを測る不整形な五角形である。断面形状は浅い箱形で、埋土は灰黄褐細砂が堆積している。遺物は平瓦T42が出土している。

**SX1706** SX1705の東側に位置する。複数の土坑が重複する不整形の落ち込みである。長軸約6m・短軸約3.0mを測る。断面形状は浅い箱形である。遺物は須恵器杯蓋277、須恵器台付壺278、須恵器甕279・280が出土している。概ね6世紀後半の時期が考えられる。

**SX1711** SR1701の西側に位置する楕円形の土坑である。長軸約1.2m・短軸約0.5mを測る。土坑内より土師器羽釜281・282が出土している。時期は8世紀後半と考えておく。

**SX1712** SX1704の南東側に位置する。南側を損壊され、当初の規模は不明である。SD1709が取りつき、

同時に機能していたと考えられる。径約3.5mを測る不整な円形であったと考えられる。

**溝** 溝は調査区と直交する(北東方向あるいは直交する)**SD1704・1710・1718~1720・2201・2202**と、斜行する(南北もしくは東西方向へ向かう)**SD1721・1722・1724**がある。

**SD1704・1710・1718~1720**は現地表面に残る条里型地割りに踏襲される水田区画に伴う溝の可能性が高い。**SD2201・2202**は2分しているが同一の溝であろう。**SD1704**と近い弧を描いていることから並列する水田に伴っていた水路の可能性を考えておく。

**261・373・374**は**SD1704**から出土した。**261**は須恵器台付皿である。形態は灰釉陶器皿と類似する形状をもつ。時期は9世紀後半と考えられる。**373**は須恵器椀、**374**は羽釜である。**373**は10世紀代前半と考えられる。**262**は**SD1710**から出土した須恵器杯蓋である。天井部はヘラ削りを行い平坦である。口縁部の屈曲は乏しく、時期は平城宮V、8世紀後半代と考えられる。**363~371・T58**は**SD2201**から出土した。**363**は土師器杯、**364**は土師器皿である。**365・366**は須恵器杯蓋、**367**は須恵器皿である。**368**は小型の土師器甕である。**369**は須恵器台付皿、灰釉陶器皿と類似する形状をもつ。時期は9世紀前半と考えられる。**370**は須恵器短頸壺の蓋である。時期は9世紀前半か。**371**は須恵器椀である9世紀半ば頃と考えられる。**T58**は平瓦である。**372**は**SD2202**より出土した須恵器椀である。投松5号窯に類例をみる。9世紀後半代と考えられる。図示できた現地表面に残る条里型地割りに関わる溝の遺物は9世紀を中心とした遺物が顕著である。

**水田遺構** 水田跡はほぼ東西方向に一辺が向く15m<sup>2</sup>前後の小区画水田跡を4区画検出している。各区画の北辺を合わせ概ね東西方向に並んでおり、北側に畦畔が想定できる。

時期は奈良時代と考えられる。また、**SB1701**の下層からも洪水砂を挟み一辺を東西方向にとる不整形な水田が検出された。層序から推して、奈良時代の水田と考えられる。

#### **掘立柱建物跡 SB1701**(図版79)

調査区中央より検出した。南北1間(2.4m)以上×東西3間(8.2m)の掘立柱建物跡である。柱穴は径約40cm、柱痕は径20cmを測る。柱穴掘方の埋土は灰黄褐細砂である。

柱穴内より瓦器片が出土している。また、検出時に上面から13世紀代の須恵器椀片が出土している。

時期は遺物から鎌倉時代の建物と考えられる。(西口)

### **【18区】**(図版84・85・298)

東西77.5m、幅6.0mの東西に長い調査区である。西側は20区に接している。中央西側に北側の16・17区から続いている大溝(**SR1801**)が検出されている。調査の結果、全体に耕作痕が認められ、水田域であったことが確認された。溝と土坑を検出している。溝は耕作痕(鋤溝)で、土坑で性格が明らかなものはない。

東端では下層の蛇行した状況の旧河道(**SR1802**)が確認されている。さらに東側では炭が充満した炭土坑が検出されている。溝・鋤溝も多数確認されており、2種類の主軸方向がある。

出土遺物は僅かである。**304**は須恵器蓋で**SK1802**から出土している。内湾する体部で端部が肥厚しているような小さな反りが付いている。**305・306**は須恵器で**SD1801**出土である。**305**は内湾する杯蓋で口縁部は直立し端部丸い。**306**は壺体部上半で内湾しており、肩部に刺突文が施される。器壁厚めである。**SD1806**出土の**307**は有孔土錘で片端を欠いている。頭部はほとんど肥厚していない。円孔があり

断面円形。

(渡辺)

## 【20・21区】(図版86～88・300・301)

北半が20区、南半が21区であるが、同時期に調査したので、併せて報告する。

南北73.0m、幅6.5mの調査区である。確認した遺構は、大溝、溝、不明遺構、土坑、柱穴である。

ピットは10数基調査しており、南端のものは、27区のSB2701の一部であり、27区で報告する。また、SR2002の東側に1列に並んだ柱穴列があり、柵跡SA2001とした。3間分調査している。

溝は4条確認している。SD2001・2002は不定形の溝である。SD2003は大溝SR2001から分岐したSR2002に流れ込んでいる。調査区と同じ方向の新しい時期の主軸方向を示している。SD2004はSR2002から直角に曲がっている溝である。

土坑も8基検出しているが、性格のわかる遺構はない。平面形は、円形・楕円形・不定形とさまざまである。348・349はSK2005出土で、348は外傾する口縁部で体部直立する土師器甕である。349は須恵器杯蓋で内湾する天井部から口縁部で端部外側に尖らす。350はSK2008出土の須恵器杯蓋で端部は残っていない。つまみはボタン状のもので、天井部は平たい。2基の土坑以外は時期を明確に示す遺物も出土していない。

不明遺構は2基ある。SX2001は方形であるが、竪穴住居跡ではない。SX2002は不定形を呈している溝状の落ち込みである。遺物は小片しか出土していない。351は杯Gである。内湾し端部外側に尖る。

調査区内をほぼ南北に大溝SR2001が通っている。北側17・19区や南側27・40区へ延びている大溝である。中央部分は他地区の大溝より浅くなっている。北側は深く、断面形状もV字形になっている。352は土師器高台付の皿で、高台は断面方形で低い。口縁部は内湾し端部反り肥厚する。内面にはミガキがみられる。353は土師器甕で器壁は厚めで直立する体部である。口縁部は外反し端部内側につまみ出す。外面ハケ整形。354～361は須恵器で、354は杯蓋である。平たい天井部から内湾し端部肥厚する。355は杯身で平底から外傾する口縁部で端部丸い。体部と底部の稜線は甘い。356は皿で平底から外傾し端部丸い。357は皿で平底から外傾する口縁部で端部やや反って丸い。358は壺底部で平底から外傾する体部。359も壺底部で外側に開く方形の高台を持つ。体部は内湾し肩部の明瞭な稜線になる。360・361は甕口縁部である。体部はともにタタキ成形である。

(渡辺)

## 【23・24区】(図版92～94・302)

37区西側で東西方向54.0mが23区で、それから直角方向の幅6.5mの南北に長い調査区が24区である。調査面積は2地区合わせて527m<sup>2</sup>である。

遺構は、不明遺構・溝・土坑・柱穴を確認している。不明遺構は2基あり、重複している。SX2302からは埴輪が出土している。形象埴輪も含まれている。残存状態は悪い。

溝は5条あり、東側で検出したSD2301は、南東方向の37区に延びている(SD3711)。緩やかに蛇行した幅0.7～1.2m、深さ30cmの溝である。底からは弥生土器が出土しており、上層には須恵器が出土している。南北方向に主軸を採るしっかりした溝である。断面の形状は台形である。379は弥生土器甕底部で僅かな上げ底から外傾する。380は弥生土器高杯筒部である。SD2302～2304は直線的に延びる溝で、

SD2302・2303は南北方向に、SD2404は東西方向である。SD2404からは図化できる土器が出土している。381で須恵器甕口縁部である。外傾し端部肥厚している。2条の波状文帯があり、その間および上下には凹線が認められる。図示できる遺物は出土していないものの、SD2301を除く溝跡は平安時代に下る遺構であろうと思われる。

土坑は3基あり、SK2302から弥生土器が出土している。375は壺口縁部で中期後半の土器である。外反する頸部から口縁部で端部は内外に肥厚する。ハケ整形をし、肩部には直線文が見られる。柱穴も8基確認しているが、時期なども不明である。

不明遺構は2基あり、切り合い関係にある。SX2301をSX2302が切っている。SX2302の西側はSD2301が新しい遺構で切っている。また、南辺は確認調査によって切られている。SX2302の規模は幅2.6～3.3m、長さ5.2m以上で北側の調査区外に延びている。深さは最大30cmとあまり深くない。SX2301は4.0m四方前後かと思われる。深さは10cmあるかないかで、かろうじて残っている程度である。376は朝顔形埴輪でSX2301から出土している。口径42.5cmと大形である。円筒部との接続部で割れている。内面は横方向、外面は縦方向のハケが見られる。SX2302からは須恵器杯Aと埴輪脚台部が出土している。377は上げ底で外傾する体部で端部反りぎみに尖る。378は外開きになっており、内面ユビ、外面斜め方向のハケ整形である。非常に低くなったM字形のタガで裾端部は方形で外側に肥厚する。器形から石見型盾の脚台であろう。2個の遺物からSX2302は奈良時代前半の落ち込みで378は本来SX2301の遺物と考えられ、6世紀後半の遺構であり、近接地にこの時期の古墳が構築されていたと想像される。

(渡辺)

## 【25区】(図版95～97・302)

調査区西側に位置する。遺構が集中している26区の北側である。密度は減少しているものの、遺構は築かれている。北側にも遺構面は広がっているはずであるが、山陽本線工事時の土取りにより面下げされており、遺構面は削平されている。南北方向に長い90m<sup>2</sup>の狭い調査区である。

確認された遺構は、掘立柱建物跡・柵跡・土坑・柱穴である。掘立柱建物跡は2棟検出している。SB2501は北端で検出しており、調査区外へ延びている。東西2間、南北1間を調査している。東西は3.0m(1間1.5m)で、南北は1.8mを測る。柱穴は最大径80cmとやや大きい。他の3基は60cm前後である。深さは25～30cmと近い値を示す。主軸はN25°Wである。SB2502は南端で、柱穴が26区に入っている。2間×3間の小規模な掘立柱建物跡である。南北3.2m、東西2.6mを測る。柱穴の径は22cm前後と小型である。その分、深さは最深で45cmと深い。主軸方向はN18°Wである。出土遺物は弥生土器に限られており、坂元遺跡唯一の弥生時代の掘立柱建物跡である。382は高杯口縁部である。やや外反ぎみに延びる体部から水平に開き、上部に方形の突帯が付く木器模倣形高杯である。端部は角張り僅かに肥厚する。垂下はしていない。表面磨滅が著しい。383は底部で平底から外反している。外面はヘラミガキで仕上げる壺である。坂元遺跡で確認されている大多数の弥生時代の遺構と同じく中期後半の掘立柱建物である。

柵跡(SA2501)は調査区西壁沿いに検出している。3間分調査しており、4.6mを測る。南側2間は柱間1.4mで、北側1間は1.8mである。調査区外へ延びる掘立柱建物跡の可能性も十分に考えられる。径は30～45cmである。主軸方向はN45°Eである。

土坑は中央部で2基調査している。SK2501は径1.4m、深さ0.2mで、埋土は灰黄褐極細砂である。出土遺物は縄文土器かと思われる387の破片である。磨滅しているが晩期の土器片と思われる。ただ、埋土はSK2502と同じ灰黄褐極細砂で確実に古くなる土坑かは決めがたい。SK2502はSK2501の東側に隣接して位置する、楕円形のやや大型の土坑である。長径2.8m、短径1.6mで、深さは0.2mを測る。断面形態は皿状になっており、自然堆積を示している。3点の弥生土器底部が出土しており、弥生中期後半の土坑である。386は平底から内湾する体部でハケ整形で外面はヘラミガキを行う壺である。(渡辺)

## 【26区】(図版98～115・303～306)

25区の南側、JR線路の北沿いの調査区である。遺構が密集しており駅子の集落の中心地域と思われる。東西に長い調査区で、面積は1,303m<sup>2</sup>である。遺構は、掘立柱建物跡・柵跡・大溝・溝・不明遺構・土坑を確認している。

掘立柱建物跡は23棟確認している。主軸方向は大きく3種に分かれる。大型の建物はなく、梁行2間を基本とし、桁行3間が最も多い。全体的に掘立柱建物は分布しているが、比較的東側には存在していない。また、旧河道SR2601に近い南側にも築かれておらず、空白地となっている。総柱建物は北西部に2棟存在するだけである。他の調査区でも東側の38区SB3801まで50m離れている。主軸方位は南北を採る建物の方が南に偏り、45°振るものが北側に偏っている傾向がある。

SB2601は調査区北西に近い部分で検出しており、旧河道の東側に平行に走る溝SD2603の東側に位置している。主軸方向が同じであることから、同時期の遺構と思われる。東西3間(4.4m)で南北に2間分(4.0m)調査している。北側に延びている可能性が高い。深い柱穴は底に灰白シルト質極細砂や灰黄褐シルト質極細砂と淡い粘土質の土を敷いている。多くは地山に柱を接地するように置いている。柱を抜いた痕跡は検出できなかった。柱穴は南西隅が大きく最大長で80cmを測る。深さは60cmが最深である。7基の柱穴から遺物が出土している。須恵器・土師器の小片が出土しているが図化していない。1～11片の土器が出土しており、奈良時代の範囲と思われるが、細かい時期は断定できない。

SB2602はSB2601の東側にある総柱建物で、東西3間(4.0m)で南北2間(2.4m)以上である。南西隅の柱穴が大きい。1基だけ建替えが確認できる。7基から須恵器・土師器小片が出土している。

SB2603は西のSB2602を切っている。3間(3.6m)四方の側柱建物で数基の柱は抜かれている。

SB2604は25区との接点南にある南北2間(3.4m)、東西3間(5.4m)の側柱建物で西側隅が深くなっている。抜かれている柱が多く、底に粘土質を敷く柱穴もある。1基の柱穴から10数片土器出土。

SB2605はSB2603の東にある南北3間(4.0m)東西2間((3.8m)の側柱で、北辺が深く築かれている。柱を切って整地している。4基の柱穴から土師器が出土している。

SB2606は奈良後半期の中心を限る溝SD2603の西側外部に唯一存在する。南北2間(4.2m)東西2間(3.2m)の側柱で深度は浅い。遺物は出土していない。

SB2607は南西部にあり、南北5間(4.4m)東西1間(2.8m)の側柱である。比較的深く底に土を置いている。建替えもあり、柱を抜いたものもある。

SB2608は南西で検出した側柱建物で、東西5間(8.4m)南北2間(3.4m)の南北棟である。多くの柱穴から土師器を主に出土している。図化したのは須恵器杯A388で平底から外傾し端部丸い。

SB2609は中央南側にある建替えのある側柱建物で、柱穴は方形プランの80cm前後と統一されてい

る。一部抜き取りも見られる。東西2間(4.6m)南北3間(6.9m)で土師器杯Aが出土している。389で平底から屈曲して外傾し端部肥厚する。全体的に遺物多く製塩土器を含んでいる。

SB2610はSB2609の東側に並ぶ南北棟である。南北3間(6.4m)で東西も3間(4.6m)と思われる。柱は抜かれている。土師器片が2点出土している。

SB2611は25区南東部にある不明確な建物である。東西2間以上南北1間以上で北に続く。

SB2612は中央にある南北3間(6.4m)東西1間3.0m)で柱は抜かれている。土師器小片出土。

SB2613は東西2間(7.2m)で南北1間(2.0m)以上で北に延びれば総柱となる。

SB2614は中央にあり東西2間(3.4m)南北3間(5.6m)で方形プランの柱穴で抜き取りもある。

SB2615は北東部にあり東西2間(4.8m)と推定(攪乱で中央欠)され南北1間以上。柱穴は方形プランのしっかりした側柱建物である。比較的多くの遺物が出土しており製塩土器も含まれる。図化した土器は須恵器4点(390~393)で393だけ杯Bである。390・391は厚めで平底から外傾する。

SB2616は中央東側にあり南側に延びている。南北2間(2.6m)東西3間(5.6m)以上の側柱建物。

SB2617はSB2616の東にあり、南北2間(4.0m)東西4間(7.6m)で方形プランの柱穴で多くの柱は抜かれている。遺物は多くあり、394は須恵器杯蓋で内湾し端部垂下する。395は土師器椀口縁部で内面にミガキが見られる。396は釣鐘形のイダコ壺で把手部は余り大きくはない。体部は内湾する。

SB2618は中央にあり南北3間(4.6m)東西2間(4.6m)以上で東側は残存していない。東側に庇が付く可能性がある。柱穴は浅く、遺物も出土していない。

SB2619は南東部にある南北2間(3.8m)東西4間(6.8m)で柱穴は整地されている。397は須恵器杯Bで外側に開く高台で端部反る。T50は格子タタキで凹面は布目である。製塩土器も出土している。

SB2620は南西部にあり東西2間(4.6m)で南側に延びている。南北は1間(2.4m)以上である。

SB2621は中央にあり、現況で東西1間(4.4m)南北2間(6.4m)以上である。

SB2622は南東部にあり東西2間(3.2m)南北4間(5.6m)以上で柱径は40cm前後とやや小さい。

SB2623は北西にあり、SB2605と切り合い関係にある。南北2間(3.0m)東西2間(3.6m)で柱穴は大きい。

柵跡は数基あるが、すべて調査区端部に位置しており、調査区外へ延びる掘立柱建物跡の1辺を検出している可能性が高い。

溝は14条調査している。蛇行している溝もあるが、多くは掘立柱建物跡と同じ主軸を持っていることから、建物に関連する溝と考えられる。

土坑は19基あり、そのうちSK2604・2605・2608・2610・2614の5基は弥生時代の土坑である。他は奈良時代と思われるが、性格は不明である。SK2601は最大長1.0mの楕円形の土坑で深さ15cmと浅い。口頸部を取った台付長頸壺405が割られて置かれていた。肩の張る体部で肩部に刺突文が施される。406は土師器椀でSK2603から出土している。落ち込みも6基検出しているが、土坑と同じ状況である。弥生土器のみを保有する落ち込み1基SX2604がある。弥生土器がまとまって出土している。411は直口壺で突帯を持つ。412は外反する口縁部で3条の突帯がありハケ整形である。413は壺体部で直線文と波状文で飾っている。414~416は甕口縁部で420は甕底部である。419は器高の高い高杯脚部で他は弥生土器も含むが奈良時代である。

SR2601は南側28区・31区に延びる同一流路である。底面が平たくなった弥生中期から奈良時代の丸底になる時期がある。奈良時代の底から10cm上の暗褐極細砂に炭・焼土とともに多くの遺物が出土し

ている。炊飯具系のものが多い。424は弥生中期の大形壺口縁部である。短い口縁部で頸部に突帯に指圧痕がある。425は後期の高杯脚部で裾は広がる。430は鍋で端部は上につまみ上げ体部は内湾する。435は竈の把手部で中空で横に突帯を持つ。436はイイダコ壺で頭部が角張る細長いものである。(渡辺)

## 【27区】(図版86・89～91・307)

JRの北側の調査区で、西側が南北道部分(37区)になっている。北側には21区が位置している。15.0mと幅が広い調査区である。調査面積は772m<sup>2</sup>である。

検出した遺構は、掘立柱建物跡1棟、流路3条、溝6条、不明遺構2基、土坑8基、柱穴である。

掘立柱建物跡 **SB2701**は総柱建物で、21区に延びている。3間×3間で、南西部の3基の柱穴は攪乱坑で削平されているが、そのうちの2基は攪乱坑断面に残っている。南西隅柱穴のみが残存していない。1辺4.2mの方形である。柱痕は16～20cmと中規模である。出土遺物は須恵器・土師器の小片だけである。

流路のうち2条は他地区にも続いている。西側の **SR2701**は、北側17・19・20区、南側40区に延びている。幅7.0mと広がっているが、深さは50cmと浅い。他地区で検出している状況とは異なっている。土師器3点、須恵器5点を図化している。438は鍋で内湾する体部から外反する口縁部になる。439・440は土師器高杯である。椀形の杯部で439は浅い。441・442は須恵器杯で、441は丸底から内湾する口縁部で端部丸い。器壁は厚い。442は平底で外傾する口縁部になっている。443は高杯脚部で外反し端部下方に引き延ばしている。444は大形の甕口縁部で外傾し端部折り返している。頸部の稜線は看取されるが、鋭くはない。445は甕で内湾する体部でタタキ成形である。口縁部は外反し端部内外に肥厚する。**SR2702**は調査区東端で確認しており、16～18区から続いている。幅4.8m、深さ1.4mの緩やかなV字形をしている。446は須恵器杯Bで外に開く断面方形の高台が付く。平坦な底部から直立ぎみに外傾する口縁部で端部尖っている。**SR2703**は **SR2702**から分岐した大溝で東側の調査区外へ延びている。幅2.7m、深さ60cmを測る。東側の工事立会いで **SR2703**は20m付近で南側に曲がっていることを確認している。

溝は、**SD2701**が **SR2701**の東側に、**SD2706**が **SR2702**の西側に各々平行に走っている。他地区でも大溝に平行に築かれた溝は多く検出されている。**SD2701**と **SD2703**は直交し、主軸方向は **SB2701**と同じである。

不明遺構・土坑は、すべて性格不明である。**SX2701**は南側壁沿い中央にある。浅い不定形の落ち込みである。東西8.1mで深さは10～30cmと差がある。図化した遺物は土師器甕4371点である。直立ぎみに内湾する体部で内面の稜線鋭く、外反する口縁部である。端部は尖っている。土坑も不定形のものである。(渡辺)

## 【28区】(図版116～129・308～317)

遺跡西側のJR南沿いの東西に細長い調査区である。長さ110.0mで、面積は592m<sup>2</sup>である。東側に39区、南側に31区が接している。調査区西側に段丘崖があり、その西側は低地になっており、旧河道・水田となっている。検出した遺構は、掘立柱建物跡・柵跡・大溝・溝・不明遺構・土坑・竪穴住居跡・柱

穴である。

竪穴住居跡は **SH2801** の 1 棟を検出している。東端で確認しており、やや不定形ながら多角形プラン（八角形）をしている。最大長 5.5m を測る。壁はほとんど残存しておらず壁溝だけが確認され南側に続いている。西側床面に大きめの土坑が存在し、そこから遺物は出土している。**447**～**450**・**455**は壺で**447**は端面に大き目の刻み目を入れ口縁部に円孔がある。**448**は端面に斜格子、頸部に 3 条の突帯を有す。**449**は大形で頸部も長く外反し口縁部は直立し端部肥厚する。頸部に指頭圧痕の付く突帯があり凹線がある。**451**～**454**は甕で薄く仕上がっている。磨滅が著しい。

掘立柱建物跡は 10 棟確認している。**SB2801**は東西 3 間(4.4m)南北 1 間(2.0m)以上の建物で、調査区北側に延びている。柱穴は 1 基だけ径 80cm と大きい、他は 40～50cm である。土師器甕**457**を図化している。くの字で内外面ともハケ整形である。他に甑把手が出土している。**SB2802**は東西 2 間(3.6m)南北 3 間(5.0m)以上である。径 50cm 前後の柱穴で、柱を抜いたものが多い。458の土師器高杯か杯が 1 点出土している。体部に凹線を持ち端部は反る。**SB2803**は南北 2 間(4.2m)東西 3 間(5.8m)以上の東西棟である。主軸はほぼ磁北方向を示している。柱穴は方形プランで、柱は抜き取られ整地されているものが多い。須恵器高杯裾部**459**と円面硯**460**が出土している。**460**は方形透孔を持つ小片である。磨滅した縄文土器も出土している。**SB2804**は東西 3 間(5.4m)南北 2 間(3.0m)以上の規模で、柱穴は方形プランで 70～80cm の最大長を測る。調査区内の北辺は 1 間 1.8m を測る。2 間×3 間の建物なら東西棟になる。天井部の丸い須恵器杯蓋**461**を図化した。**SB2805**も南側に延びる東西 2 間(3.2m)×南北 1 間(1.7m)以上で、南北棟と思われる。柱を抜き取った柱穴がある。**SB2806**も南側に続く 3 間(5.0m)×1 間(2.0m)以上の建物で整地土を入れる。弥生甕**462**・有孔土錘**463**・丸瓦 **T12**が出土している。サヌカイトチップも数点確認している。**SB2807**も柱を抜き取った方形プランの柱穴である。南側へ延びており、3 間(6.3m)×1 間(1.7m)以上の建物である。**SB2808**は **SB2803**と切り合い関係にある建物で、主軸は同じである。東西 2 間(3.7m)以上×南北 1 間(2.2m)以上である。柱は切られ土を入れている。**SB2809**は径 40cm 前後の円形プランの小型柱穴で南北 3 間(5.6m)×東西 2 間(3.4m)以上の建物で調査区外に延び、**SB2807**と切り合い関係にある。**SB2810**は東西 3 間(3.8m)で南北 1 間(2.3m)以上の南北棟である。

柵跡は 3 列確認しているが、すべて掘立柱建物跡の 1 辺の可能性が高い。特に **SA2801**は方形柱穴で東西 2 間(3.6m)の南北棟と思われる。**SA2802**の柱穴は小形である。

土坑は 14 基調査している。**SK2801**は南側に続くもので弥生中期の土坑であろう。幅 1.1m の溝状になる。底面は平坦で底に土器がある。取り上げ時に 2 点の須恵器長頸壺**487**と短頸壺**488**が混入したものと思っている。**482**は口唇部に刻みを有する直口壺で頸部に指頭圧痕の付いた突帯を回す。**486**は接合しないものの 1 個体と思われる大形甕である。他の土坑は不定形で性格不明である。**SK2802**・**SK2812**からは弥生底部が出土している。**SK2805**は方形プランに突出部が付く。0.9×1.6m の浅い土坑に飛鳥期の須恵器が入っている。杯身と蓋・甕で時期差を多少持っている。**SK2810**からは須恵器杯 **B499**と土馬の脚**500**・有孔土錘**501**が出土している。

不明遺構は 9 基調査している。弥生・古墳時代の落ち込みが半数である。**SX2804**は多量の古墳時代後期の遺物を出土している。須恵器は杯蓋**503**で天井部丸く端部尖る。**504**～**506**は反りの付く杯身、**505**・**506**は杯身で深さがある。**510**は一見すると甕口縁部のようなが方形透孔を有する。脚台で小形器台であろうか。**511**は脚台である。土師器は竈が出土している。火を使った祭祀土坑かもしれない。

大溝は26区から続き、31区へ延びていく **SR2801**である。幅4.5m、深さ1.6mを測る。下層からは古墳時代後期の須恵器・土師器が、上層からは奈良時代の土師器・須恵器が出土している。**516・517**は弥生後期の土器である。**518**は古墳初頭の二重口縁壺である。**520**は甕で2次焼成を受けている。**521**は円筒形土器で端部肥厚している。**524**は甑口縁部でハケ整形で端部反る。**525**は鉢で片口が付く。底部がドーナツ形になり刻み目状の痕跡が付く。**526～528**は竈裾部で厚く突帯が付く。**540**は杯Bで底面に墨書がある。記号の下に「大家」とある。**541**は端部が水平に延びる須恵器皿である。**545**は須恵器壺でタタキ成形で肩部に円形の縦耳が3ヶ所付く。西の肩から5m離れたところが段丘崖になっている。段丘崖の下にも溝があり、さらに段が下がって流路 **SR2803**が確認された。その上面には奈良時代の遺物が投棄されたのであろうか、多量に出土している。斎串や木筒・墨書土器も出土している。流路(**SR2803**)内からは古墳時代の遺物が出土している。幅7.0mを測り、別府川の旧河道かと思われる。古墳時代前期の土師器と後期から奈良時代の土器が出土している(**551～577**)。時期幅があり、凶化した以外に炊飯具系の土器が多いのは他地区流路と同様である。**558**は内部に円形浮文が並んでいる。

溝は9条確認している。東側の **SD2805**は大きく弧を描いて流れる溝で東側は40区へ延び、西側は南側へ曲がっている。弥生時代に掘削された溝で、古墳時代まで機能していたようである。西端の大溝に近い **SD2812**も蛇行している。それ以外の中央部分の溝は直線的である。特に **SD2809**は中心集落を限る区画溝のようである。

**578～590**は西側低地の遺物で奈良時代に限られている。**SR2801**西側で **SR2803**までの部分である。墨書土器**586・587**や漆記号のある**581**もある。**SR2803**西側を28区谷部とし、**591～617**を凶化した。(渡辺)

## 【29区・39区】(図版130・318)

29区はJR高架線の南側に位置する。調査区はJR線に沿って南東から北西に延びる幅6.0m・全長約85.0mの調査区である。段丘上に位置する。西側は39区に接しておりまとめて述べることにする。39区はJR南側の南北道予定地の調査区で、東側が29区、西側が28区、南側が40区である。調査面積は162m<sup>2</sup>である。

検出できた遺構の大半は溝・畦畔・水田区画痕跡である。その殆どが水田跡に伴う遺構と認識でき、29区は段丘上に位置するが、生産領域として使用されていたと考えられる。

調査の結果、柱穴20個・奈良時代と考えられる水田跡、水田跡に伴う畦畔・溝22条、弥生時代から鎌倉時代にかけての流路2本を検出した。

また、39区は遺構の密度は比較的低い地区である。東側に40区に続く **SR2902**がある。断面形はV字形になっている。柱穴10数基と溝4条を検出している。西端で検出した南北に走る溝(**SD2804**)は中心集落を限る区画溝と思われる。そのことから、溝の東側は遺構が少ないものと思われる。

**流路** 流路は32区において検出した **SR3201**の延長(29区では **SR2901**)、40区において検出した **SR4001**の延長(29区では **SR2902**)の2本である。基本的には32区・40区の状況と同じである。

遺物は **SR2901**から平瓦 **T61**が出土している。**SR2902**からは、弥生土器壺**618**・高杯脚**619**、不明土製品**620**、須恵器杯体部**621**・甕**622**が出土している。

**溝及び水田区画** 水田跡に伴う溝は、正南北もしくは正東西方向に向く **SD2903・SD2904・SD2906・SD2918**(プランA)、現地表に残る条里型地割りに踏襲される北西から南東方向に向く **SD2901**・

SD2902・SD2907・SD2908(プランB)、北東から南西に向くSD2910～SD2917の大きく3方向の溝に大別できる。このうち、SD2910～SD2917はSR2902・SR2901の方向に沿って区画された水田に伴う溝の可能性が考えられる。

検出された溝はいずれも洪水砂礫の下にあるか、もしくは洪水砂礫によって埋没している。この洪水砂礫は、40区・32区・30区においても検出されており、8世紀末から9世紀の間に供給され、遺構面を被覆した洪水砂礫と同じと考えられる。

#### プランA. 正方位に向く溝 SD2903

SD2901・2902と切り合い先行する。溝の東側に約1.7mの間隔をあけて柱穴状の窪みP001～005が直線的並んでおり、この間が大畦畔であった可能性が考えられる。

#### プランB. 現地表に残る条里型地割りに踏襲される溝 SD2901・2902

溝のうちSD2901・2902は現地表に残る条里型地割りの直下であり、2本の溝の間が大畦畔であったと考えられる。溝間の幅は約1.1mである。(西口)

### 【30区】(図版116・131・132・319・320)

30区は31区の西側に延びる幅3.0m～18.0m・全長約46.5mを測る調査区である。調査区の中央には段丘崖があり、東半部は段丘上にあたり、西半部は段丘下に位置している。

#### 〔段丘上の調査〕

31区SR3101と段丘崖の間部分では耕土・床土下に律令期の薄い包含層を挟み、直下から地山面が出現する。地山面上からは、奈良時代の掘立柱建物跡2棟・方形竪穴住居跡2基、土坑・柱穴群を検出している。

#### 掘立柱建物群・柱穴群

柱穴は調査区の全域に分布しているが、後世の削平のため残りが悪く、建物の復元はほとんどできていない。

#### SB3001(図版131・319)

段丘崖際において検出した。SB3002と重複するが先後関係は不明である。桁行方位を東西方向N90°Wほぼ東西にとる側柱建物跡である。桁行東西3間(6.3m)・梁行東西2間(4.2m)の規模である。建物の柱間は、桁行1間2.1m・梁行1間2.0mである。

柱穴は円形を基本とし掘方径約45cm、柱痕は径約20cmである。図示できる遺物はないが、623はSB3001を切る新しい柱穴P090より出土した須恵器椀である。10世紀代と考えられる。

#### SB3002(図版131)

SB3001と重複するが先後関係は不明である。桁行方位を北東方向N42°Eにとる側柱建物跡である。桁行南北2間(3.3m)・梁行東西2間(2.7m)の規模である。建物の柱間は、桁行1間1.15m・梁行1間1.35mである。柱穴は円形を基本とし掘方径約50cm、柱痕は径約20cmである。

#### 方形竪穴住居跡

2か所において方形竪穴住居の壁溝と考えられる遺構を検出しているが、1か所はSR3101近く、調査区外に大半があり、住居と確定できない。また、何れも遺物の出土が少なく、時期は詳らかではないが、31区の例と不整な形状から律令期の方形竪穴建物の可能性を考えておきたい。

### SH3001 (図版13)

SB3001と重複する。平面形状は隅丸方形と考えられるが、西辺・南辺の壁溝周辺を残し、後世の削平を受け消失している。規模は、一辺約4.0m・床面までの深さは削平のため残っていない。

屋内施設として壁溝を検出した。壁溝の幅は15cm～25cmを測る。

住居に伴う柱穴は詳らかではないが壁溝にそって径20cm前後の柱穴が存在する。

#### 〔段丘下の調査〕

段丘下からは溝・大畦畔・畦畔・流路跡を検出した。

段丘下は全体に湿地状態となっている。層序はⅠ層現耕作土(1層)・Ⅱ層近世耕作土(2層)・Ⅲ層黒腐植質シルト(17層)・Ⅳ層ピート層(18層)・Ⅴ層灰黄褐腐植質混じり中砂(20層)・Ⅵ層灰黄褐シルトⅠ(22層)・Ⅶ層にぶい黄橙洪水砂礫Ⅰ(24層)・Ⅷ層褐灰シルトⅡ(26・29層)・Ⅸ層灰黄褐洪水砂礫Ⅱ(30・32層)・Ⅹ層灰シルト(ベース39層)の順に古くなる。

調査はⅠ・Ⅱ層を機械、以下を人力掘削によって除去し、Ⅹ層上面において遺構を検出した。

Ⅲ層からは瓦器碗片が出土しており中世前期に入る時期と考えられる。

Ⅳ～Ⅴ層からは9世紀もしくは以降の遺物が出土している。Ⅲ層を中世前期と考えれば、9世紀から古代末までの堆積である。付け札木簡2点がⅣ・Ⅴ層間から出土しており、内1点は『急々如律令』の文言から呪符木簡と考えられる。

Ⅶ層(24層)は40区・32区・29区においても検出される遺構面を被覆した8・9世紀間に供給された洪水砂礫と同一起源の洪水砂礫であろう。

Ⅷ層褐灰シルトⅡ(25・26・29層)は、流路の埋土(26層)であり、更に肩から西側に広がり29層となる。25層は局地的にあり畦畔の可能性が高い。26層の直上には後述する大畦畔SX3001が営まれ、26層・29層自体も水田土壌化したと考えられる。

段丘下から検出できた遺構は流路・溝・畦畔・水田区画痕跡である。その殆どが水田跡に伴う遺構と認識でき、低湿地部分は生産領域として使用されていたと考えられる。

### 溝(図版131)

段丘崖直下からは2本の溝(SD3001・SD3002)が検出された。両溝ともに現条里型地割りと同じくする北東方向を向く。これらの溝は堆積状況から推してSR3001が埋没した後に機能した可能性が高い。

#### SD3001 (図版131・319)

調査区中央段丘崖中位より検出した。SD3002と並行する。北東方向に延びる。幅1.2m・深さ20cm前後を測る。SD3002より後に埋没する。埋土は灰黄褐腐植質混じり中砂を埋土としている。遺物は須恵器杯蓋624が出土している。

#### SD3002 (図版131・319)

調査区中央段丘崖中位より検出した。SD3001と並行する。東西方向に延びる。幅約2.5m・深さ25cmを測る。方位から15区SD1516へと繋がる可能性が高い。埋土は灰褐礫混じり腐植土を埋土としている。遺物は須恵器杯A625が出土している。

#### 流路 SR3001 (図版131・319)

SD3001・SD3002の西側、段丘裾を北東方向へ流れる。段丘下から測る流路の幅は約6.0m・深さは約1.2mを測る。断面形状はV字に近いU字形である。

埋土は黄灰シルト36層～褐灰シルト26層が堆積し、更に水田化(25・26・29層)し、最終的には洪水砂

24層によって完全に埋没する。検出した流路は古墳時代後期から奈良時代にかけて機能しており、須恵器杯やヒョウタンなどが出土している。段丘上の流路と同じく、人為的な改変が加えられたと考えられる。流路の肩部を形成する砂礫層内からは段丘上から流れ込んだと考えられる弥生土器が出土しており、Ⅹ層灰白色シルトよりも下層に大規模な流路(河川)が存在すると考えられる。

遺物の中で626～630・633・636はⅦ層から出土している。626は土師器皿である。627は須恵器杯蓋である。白沢3号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。628は20cm近い口径をもつ須恵器杯Bである。投松6号窯の製品に近い形態であることから、平城宮Ⅴ段階8世紀後半の時期が推定できる。629は土馬の胴部と考えられる。630は須恵質の不明製品である。633は須恵器杯である。投松2号窯下層の製品に近いことから、平城宮Ⅴ段階8世紀後半(第4四半期)の時期が推定できる636は須恵器杯底部である。外面に『西』の墨書がある。Ⅶ層には概ね8世紀後半の遺物が流れ込んでいる。637はⅥ層から出土している。深みのある土師器杯である。8世紀前半と考えられる。

631・632・634・635・638はⅧ層から出土している。631は須恵器杯蓋である。白沢3号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。632は須恵器杯蓋である。631と同じく白沢3号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。634は深い須恵器杯(杯E)である。白沢3号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。635は須恵器杯B、白沢3号窯あるいは西ノ池1号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。638は須恵器杯Aである。西ノ池1号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。Ⅷ層には概ね8世紀前半の遺物が入っている。

#### 大畦畔 SX3001(図版132)

半ば埋没したSR3001を横断し段丘下の湿地部分を北西に走る。幅約1.2m・高さ約30cm以上を測り、流路上では補強のため胴木を渡し、杭を打ち込んでいる。また、畦畔は植物を敷き込み、粘質の腐植質シルトを貼って盛り上げている。胴木は全長3.5m・径15cmの丸太材を含む2本を長軸に沿って使用している。この畦畔は最終的には洪水砂によって埋没する。31区において検出された土橋や40区・33区において検出された北西方向に走る大畦畔跡の延長上にあり、現地表に残る条里型地割りに踏襲される古代の地割りの一部と認識できる。この大畦畔は更に西側では貼り石による補強を伴う部分が検出されている。

大畦畔を含む水田遺構はSR3001が埋没した後に営まれている。遺構は大畦畔以外には、大畦畔に取り付く畦畔痕跡を検出している。水田土壌中からは奈良時代の須恵器杯・蓋等が多量に出土しており、水田遺構の時期も遺物の時期からあまりかけ離れたものでないと推測される。

#### 各堆積層の遺物(図版319・320)

639・655はⅡ層から出土した。639は須恵器杯蓋片である。外面に2文字の墨書がある。655は須恵器杯Bである。高台裏に『□女』の墨書がある。高台は細く低い、9世紀代の杯と考えられる。

640・641・642・646はⅢ層から出土した。640は土師器皿である。形態から推して10世紀前半と考えられる。641は土師器大皿である。9世紀代と考えられる。642は土師器碗である。口縁部が外反を見せる。9世紀以降のものであろう。646は緑釉陶器碗である。

643・644・645はⅢ～Ⅴ層から出土した。643は須恵器杯Aである。中谷3号窯に類例をみる。9世紀後半の時期を考える。644は須恵器杯A、中谷2号窯に類例をみる。9世紀後半の時期を考える。645は須恵器杯Bである。形態からは8世紀前半か。

647・653・659・660・664はⅣ層から出土した。647は須恵器杯Bである。投松6号窯に類似する製品とみて8世紀後半の時期が考えられる。653は口縁部に特徴をもつ須恵器皿である。659は須恵器杯底部と考えられる。『吉□』の墨書がある。2文字目は家か。660は須恵器杯底部と考えられ、一文字の墨書がある。『郡』もしくは『駅』と考えられる。664は須恵器杯、外側面に『部』の墨書がある。

648・649はⅣ層～Ⅵ層から、666・667はⅣ～Ⅴ層から出土した。648・649は土師器杯である。底部はヘラ切りする。外へ開く形態から9世紀代に入る可能性が高い。666・667は外方へ開く杯部をもつ。666は『□殿』、667には『美作』の墨書がある。類似する器形の製品は中谷2号窯などにあり、9世紀後半以降の時期が考えられる。658はⅤ層から出土した。須恵器杯蓋である。白沢3号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。Ⅳ・Ⅴ層には9世紀後半以降の時期の遺物が含まれている。

651・656・657・665・671・675はⅥ層から出土した。651は須恵器杯Bである。投松2号窯上層の椀aに形態が近く9世紀前半の時期と考えられる。656は須恵器杯蓋である。白沢3号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。657は須恵器椀蓋である。時期は8世紀後半と考えられる。665は須恵器杯Aである。底部外面に『西』の墨書がある。時期は8世紀後半と考えられる。671は須恵器杯Bである。底部外面に『□』の墨書がある。西ノ池1号窯との類似から見て、時期は8世紀前半と考えられる。675は円面硯である。洪水砂礫上のⅥ層には8世紀前半から9世紀後半もしくはそれ以降の時期の遺物が含まれている。

654・661・662・663・668・669・670・672・673はⅦ層洪水砂礫Ⅰ(24層)から出土している。654は須恵器杯蓋である。外面には『山方寺』の墨書がある。661は須恵器杯底部と考えられる。読み不明の『□』の墨書がある。662・663は須恵器杯蓋である。662は白沢3号窯に類似する個体を求められ、8世紀前半の時期が当てはめられる。663は投松2号窯あるいは6号窯の製品に近い形態であることから、平城宮Ⅴ段階8世紀後半の時期が推定できる。668は須恵器杯である。外側面に『部』の墨書がある。669は須恵器杯Bである。形態・法量を投松6号窯に類似とみて9世紀前半の時期が考えられる。670は須恵器杯Bである。西ノ池1号窯との類似から見て、時期は8世紀前半と考えられる。672は土師器甕、673は須恵器甕の上半である。Ⅶ層洪水砂礫Ⅰには8世紀前半から8世紀後半を主として、9世紀前半までの遺物が含まれている。(西口)

### 【31区】(図版133～151・321～334)

コの字形をした調査区で調査対象地の南西にあたる。調査区の位置から31-西区、31-南区、31-東区と呼称している。北側に28区が西側に30区が接しており、少し離れた東側に40区が位置している。調査面積は、989m<sup>2</sup>である。

調査した遺構は弥生時代から古代までと幅があるが、西区で2面の調査を行った以外は1面で調査を実施している。特に東区は耕土直下が遺構面になっており、大きく削平されている遺構も多い。弥生時代の遺構は竪穴住居跡・土坑・溝を、古墳時代は竪穴住居跡・不明遺構・土坑・溝を、奈良時代は竪穴建物・掘立柱建物跡・不明遺構・溝・土坑・土橋を調査した。

弥生時代の竪穴住居跡は3棟検出した。中期の住居跡2棟(建替え)と後期の住居跡1棟である。中期の住居跡であるSH3106の残存状態は比較的良好である。最大長は9.3mを測りやや大型である。壁溝

は2重にあり、建替えが行われたものである。2本の壁溝があるが、拡張ではなく移動した可能性もある。移動したならば、どちらも径は7.8mになる。拡張なら、内側は7.2m、外側は8.0mになる。壁溝の外側に壁があり、壁溝はその内側にある。壁は正円ではなく歪である。中央に径1.4m、深さ80cmの炉跡があり、そこから南側に間仕切り溝が走り6本柱と思われる。上面に築かれた古墳時代後期の住居跡SH3105の底からガラス玉J1(図版321)が出土している。長さ0.95cm、幅0.6cm、厚さ0.5cm、重さ0.4gを測る。SH3104の外側多角形プランを後期と形態から考えている。2辺を調査しており六角形であろうか。1辺4.5mで復原すると8.0m前後の大型になる。壁は15cm残存している。大溝SR3101は段丘崖に沿うように築かれたもので、弥生時代に掘削され奈良時代まで継続して使用されている。幅4.0~5.0m、深さ1.7~2.05mである。土坑は東区を中心に確認している。加古川周辺を代表する典型的な中期後半の土器を保有している。SK3103は長方形で皿状の断面となり西肩部に大形の甕685が出土している。丸みのある体部に短い口縁部が付く。SK3115は奈良時代のSK3114に切られている。SK3116は大型の土器693が置かれている。土器棺の可能性もある。SK3122は断面で検出したもので壺・甕・高杯が出土している。

古墳時代の竪穴住居跡は4棟ある。方形プランで壁溝を有している。弥生時代の住居跡と比べて残存状態が悪い。SH3101は壁溝だけしか調査できなかった。SH3103もかろうじて壁が残っている程度で、東辺6.0mの隅円方形で西側に延びている。北側だけ壁溝が残っている。SH3104は2棟の竪穴住居跡とを考えている。出土遺物は弥生土器小片だけで時期を確定できない。1辺4.5mの隅円方形で4本柱である。SH3105は弥生の住居跡上部に築かれており、1辺5.0m、深さは20cmを測る。大溝は継続して使用されており、底に近い黒褐シルトから多くの須恵器・土師器が出土している。溝も8条調査した。西区で交差するように確認している。

奈良時代前半も古墳時代後期から継続して生活を行っており、竪穴建物2棟、掘立柱建物跡7棟を確認した。竪穴建物は古墳時代の住居跡より小型である。フイゴ羽口を持っていることや焼土を伴うことから、工房跡と考えられる。SH3102は北辺4.8mで南側外へ延びている。西辺近くに炭が集中している。上屋構造は不明である。SH3107は1辺3.8mと小さめで壁溝を有する。4本柱と思われ最大80cmと柱穴は大きい。掘立柱建物跡は主軸をほぼ南北方向に持つ。SB3101は2間(3.2m)×3間(5.2m)の規模である。柱は抜かれていたり整地されている。鉢678が出土している。SB3104は調査区外に延び2間×2間以上で柱は大きめで方形である。SB3104・3105・3108・3110は調査区外に続く。SB3106とSB3107は主軸がN15°Wと異なった方位を示す。SB3106は東西3間(4.8m)×南北2間(3.4m)の東西棟で整地されている。多くの土師器片が出土している。SB3107は東西2間(4.0m)で南に続く。南北棟と東西棟がある。SR3101はこの時期に多くの遺物を入れている。炊飯具系の遺物が多い。甕は長胴が多く、把手付きもあり、鍋・甑・竈も多く出土している。土錘・タコ壺も多くみられる。特殊な遺物として横瓶795がある。イタチの爪跡が外面に付いているもので乾燥時に触ったものである。T2は軒丸瓦で北宿式の播磨国府系瓦である。SR3101の下側にあるSR3102からは竈を中心に炊飯具の大型品が多く出土している。把手付きやタガが回るものがある。796は口縁部にU字形の刻みと内面に窪みが作られており、甕を置く際の意図が示されていると思われる。

奈良時代後半になると、遺構の主軸方向が変化する。約44°東に傾いている。SB3102は南北3間(4.2m)×東西(3.6m)で柱の径は60cmとやや小さくなる。隅柱がやや深く柱痕認められる。SB3103は調査区外に延びる。SB3109は東西3間(4.8m)で南に延びている。N25°Wと主軸が異なる。また、SR3101の

中央に幅4.0mの土橋 **SF3101** を架けており、その両端に礎石建物か礎盤を入れた大型の掘立柱建物跡が築かれている。土橋の両端に1対あり、門と思われる。土坑は性格が明らかなものは少ない。**SK3117** は土師器小形甕**695**・甌**697**と須恵器鉢**696**を埋納したもので不定形で40cmあり、**SB3107**の南側に築かれており、関係が推測される。柵跡は2間のもので建物の1辺の可能性が高い。(渡辺)

## 【32区】(図版152～155・335)

32区は29区に接して南側に延びる幅6.0m・全長約80.0mを測る調査区である。検出できた遺構は流路・溝・畦畔・水田区画痕跡・柱穴・近世の埋桶である。その殆どが水田跡に伴う遺構と認識できる。

32区は段丘上に位置するが、生産領域として使用されていたと考えられる。

**流路 SR3201・3202**(図版152・153・335)

流路 **SR3201・SR3202** は2箇所において検出したため2つの遺構番号を振っているが、蛇行した1本の流路であろう。調査区をくの字に縦断して流れ、大きく調査区を2分割している。

流路 **SR3201・SR3202** は27区・18区を経て16区へと延びる流路である。段丘下に設定した15区の東端へと延びる可能性が高い。

幅4.0m・深さ1.3mを測るV字溝である。流路は古墳時代前期から奈良時代にかけて機能している。段丘上の他の流路と同じく、古墳時代後期には人為的な改変が加えられ、V字溝となっている。古墳時代後期から奈良時代前期にかけて遺物が大量に投棄されて埋没し、奈良時代後期以降には流路痕跡の窪地は水田として使用され、鎌倉時代に完全に埋没している。

埋土は弥生時代の堆積は砂礫が堆積しており、開削された溝底付近はグライ化した黒褐シルト・中層は黒シルト・上層には主に灰褐シルトが堆積している。

遺物は**818～836**を図示した。**836**は**SR3202**上層出土である。**818**は弥生土器の脚台である。**819**は23層から出土した須恵器杯蓋である。田辺編年TK10型式に相当する。**820**は須恵器杯蓋、4・5層から出土している。田辺編年TK10型式に相当する。**821～823**は須恵器杯H身である。**821**は立ち上がり退化しており7世紀前半代と考えられる。**822・823**は**821**に比べ法量大きい。**822**は溝底近くから出土している。共に田辺編年TK209型式、6世紀後半代の時期が当てられる。**824～831**は須恵器杯G身である。概ね中層から出土している。いずれも7世紀後半代の時期が当てられる。加古川市域では白沢2号窯採取品に類似するものがある。**832**は須恵器広口壺である。中層から出土している。**833～835**はイダコ壺である。**836**は飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の須恵器杯G蓋である。7世紀後半代の時期が当てられる。

### 水田遺構

主に調査区の中央より検出されている。流路に伴いくの字に南流する溝に沿って区画が検出されている。区画以外に水田跡に伴う主な遺構は溝である。溝は大きく流路に伴いくの字に南流するものと、現地表に残る条里型地割りに踏襲される北西・南東方向に向かうものを検出している。一辺4～5mの区画が検出されており、東西方向の畦畔はN45°Wにとり、後述する現地表に残る条里型地割りに踏襲される大畦畔と方位を一にする。

### 大畦畔

北西・南東方向に向かう溝のうち**SD3204・SD3205**は大畦畔に伴う溝と考えられ、31区において検出された土橋や30区・40区において検出された東西方向の大畦畔跡の延長上にあり、現地表に残る条里型

地割りに踏襲される古代の地割りの一部と認識できる。2本の溝間の内法は約3.0mである。SD3204は幅20cm、SD3205は幅65cmで、深さは共に5cm程度の浅い溝である。

#### その他の溝

##### SD3201(図版154)

調査区北半より検出した。北東方向に延びる。幅1.5m・深さ40cm前後を測る。にぶい黄褐シルト質細砂を溝底の埋土とし、中層には暗褐シルト質細砂、上層には灰黄褐シルト質細砂が堆積する。

##### SD3202(図版154)

調査区北半より検出した。東西方向に延びる。幅50cm・深さ20cm前後を測る。灰シルトを埋土としている。

##### SD3203(図版154)

調査区中央より検出した。大畦畔と方位を一にする。東西方向に延びる。幅1.2m・深さ30cm前後を測る。灰砂を埋土としている。(西口)

### 【33・34区】(図版155・335)

33区は29区に接して南側に延びる幅8.0m・全長約60.0mを測る調査区である。34区は33区より東へ突き出す幅12.0m～6.0m・全長12.0mを測る調査区である。

検出された遺構は奈良時代と中世前期の溝もしくは鋤跡・畦畔・水田区画痕跡・柱穴である。その殆どが水田跡に伴う遺構と認識できる。33区・34区は段丘上に位置するが、生産領域として使用されていたと考えられる。

調査区の基本層序はⅠ層 現耕作土・Ⅱ層 床土・Ⅲ層 近世耕作土(灰白色土)・Ⅳ層 褐色土(中世前期の耕作土 土壤層)・Ⅴ層 洪水砂・Ⅵ層 灰褐色土(律令期の耕作土・土壤層)・Ⅶ層 黄灰色細砂(ベース)である。遺構・遺物はⅣ層～Ⅶ層間において検出している。

検出された遺構はⅣ層を耕作土とする鋤跡・水田もしくは畝跡(区画痕跡)－第1面の遺構とⅥ層を耕作土とする水田畦畔・水田跡(区画痕跡)・溝－第2面の遺構に大別される。

#### 第1面

第1面の大半をなすものは現地表に残る条里型地割りに踏襲される北東方向(プランB)に走行をとる幅20cm前後・深さ3cm程度の鋤跡である。同様の鋤跡は前年度の調査においても検出されており、中世前期の耕作痕と考えられている。今回の調査においてもⅣ層もしくはその直上から中世前期の遺物が出土している。

#### 第2面

第2面はⅦ層上で検出した。Ⅵ層を耕作土とする水田畦畔や水田に伴う溝を検出している。

検出された遺構は、A. 東西方向へ軸をもつ遺構(プランA)とB. 北東もしくは南東方向へ軸をもつ遺構がある(プランB)。両者には先後関係があり、Aとした遺構はⅦ層上において検出しており、Ⅵ層を埋土とする。Bとした遺構はⅥ層上面から切り込んでおり、Aよりも新しい。

Bとした遺構の時期はⅤ層中もしくはⅥ層中から奈良時代の遺物が出土しており、平安時代以降の遺物は含まれないことから推して、奈良時代に属するものと考えられる。

## B. 北東もしくは南東方向へ軸をもつ遺構

### 大畦畔

Bのうち、SD3309・SD3311は大畦畔に伴う溝と考えられ、1.5mの間隔をあけて南東方向へ延びている。31区において検出された土橋や30区・33区・40区において検出された東西方向の大畦畔跡の延長上にあり、現地表に残る条里型地割りに踏襲される古代の地割りの一部と認識できる。SD3309は幅80cm・深さ14cmを測る浅い皿状の溝である。SD3311は幅90cm・深さ15cmを測る浅い皿状の溝である。埋土は暗褐色シルト質細砂である。

### 畠遺構

調査区南端より検出した。大畦畔と方位を一にする。南北方向に畦において区切られた4区画を検出した。区画は南北約1.5m、東西1.8m以上である。にぶい黄澄シルト質極細砂を埋土としている。

## A. 東西方向へ軸をもつ遺構

### 水田遺構

主に調査区の中央より検出されている。一部34区に及ぶ。

長辺4.0m～5.0m・短辺約2.0mの水田区画が10か所以上検出されている。その方位は概ね東西方向に展開しており、SD3326・SD3328とほぼ同時期に機能していたと考えられ、SX3307周辺の区画についても基本的にはほぼ同時期と考えておく。また、北半のSD3322・SD3323・SD3324についても若干蛇行するが、水田区画に伴う水路であったと考えられる。

837はSX3307精査時に出土した平瓶の口頸部であるが細片のため時期は不明である。838はSD3322から出土した小型の短頸壺である。頸部は短く、肩部に沈線が廻る。839はSD3326から出土した須恵器杯身である。細片のため詳らかではないが、7世紀後半～8世紀初頭の時期かと思われる。

### 溝(SD3326)

調査区の中央より検出されている。幅40cm・深さ15cmを測る。概ね東西方向に走っており、水田遺構・SD3328と走行を同じくする。ほぼ同時期に機能していたと考えられる。(西口)

## 【35区】(図版156・335)

35区では、柱穴P001～P008、土坑SK3501～3506、溝SD3501・3502などの遺構および自然流路SR3501が検出されている。

**柱穴** 柱穴は調査区の南西部で検出されている。いずれも円形の掘方をもち、径10～50cm、深さ10～15cmを測る小規模なもので、建物の復元は出来ない。埋土中から遺物の出土は見られないが、上層の包含層及び隣接するSD3502から中世の遺物が出土していることから、中世の遺構と考えられる。

### 溝 SD3501

調査区をほぼ東西方向に流れる溝で、幅70cm、深さ25～30cmを測る。埋土中からは遺物の出土は見られない。

### SD3502

SD3501の南側を東西方向に流れる溝で、幅約1.0m、深さ約30cmを測る。埋土中から、東播系須恵器碗・甕・瓦などが出土しており、これらの遺物からこの溝の埋没時期は12世紀後半～13世紀前半代と考えられる。

## 自然流路 SR3501

調査区の北で検出されたもので、北岸は調査区外にあるため、規模は不明である。

出土遺物は、SD3502で検出された中世須恵器のほか、僅かではあるが包含層中より、古墳時代の須恵器杯などが出土している。(渡辺)

## 【36・41区】(図版157～160・335)

36・41区は1区の北、段丘上に位置する調査区である。調査は36区、41区として分割して実施したが、地形単位および遺構の連続性に鑑みて、一括のものとして報告する。ただし、遺構番号については、それぞれの地区ごとに付けている。

36区と41区はほぼ同じ規模で、調査区は全体として概ね長方形を呈する。厚さ1.0m以上に及ぶ現代の盛土と耕作土(1層)の下には、旧床土(2層)があり、その下にも床土と考えられる層(3層)が堆積している。それらを除去するとにぶい黄褐色シルトの基盤層が存在し、その上で遺構を検出した。

### 遺構

#### 掘立柱建物 SB3601(図版158)

調査区西端で検出した。3間×3間の総柱建物である。柱穴心心間の距離で桁行4.6m、梁行4.2mを測る。軸線は正方位を向く。柱間は1.2～1.8m、柱穴の規模は直径60～90cm、検出面からの深さは12～50cmを測る。遺物は土器の細片しか出土していないが、柱穴の規模や間隔から見て古墳時代から古代に位置付けられるものである。

**SB3602**(図版159) 調査区西端で検出した。桁行は3間で約4.8m、梁行は2間で4.0mの総柱建物である。軸線はN44°Wを向く。柱穴の規模は直径16～25cm、検出面からの深さは8～50cmを測る。

**SB3603**(図版159) 調査区西端で検出した。梁行は2間分で約3.7m、梁行は1間分で1.8～2.0mの総柱建物である。本来は調査区外まで延びて、2間×2間以上の規模であったと思われる。軸線はN40°Wを向く。柱穴の規模は直径25～36cm、検出面からの深さは15～40cmである。

**SB4101**(図版160) 調査区北西端で検出した。2間以上×2間以上の側柱建物で、規模は3.8mと4.0mを測り、軸線はN25°Wを向く。柱穴の規模は直径30～50cm、検出面からの深さ16～42cmである。

**SB4102**(図版160) 調査区西端で検出した。2間×2間の総柱建物である。規模は4.4m×4.1mで、軸線はN38°Wを向く。柱穴の規模は直径30～55cm、検出面からの深さは10～50cmである。

**SB4103**(図版159) 調査区西端で検出した。梁行は2間分で約3.7m、梁行は1間分で1.8mの総柱建物である。本来は調査区外まで延びて、2間×2間以上の規模であったと思われる。軸線はN39°Wを向く。柱穴の規模は直径30～70cm、検出面からの深さは10～45cmである。

#### 土坑 SK4101(図版160)

調査区中央西寄りで検出した。南側を攪乱で切られている。残存長3.1m、最大幅2.5m、検出面からの深さ20cmを測る。上層は拳大の礫を含む土で埋められていた。平瓦片T48が出土している。

#### 溝 SD4101(図版157)

調査区東端で検出し、検出長2.0m、幅0.38m、検出面からの深さは9cmを測る。埋土は暗灰黄粘質シルトである。

#### 不明遺構 SX4101 (図版157)

調査区北東隅で検出した落ち込みである。ほぼ南北方向に延び、東に向かって2段落ちになっているため、大半は調査区外に位置する。検出面からの深さは80cmで地山ブロックを含む暗褐色シルトが最下層には堆積していた。遺物が殆ど出土していないが、住居跡の可能性もある。

#### 遺物 (図版335)

全体に削平を受け、包含層の残りも悪く、遺構から出土した遺物もごく少数である。843は手づくねのミニチュア土器で丸底鉢の形態である。36区のP050から出土している。844は弥生土器の壺底部片である。41区のP012から出土した。また、SK4101から平瓦片T48が出土している。(鐵)

### 【37区】 (図版161～182・336～340)

37区は南北道路本線部分にあたる広い調査区で、南で38区と接し、北端で22・23区と接している。弥生時代から古代の遺構群が検出された。

調査前は水田が営まれており、北端の1/4が一段高くなっていた。北側の高い部分では耕作土あるいは床土の直下に基盤層である灰白あるいは黄澄の粘質シルトがあり、その上で遺構を検出した。南側では床土の下に灰黄褐色細砂が堆積しており、遺物が包蔵されている。この層を除去すると北側と同じく灰白あるいは黄澄の粘質シルトがあり、その上で遺構を検出した。

#### 遺構

**竪穴住居 SH3701** (図版163) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。南北約5.8m、東西約5.2mの楕円形を呈し、検出面からの深さは約24cmである。南半部で周壁溝が検出された。主柱穴と考えられるものは3基認められるが、いずれも浅い。中央で炭化物を含む堆積があったが、明確な掘り込みは検出できなかった。埋土から須恵器の皿A845、柱穴の埋土からイイダコ壺の釣り手860出土している。

**SH3702** (図版163) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。**SH3703・SH3704**を切る。南北6.4m、東西5.8mの長方形を呈する。検出面からの深さは約5cm程度と殆ど削平されている。埋土から土師器の甕846と須恵器の壺847が出土したが、これらは平面的に重複する**SB3709・3710**に伴うものである可能性もある。

**SH3703** (図版163) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。**SH3702**に切られ、**SH3704**を切る。極めて残存状況が悪く、平面形帯も十分に把握できなかったが、残された一辺の長さは約3.8mである。検出面からの深さは約5cm程度と削平が著しい。須恵器の鉢848と土師器竈849が出土したが、これらは平面的に重複する**SB3709・3710**に伴うものである可能性もある。

**SH3704** (図版163) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。**SH3702**と**SH3703**に切られる。東西5.4m、南北の残存部分で5mを測る。この住居も削平が著しく、検出面からの深さは5cm程度である。

#### 掘立柱建物

**SB3701** (図版164) 調査区南東隅で検出した。2間×2間で、梁行2.4～2.5m、桁行約3.2mを測り、主軸はN25°Wを向く。柱穴は円形で、直径38～70cm、検出面からの深さは16～40cmである。

**SB3702** (図版164) 調査区北東隅で検出した。2間×3間で、梁行3.2～3.5m、桁行4.4～4.5mを測り、主軸はN59°Wを向く。柱穴は隅丸方形で一辺30～60cm、検出面からの深さは12～40cmである。

**SB3703** (図版165) 調査区南西隅で検出した。**SB3704**を切る。1間以上×2間以上で、梁行1.6m以上、

桁行3.8m以上を測り、主軸はN60°Eである。柱穴は円形で、直径約50~75cm、検出面からの深さは36~60cmである。

**SB3704**(図版165) 調査区南西隅で検出した。**SB3703**に切られている。3間×3間以上で、梁行4.8m、桁行6.4m以上を測り、主軸はN45°Eである。柱穴は円形で、直径50~90cm、検出面からの深さは20~50cmを測る。

**SB3705**(図版166) 調査区南西部で検出した。**SB3706**と**SB3704**の間に位置する。2間×2間以上で、梁行4.0m、桁行5.0m以上を測り、主軸はN37°Wである。柱穴は円形から楕円形で、直径40~90cm、検出面からの深さ20~36cmを測る。

**SB3706**(図版166) 調査区南西部で検出した。**SB3707**を切る。1間以上×3間で、梁行1.8~2.6m以上、桁行6.2mで、主軸はN40°Eである。柱穴は円形で直径60~130cm、検出面からの深さは36cm前後である。

**SB3707**(図版167) 調査区南西部で検出した。**SB3706**に切られ、**SB3708**を切る。2間×3間で、梁行3.45~3.7m、桁行4.8~5.3mを測り、主軸はN38°Eである。柱穴は概ね円形で、直径64~90cm、検出面からの深さは20~32cmである。須恵器の杯G850が出土している。

**SB3708**(図版167) 調査区南西部で検出した。**SB3707**に切られる。2間×2間で、梁行3.6~3.8m、桁行4.4~4.6mを測り、主軸はN47°W。柱穴は円形から隅丸方形で、直径65~110cm、検出面からの深さは40~60cmである。

**SB3709**(図版168) 調査区南西部で検出した。平面的には**SH3703**・**3704**・**SB3710**と重なる。2間×3間で梁行4.68m、桁行5.4~5.6mを測り、主軸はN33°Eである。柱穴は概ね円形で、直径は60cm前後、検出面からの深さは16~46cmである。柱穴から須恵器の杯B蓋851と製塩土器852・853が出土している。

**SB3710**(図版168) 調査区南西部で検出した。平面的には**SH3703**・**3704**・**SB3709**と重なる。2間×3間で梁行3.12m、桁行3.8~4.0mを測り、主軸はN82°Eである。柱穴は概ね円形で直径36~80cmで、検出面からの深さは38~66cmである。

**SB3711**(図版169) 調査区南西部で検出した。**SB3709**・**3710**の南側に位置する。2間×3間で、梁行約3.4m、桁行4.4mを測り、主軸はN38°Eである。柱穴は円形から隅丸方形で、直径は36~88cm前後で、検出面からの深さは8~40cmである。柱穴から土師器の甕の口縁部854が出土している。

**SB3712**(図版169) 調査区南西部で検出した。**SB3711**の南側に位置する。2間×3間で、梁行3.8~3.9m、桁行5.8mを測り、主軸はN43°Wである。柱穴は円形から隅丸方形で、直径は80cm前後で、検出面からの深さは20~36cmである。柱穴から製塩土器855が出土した。

**SB3713**(図版170) 調査区中央東端で検出した。平面的には**SD3711**と重複し、**SK3727**に切られる。2間×2間の総柱建物で、一辺が3.0~3.2mとほぼ正方形である。柱穴は円形で、直径40~64cm、検出面からの深さは22~40cmを測り、主軸はN20°Wである。

#### 杭列

**SA3701**(図版170) 調査区南西隅で検出した。**SB3703**の南に位置する。柱穴3基からなり、長さは4.0mを測り、軸線はN40°Wである。柱穴は円形で、直径56~80cm、検出面からの深さは32~54cmである。掘立柱建物の一部である可能性もある。

**SA3702**(図版170) 調査区南西部で検出した。**SB3712**の東に位置する。柱穴4基からなり、長さは7.1m

を測り、軸線は N62° W である。柱穴は円形で、直径44～60cm、検出面からの深さは32～54cm である。掘立柱建物の一部である可能性もある。

#### 土坑

**SK3705**(図版171) 調査区南西部で検出した。**SH3704**・**SB3709**・**3710**と平面的に重なる。隅丸方形を呈し、長辺は1.23m、短辺は1.03m、検出面からの深さは28cm を測る。埋土は炭化物を含み、掘立柱建物あるいは住居に伴う施設である可能性がある。

**SK3707**(図版171) 調査区南東部で検出した。**SD3708**を切る。楕円形を呈し、長軸1.92m、短軸1.48m、検出面からの深さは12cm を測る。埋土は灰黄褐の粘質シルトである。

**SK3708**(図版171) 調査区南東部で検出した。**SK3713**の北側に位置する。円形を呈し、直径約3.8m、検出面からの深さは24cm を測る。褐灰シルトと灰黄褐粘質シルトで埋まっている。

**SK3709**(図版171) 調査区南東部で検出した。**SH3701**の東側に位置する。やや歪な隅丸長方形で、長辺3.2m、短辺1.52m、検出面からの深さは12cm を測る。灰黄褐シルトで埋まっている。須恵器の杯蓋**864**と平瓦**T55**が出土した。

**SK3711**(図版171) 調査区南東部で検出した。**SX3702**の南にあり、新しい時期の鋤溝に切られる。楕円形を呈し、長径1.5m、短径1.2m、検出面からの深さは8cm を測る。土師器の高杯**865**と甕**866**が出土した。

**SK3712**(図版171) 調査区南東部で検出した。**SX3702**の南に位置する。楕円形を呈し、長径2.0m、短径1.8m、検出面からの深さは8cm を測る。

**SK3713**(図版171) 調査区南東部で検出した。**SK3708**の南に位置する。歪な逆台形を呈し、最大長3.2m、最大幅1.8m、検出面からの深さは28cm を測る。褐灰シルトと灰黄褐粘質シルトで埋まっている。

**SK3714**(図版171) 調査区南東部で検出した。**SX3702**の東に位置する。楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.1m、検出面からの深さは16cm を測る。灰黄褐粘質シルトで埋まっている。

**SK3715**(図版171) 調査区南東部で検出した。**SD3708**の東に位置する。長方形を呈し、長辺90cm、短辺0.6m、検出面からの深さは12cm を測る。埋土は炭化物・焼土を含む灰黄褐粘質シルトである。**SK3745**や**SK3741**と大きさや埋土が共通しており、小鍛冶などに伴う土坑である可能性がある。

**SK3716**(図版172) 調査区中央南部で検出した。**SH3702**の東に位置する。長方形を呈し、長辺1.44m、短辺1.02m、検出面からの深さは18cm を測る。埋土は灰黄褐シルトと炭化物を含む褐灰シルトである。

**SK3719**(図版172) 調査区北西隅で検出した。楕円形に溝状の突出部分が付く。全長5.7m で、楕円部分の幅は2.26m、溝状部分の幅は約60cm である。基本的ににぶい黄褐シルト質細砂で埋まっており、奈良時代の遺物を多く含む。須恵器**867**～**871**、平瓦**T64**・**T67**が出土した。

**SK3720**(図版173) 調査区北西隅で検出した。**SK3736**に切られる。長径1.4m、短径1.08m の楕円形で、検出面からの深さ6cm の浅い土坑である。

**SK3724**(図版173) 調査区北東隅で検出した。**SD3715**に切られる。検出長2.4m、幅64cm の細長い形状で、検出面からの深さ4cm の浅い土坑である。にぶい黄褐シルトで埋まっていた。

**SK3725**(図版173) 調査区北東隅で検出した。**SK3726**に接し、**SD3715**の東側に位置する。長辺1.6m、短辺1.0m の長方形で、検出面からの深さは28cm である。埋土は灰黄褐シルト～細砂とにぶい黄褐シルトである。須恵器杯蓋**872**が出土している。

**SK3726**(図版173) 調査区北東隅で検出した。**SK3725**と接し、東側は調査区外へ延びる。検出幅約2.3m

で、検出面からの深さは26cmである。下層にぶい黄褐シルト、上層に黄褐細砂が堆積していた。

**SK3727**(図版173) 調査区中央東端で検出した。**SB3713**に接する。長辺2.08m、短辺1.28mの隅丸長方形で、検出面からの深さは6cmである。西側で須恵器蓋**872**が出土している。底面が平坦で、側面も直線的に落ちることから墓ではないかと思われる。

**SK3730**(図版173) 調査区南東部で検出した。**SK3731**を切り、**SD3707**の西側に位置する。長さ2.3m、幅1.25mの楕円形で、検出面からの深さは24cmである。南半を中心に弥生土器**874**～**879**が出土した。

**SK3731**(図版173) 調査区南東部で検出した。**SK3730**に切られ、**SD3707**の西側に位置する。検出幅1.2m、検出面からの深さ20cmを測る。弥生土器の蓋**880**が出土している。弥生時代中期半ばの遺構である。

**SK3733**(図版174) 調査区北西部で検出した。長さ2.6m、幅1.2m、検出面からの深さ16cmを測る。埋土は灰にぶい黄褐シルトと暗褐シルトである。弥生土器の壺**881**が出土した。

**SK3734**(図版174) 調査区北西部で検出した。**SD3710**・**SD3711**の南に位置する。一辺1.0～1.1mの方形を呈し、検出面からの深さは8cmである。埋土は灰黄褐シルトである。

**SK3735**(図版174) 調査区北東部で検出した。長さ1.9m、幅1.1mで検出面からの深さは20cmである。埋土は灰黄褐シルトである。

**SK3736**(図版173) 調査区北西隅で検出した。**SK3720**を切る。長さ2.0m、幅1.2m、検出面からの深さ8cmの浅い土坑である。須恵器の壺**882**と土師器の皿**883**が出土している。8世紀代の遺構である。

**SK3739**(図版174) 調査区南東部で検出した。長さ3.8m、幅1.65m、検出面からの深さは16cmを測り、埋土は灰黄褐シルト～細砂である。

**SK3740**(図版174) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。**SH3702**の東に位置する。長さ3.5m、幅1.7m、検出面からの深さは12cmを測る。埋土は灰黄褐シルト～細砂である。

**SK3741**(図版161) 調査区南西部で調査区西壁にかかって検出した。全体の規模は不明だが、幅60cm前後の方形を呈する。底面が水平で、炭化物を含む埋土で埋まっていた。**SK3715**や**SK3745**と大きさや埋土が共通しており、小鍛冶などに伴う土坑である可能性がある。

**SK3742**(図版174) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。**SH3702**の南に位置する。長さ70cm、幅50cm、検出面からの深さは6cmである。土師器の皿**884**が出土している。

**SK3745**(図版174) 調査区南西部で検出した。検出時は直径0.9～1.0mの楕円形であったが、結果的には長さ85cm、幅55cm、検出面からの深さは18cmの隅丸長方形になった。埋土は底面に炭層が堆積し、その上は炭化物を含む灰黄褐シルトで埋まっていた。**SK3715**や**SK3741**と大きさや埋土が共通しており、小鍛冶などに伴う土坑である可能性がある。

#### 不明遺構

**SX3701**(図版175) 調査区南東部で検出した。長さ7.9m、幅4.0m、検出面からの深さは20cmを測る皿状の凹みである。埋土は灰黄褐細砂～シルトと灰白粘質シルトである。

**SX3702**(図版175) 調査区南東部で検出した。長さ8.4m、幅5.8m、検出面からの深さは20cmを測る不整形な凹みである。須恵器の杯**885**・**886**と土師器の甕**887**が出土した。

**SX3707**(図版176) 調査区北西部で検出した。**SD3710**に切られている。長さ8.4m、最大幅5.0m、検出面からの深さは28cmを測る、弥生土器の広口壺**888**が出土した。

**SX3709**(図版176) 調査区北端中央で検出した。最大幅が2.5m、検出面からの深さは8cmを測る。直

角に曲がったコーナーを持つことから、遺物はないものの方形周溝墓の一部である可能性もある。

#### 溝

**SD3703**(図版177) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。**SE3701**に切られる。検出長6.4m、幅0.5m、深さ8cmを測る。埋土は灰黄褐粘質シルトである。

**SD3707**(図版177) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。**SD3708**の西側で平行している。検出長は14.5m、幅0.95m、検出面からの深さは24cmである。埋土は灰黄褐粗砂～シルトである。

**SD3708**(図版177) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。**SD3707**の東側で平行しており、**SK3707**に切られる。検出長は7.2m、幅1.3m、検出面からの深さは10cmである。埋土は灰黄褐細砂混じり粘質シルトである。

**SD3710**(図版178) 調査区北東部で検出した。**SD3711**に切れ、**SX3707**を切る。検出長は約15.5mで、最大幅3.6m、検出面からの深さは40cmである。下層には灰黄褐粘質シルトが堆積し、上層に砂混じりのシルト層が堆積している。須恵器の杯**899・890**が出土した。8世紀代の遺構である。

**SD3711**(図版178) 調査区北東部で検出した。**SD3710・SD3719**を切り、**SB3713**に切られる。23区から始まって南流し、調査区中央付近で東向きを変えて調査区外に延びる。検出長は50mを越え、幅0.8～1.0m、検出面からの深さは30cmである。土師器**891～893**、須恵器**894～896**が出土した。8世紀代の遺構である。

**SD3715**(図版179) 調査区北東隅で検出した。弧を描く溝で、検出長約9.0m、幅0.7m、検出面からの深さは14cm、埋土は炭化物を含むにぶい黄橙シルトである。6世紀後半の須恵器の杯身**897**が出土しており、小型古墳の周溝の可能性もある。

**SD3716**(図版179) 調査区北東隅で検出した。検出長10.0m、幅0.6m、検出面からの深さは10cmを測る。埋土は下層が褐灰シルト、上層が灰黄褐シルトである。土師器**898**・須恵器**899～901**・平瓦**T25**が出土した。9世紀後半まで下る可能性のある遺構である。

**SD3717**(図版179) 調査区北東隅で検出した。**SD3719**を切る。検出長16.5m、幅1.3m、検出面から深さは14cmである。埋土は灰黄褐シルトと灰黄褐細砂～シルトである。平瓦**T20・T37・T77**が出土した。8世紀代の遺構であろう。

**SD3719**(図版179) 調査区北東隅で検出した。**SD3711・SD3717**に切られる。検出長約19.0mの鉤形を呈する溝で最大幅は3.3m、検出面からの深さは24cmである。須恵器杯蓋**902**が出土しているが、弥生時代の広口壺**1262**も出土しており、削平された方形周溝墓の可能性はある。

**SD3722**(図版180) 調査区中央東側で検出した。検出長6.0m、幅1.0m、検出面からの深さ10cm、埋土は灰黄褐シルト～細砂である。

**SD3723**(図版180) 調査区中央東側で検出した。**SD3711**を切る鉤形の溝である。検出長約9.0m、幅0.4m、検出面からの深さ8cmで、埋土は灰黄褐粘質シルトである。

**SD3724**(図版180) 調査区北半中央で検出した。検出長12.3m、幅0.3m、検出面からの深さ10cmを測る。須恵器の椀**903**が出土している。8世紀終わりから9世紀初めの遺構と思われる。

**SD3726**(図版180) 調査区南東隅で検出した。**SB3701**の西側に位置する。検出長4.1m、幅0.4m、検出面からの深さは8cm、埋土はにぶい黄褐シルト～礫である。

**SD3727**(図版180) 調査区南東隅で検出した。**SB3701**の西側に位置する。検出長3.8m、幅0.64m、検出面からの深さは10cm、埋土はにぶい黄褐細砂である。

井戸 SE3701(図版181) 調査区南部の遺構集中地域で検出した。SD3703を切る。最上部は直径約2.2 mの円形を呈し、漏斗状に窄まり、直径1.0mの範囲をほぼ垂直に掘り下げた素掘りの井戸である。検出面からの深さは約3.2mで、底はさらに直径が約50cmまで狭まる。意識的に埋め戻されたと思われる、中程に網代状の木製品も埋められていた。土師器904～912・926・927・1508、須恵器913～925・928～932が出土しており、8世紀前半のものと思われる。

大畦畔(図版182) 調査区北東部で検出した。基盤層の上で、鉄分・マンガンが集積した褐灰シルト混じり極細砂を埋土とする帯に挟まれた部分を削平された畦畔の基部として捉えた。基部は太い部分で幅約2.5mである。この畦畔の基部は南北に走る部分と、クランクして西へ向かった後、改めて南に延びる部分があり、調査区北東隅付近に水田区画の変わり目が存在したと推定される。

## 遺物

### 住居跡・掘立柱建物跡・柱穴出土遺物(図版336～340)

845はSH3701出土で須恵器の皿である。平底に短く立ち上がる体部が付く。志方窯跡群の製品と考えられる。8世紀代のものである。846はSH3702出土で土師器の甕である。球形の胴部に外反する口縁が付く。847は須恵器の壺である。平底で偏球状の体部を持つ。848はSH3703出土で須恵器の鉢である。849は土師器の竈片である。850はSB3707出土で須恵器の杯身である。底部は僅かに尖る。口径が小さく、杯Gと考えられる。7世紀後半のものである。851はSB3709出土で須恵器の杯蓋である。扁平なつまみが付き、口縁部は短く垂下する。852・853は製塩土器の口縁部片である。8世紀代のものと考えられる。854はSB3711出土で土師器の甕である。口縁部片で、端部を上方に引き出す。855はSB3712出土で製塩土器の口縁部片である。856はP014出土で土師器の高杯である。脚部の破片で、脚柱部は面取りをしている。857はP024出土で土師器の甕である。球形の胴部に外反する口縁が付く。858は須恵器の瓦泉である。底部外面にヘラケズリが残り、体部も無文となっている。T60はP064出土で平瓦である。859はP126出土でイイダコ壺である。体部に対して釣り手部分の比率が大きい。860もイイダコ壺でP135出土である。釣り手部分の破片で、859に比べてやや大きいものである。861はP151出土で弥生土器の底部片である。862はP171出土で須恵器の鉢である。扁平な体部に極めて短い口縁部が付く。平城宮でいう壺Dに似るが高台を持たない。T84はP296出土で平瓦である。863はP369出土で土師器の甕である。くの字に屈曲した頸部から外反して開く口縁を持つ。

### SK3709出土遺物(図版337)

864は須恵器の杯蓋である。天井部は水平で、口縁端部は僅かに垂下する。T55は平瓦である。

### SK3711出土遺物(図版337)

865は土師器の高杯である。浅い椀形の杯部片である。866は土師器の甕で、大きく開く口縁部辺である。8世紀前半のものと思われる。

### SK3719出土遺物(図版337)

867～871は須恵器である。867は杯蓋で、丸味を帯びた天井部に扁平なつまみが付く。868は小型の平瓶である。取っ手が付いていた痕跡がある。869は稜椀(杯L)である。底部は丸味を帯びて突出する。高台が付いていた痕跡がある。870・871は長頸壺(壺K)である。870は肩部が直線的、871は肩部が丸く体部も扁平である。T64・T67は平瓦である。

### SK3720出土遺物(図版338)

T49は平瓦である。

**SK3725出土遺物**(図版338)

872は須恵器の杯蓋とした。天井部の調整は粗く、ヘラ記号がある。全体に焼け歪みが著しい。873は弥生土器底部片である。底部に焼成後穿孔が認められる。

**SK3730出土遺物**(図版338)

874～879は弥生土器である。874・877は甕である。878は口縁内突帯広口壺の口縁部である。口縁内に2重に突帯を巡らせ、折り曲げた口縁の上面と端部に円形浮文を施す。頸部にも断面三角形突帯を付加する。875・876・879は底部片である。外面にヘラミガキを施している。これらの土器は東播磨Ⅲ－2段階のものと思われる。

**SK3731出土遺物**(図版338)

880は弥生土器の蓋である。口縁部は水平に延びる。

**SK3733出土遺物**(図版338)

881は弥生土器の直口壺である。口縁部に凹線を巡らせている。東播磨Ⅳ段階の土器である。

**SK3736出土遺物**(図版338)

882は須恵器の短頸壺である。883は土師器の皿Aである。口縁端部を内側に巻き込む。8世紀代のものである。

**SK3742出土遺物**(図版338)

884は土師器の皿Aである。口縁端部を内側に巻き込む。8世紀代のものである。

**SX3702出土遺物**(図版338)

885・886は須恵器の杯Aである。底部はヘラ切りで、885は仕上げのナデを行っていない。887は土師器の小型甕である。8世紀前半のものである。

**SX3707出土遺物**(図版338)

888は弥生土器の広口壺である。口縁端部に円形浮文、頸部に断面策角形突帯を付加する。東播磨Ⅲ－2段階のものと思われる。

**SD3710出土遺物**(図版339)

889・890は杯Aの身である。890は杯H蓋を逆転したような形態をしている、8世紀前半のものである。

**SD3711出土遺物**(図版339)

891～893は土師器である。891は杯Aである。892は小型の甕である。893は把手の付く小型の甕である。894～896は須恵器である。894は杯A、895は甕、896は長頸壺の体部である。おおむね8世紀前半のものである。

**SD3715出土遺物**(図版339)

897は須恵器の杯身である。6世紀後半のものである。

**SD3716出土遺物**(図版339)

898は土師器の杯Aである、899～901は須恵器である。899は杯Bである。900はヘラ切りの平高台を持つ椀B、901は底部片である。898・899は8世紀代のものであるが、900は9世紀後半のものと思われる。T20・T25・T77は平瓦である。

**SD3717出土遺物**(図版339)

T37は平瓦である。

#### SD3719出土遺物(図版339)

902は須恵器の杯蓋である。口径が10cmを切っており、7世紀まで下るものと思われる。

#### SD3724出土遺物(図版339)

903は須恵器の椀である。8世紀後葉～9世紀代前葉のものである。

#### SE3701出土遺物(図版340)

904～912・926・927・1508は土師器である。904～906は杯Aである。907は皿Aで、内面には底部と体部に暗文を施している。908～910は甕で、外面はハケで調整している。911・912・1508はいずれも高杯の脚部片で、脚柱部に面取りを行う。926・927は釣り手を欠くが、イイダコ壺である。

913～925・928～932は須恵器である。913は体部が垂直に立ち上がる椀A、914～916は杯Aである。917～920・925は杯Bで、919の底部外面高台内にはヘラ記号、920の底部外面高台内には墨書が認められる。921～924は蓋で、924は壺の蓋と思われ、他のものは杯Bの蓋である。921の天井部には920と同じ内容の墨書が認められることから、両者は一具であった可能性がある。928～932は壺である。928は壺L、930・931も同様の器種の口縁部と考えられる。928は底部に焼成後穿孔を施している。929は高台を持たず、やや肩部の稜が鈍いが壺Kとする。932は壺Qである。929・932に関しては、口縁を意識的に打ち欠いていると思われる。おおむね8世紀前半のものである。(鐵)

### 【38区】(図版183～189・341～346)

37区の南に接する。旧耕土・旧床土の下には包含層である灰黄褐シルト混じり細砂層(3層)、暗褐シルト～細砂層(4層)があり、その下が37区と同様に基盤層である灰白粘質シルト層になっている。各遺構はこの基盤層上で検出した。弥生時代中期後半の遺構と古墳時代・奈良時代の掘立柱建物を検出した。

#### 遺 構

##### 掘立柱建物

**SB3801**(図版184) 調査区北西、37区との境界で検出した。**SD3804**を切り、2間×2間の総柱建物である。梁行3.0～3.2m、桁行2.8mを測り、主軸はN28°Wを向く。柱穴は直径44～80cmの円形、検出面からの深さは16～52cmである。出土遺物がほとんど無いが、古墳時代まで遡る可能性がある。

**SB3802**(図版184) 調査区北西、37区との境界で検出した。**SB3801**と平面的に重なる遺構であったと思われる。本来は1間×2間以上で、検出部分は梁行2.6m、桁行1.1m、主軸はN23°Wを向く。柱穴は直径46～88cmの円形で、検出面からの深さは20～48cmである。出土遺物がほとんど無いが、古墳時代まで遡る可能性がある。

**SB3803**(図版185) 調査区南西部で検出した。本来は**SB3804**と部分的に重なる遺構であったと思われる。検出部分は1間×2間で梁行1.48m、桁行3.6m、主軸の向きはN22°Wである。柱穴は18cm～40cm前後の円形・楕円形で、検出面からの深さは8～60cmである。周囲の同規模の柱穴からは8世紀代の遺物が出土しているため、この建物もその頃の遺構である可能性がある。

**SB3804**(図版185) 調査区南西部で検出した。本来は**SB3803**と部分的に重なる遺構であったと思われる。検出部分は1間×2間で梁行2m、桁行3.8m、主軸の向きはN36°Wである。柱穴は隅丸方形で、一辺24～56cm、検出面からの深さは16～48cmである。周囲の同規模の柱穴からは8世紀代の遺物が出土しているため、この建物もその頃の遺構である可能性がある。

## 土 坑

**SK3802**(図版186) 調査区東部で検出した。長さ1.4m、幅1.1mの隅丸方形で、検出面からの深さは18cmを測る。下層に炭化物を含む灰黄褐シルトが堆積し、上層は礫を含む灰黄褐細砂で埋まっていた。

**SK3803**(図版186) 調査区東部で検出した。長さ1.04m、幅0.68mの隅丸方形で、検出面からの深さは44cmを測る。埋土は4種類の土がブロック状に堆積しており、埋め戻されたものと思われる。

**SK3809**(図版186) 調査区西部で検出した。長さ2.6m、幅1.6mの隅丸長方形で、検出面からの深さは40cm、底面は水平である。下部に炭化物を含む粗砂層が堆積しており、屋外炉の可能性はある。弥生土器**942**～**944**が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

**SK3811**(図版186) 調査区南西部で検出した。一部が攪乱を被っている。長さ1.46m、現存幅0.8mで、検出面からの深さは6cmを測る。埋土はにぶい黄褐シルトである。弥生土器**939**が出土しており、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

**SK3815**(図版183) 調査区北西端で検出した。北半部は調査区外に延びる。検出長1.2m、検出幅2.7m、検出面からの深さ10cmの浅いものである。須恵器の杯**A940**、土製紡錘車**941**が出土している。

**SK3816**(図版186) 調査区南西部で検出した。長さ2.0m、幅1.08mの長楕円形で、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は灰黄褐シルト～細砂である。

**SK3817**(図版187) 調査区東部で検出した。長さ1.72m、幅1.78mの不整形で、検出面からの深さは26cmである。埋土はにぶい黄褐シルトと灰黄褐シルトである。

**SK3818**(図版187) 調査区南東部で検出した。長さ1.94m、幅0.92mの長楕円形で、検出面からの深さは14cmを測る。埋土はにぶい黄褐シルト～細砂である。

**SK3819**(図版187) 調査区西部で検出した。平面的に**SX3802**と重なる。**SD3801**と攪乱に切られる。長さ3.66m、幅1.4mで、検出面からの深さは16cmを測る。埋土はにぶい黄褐シルトである。

**SK3820**(図版187) 調査区西部で検出した。平面的に**SX3802**と重なる。長さ1.56m、幅0.58mで、検出面からの深さは7cmである。埋土は灰黄褐～にぶい黄褐シルトである。

**SK3821**(図版187) 調査区西部で検出した。平面的に**SX3802**と重なる。長さ1.62m、幅0.56mで、検出面からの深さは7cmである。埋土は灰黄褐～にぶい黄褐シルトである。

## 不明遺構

**SX3801**・**SX3802**(図版183) 調査区中央で不定形の落ち込みを2箇所検出した。一段下げた状態で、内部から土坑・柱穴等が見つかっているため、複数の遺構が営まれた事によって土が攪乱された結果、落ち込み状になったことも考えられる。須恵器の甕**945**と杯**B946**が出土している。

**溝 SD3801**(図版188) 調査区西部で検出した。検出長14.8m、幅0.6m、検出面からの深さ18cmを測る直線的な溝で、埋土は灰黄褐シルトである。須恵器**947**～**949**、土師器**950**・**951**が出土している。8世紀代の遺構であろう。

**SD3802**(図版188) 調査区西部で検出した。検出長8.9m、幅0.8m、検出面からの深さ10cmを測る直線的な溝である。埋土はにぶい黄褐細砂である。

**SD3804**(図版189) 調査区北西部で検出した。**SB3801**に切られる。検出長4.66m、幅1.1m、検出面からの深さは22cmを測る。埋土は下層が土器を多く含む黒褐シルト、上層が褐灰シルト質極細砂～細砂である。弥生土器の甕**952**～**956**、高杯**957**・**958**、壺**959**・**960**・**962**～**969**、底部**961**・**970**・**971**が一括廃棄された状態で出土している。弥生時代中期半ばの遺構である。

## 流路

### SR3801 (図版183)

40区 SR4001の上流部分にあたる流路である。須恵器の杯972が出土している。

## 遺物

### 柱穴・土坑出土遺物(図版341～342)

933は須恵器の杯B蓋である。天井部にはつまみの付いた痕跡がある。934は須恵器の杯Bである。P026から出土したもので、8世紀代のものと思われる。935は須恵器の鉢Aで平底になる形態であると思われる。8世紀代のものでP040から出土した。936は須恵器杯Aである。937は土師器の鍋である。この2点は8世紀代のもので、P066から出土した。938はSK3806出土で土師器の甕である。外面はハケ調整、内面は板ナデ調整を行う。8世紀代のものである。939はSK3811出土で弥生土器の甕である。口縁部片であるが、中期後半のものと思われる。

942～944は弥生土器でSK3809出土である。942・943は残存状況が悪いが、942は無頸壺、943は甕である。944は体部のみであるが、櫛描直線文・波状文・斜格子文と円形浮文で加飾する壺である。これらはⅢ-2あるいはⅣ-1段階のものと思われる。940はSK3815出土の須恵器の杯Aである。941は土製紡錘車で、完形品である。945はSX3801出土須恵器の甕である。946はSX3802出土で僅かであるが体部に稜が認められるため、稜碗(杯L)とする。8世紀代のものである。

### SD3801出土遺物(図版342)

947～949は須恵器である。947は平坦な天井部に扁平なつまみが付く杯B蓋である。948は天井部を欠くが皿B蓋と思われる。949は体部のみであるが肩部に稜を持ち、高台が付く壺で、壺Qと思われる。950・951は土師器で、950は甕、951は鍋である。いずれも8世紀代のものである。

### SD3804出土遺物(図版343～346)

952～971は弥生土器である。952～956は頸部がくの字に屈曲する甕である。956は胴部最大径が他のものに比べて大きく、無頸壺とも考えられる。957・958は水平口縁高杯である。口縁端部は垂下せず、957は端面に刻み目を入れる。958は杯部と脚部の境界に断面三角形突帯を巡らせている。959は直口壺の口縁部で、断面三角形突帯を巡らせている。960は体部と頸部のつながりに不明瞭な点があるが、小型の短頸壺とする。962は無頸壺である。口縁端部に斜格子状の刻み目を入れる。963は大型短頸壺である。頸部に指頭圧痕突帯を巡らせている。964～966は広口壺である。口縁端部は面を持つものあまり拡張されない。964・965は頸部に断面三角形突帯を巡らせる。966は口縁端部に稜杉状の刺突を行い、体部上半を直線文・波状文・連続刺突文で加飾する。967～969は口縁内突帯広口壺である。いずれも口縁端部と口縁内の突帯に刻み目を入れている。968・968は頸部に断面三角形突帯を巡らせ、968はその上に棒状浮文も施している。961・970・971は壺、甕の底部片である。これらの土器は東播磨Ⅲ-2段階のものと考えられる。

### SR3801出土遺物(図版346)

972は須恵器の杯身である。杯Gと考えられ、7世紀後半のものと思われる。(鐵)

## 【40区】(図版190～205・347～351)

40区は39区の南側に位置する全長約90.0m・幅約35.0mを測る四辺形の調査区である。弥生時代中

期～中世にかけての遺構・遺物を検出した。基本層序はⅠ層 現耕作土・Ⅱ層 床土・Ⅲ層 近世耕作土(灰白土)・Ⅳ層 褐色土(中世前期の耕作土・土壌層)・Ⅴ層 洪水砂礫・Ⅵ層 灰褐色土(律令期の耕作土・土壌層)・Ⅶ層 淡灰茶色土(土壌層)・Ⅷ層 黄灰細砂(ベース)となり32区とほぼ同じである。

基本層序と各土層断面掲載の詳細な土層との対照は、Ⅴ層 洪水砂礫はA-A'断面では9層、B-B'断面では5層、D-D'断面では7層にあたり、微高地上ではほとんど検出されない。また、Ⅵ層 灰褐色土(律令期の耕作土 土壌層)はA-A'断面では10層、B-B'断面では6層、C-C'面では9層、D-D'断面では10層にあたる。なお、土壌層については一部、a層と表記している。

地形の点からは、調査区の北東隅から南西隅にかけて流路が走っており、流路の北側は31区から続く極僅かな微高地となっており、流路より南・東側については32区に向かって地形はやや低い様相である。調査の結果、2枚の遺構面を検出した。

土地利用の観点からみた遺構の分布は、第1面・第2面とも調査区の北半部の微高地上には31区から続く住居跡・土坑など居住領域があり、流路より南・東側には32区・33区・34区と同様に水田跡・溝・畦畔などの生産領域もしくは不定形の落ち込みなどで構成される荒地の状況が広がっている。40区は31区と32区の間であり、地形的にも土地利用の観点からも両地点の様相を合わせ持っている。

#### 第1面

第1面はⅦ層上面において検出した。Ⅵ層もしくはⅦ層上面に伴う遺構とともにⅤ層洪水砂礫層の上面から切り込む遺構についても同時に検出している。検出した遺構の時期は主に8世紀後半以降である。

遺構は、第1面では水田跡・大畦畔・溝・焼土坑・掘立柱建物跡1棟を検出している。この内の焼土坑・掘立柱建物跡はⅤ層上面から掘り込まれた遺構である。

Ⅴ層洪水砂礫は40区・32区・33区・29区・30区と広範囲に及ぶ洪水起源の砂礫層である。砂礫中には9世紀代の遺物が含まれており、大きくは洪水以前を8世紀代、以後を9世紀以降に分けることができる。

#### 掘立柱建物跡 SB4001(図版199)

調査区南西半、微高地縁辺において検出した。SB4002と重複し新しい。建物の南東隅はSR4001上層に営まれた小区画水田上から掘り込まれている。桁行方位を東西方向N30°Wにとる総柱建物跡である。東西3間(5.0m)×南北3間(4.8m)以上の規模である。建物の柱間は、東西1間1.7m・南北1間1.6mである。柱穴は円形を基本とし掘方径約0.5～1.25m、深さ約60cm、柱痕は径約20cmである。

#### 焼土坑

焼土坑は9基検出されており調査区北壁において確認したものを含め2基はⅤ層によって埋没した流路上から検出されている。正方形もしくは隅丸方形を呈するものが多く、全長は1～1.3m、幅は0.5～1m、深さは10cm前後である。また、SX4004・SK4038・SK4041・SK4035には炭と焼土が多量に含まれており、土坑壁は若干であるが焼けている。各土坑から遺物は出土しておらず、時期は判然としない。層序から9世紀～12世紀にかけてと推測される。

SX4004(図版201) 調査区北端より検出した。不整な隅丸方形を呈する。規模は長辺約1.3m、短辺約1.25m、深さ約8cmを測る。土坑は北半部分が深く長方形に掘られている。

埋土は炭が堆積している。遺物は須恵器片978が出土している。外面にヘラ書きが存在する。細片のため器種・時期は不明である。

SK4038(図版201) SB4001東側より検出した。不整な隅丸方形を呈する。規模は長辺約98cm、短辺約

95cm、深さ約12cmを測る。浅い箱型に掘られている。埋土は土坑底に炭が堆積している。

**SK4041**(図版201) **SK4040**の北東側より検出した。不整な隅丸方形を呈する。規模は長辺約96cm、短辺約92cm、深さ約12cmを測る。浅い箱型に掘られている。埋土は土坑底に炭が残存している。土師器鉢**983**が出土している。球形の土師器鉢の類例としては赤穂市有年原田中遺跡・姫路市豆腐町遺跡旧河道中の例があり、須恵器では加古川市白沢3号窯・5号窯に類似する個体がある。7世紀後半から8世紀前半の時期が考えられる。**SK4045**出土の**984**についても同時期と考えてよいだろう。

**SK4039**(図版201) **SK4040**の北隣より検出した。菱形に近い不整な楕円形を呈する。規模は長軸約1.33m以上、短軸約1.15m、深さ約12cmを測る。皿形に掘られている。埋土は層上半に炭が含まれている。

**SK4040**(図版201) **SK4026**と近接する。不整な楕円形を呈する。規模は長軸約1.8m、短軸約1.1m、深さ約10cmを測る。皿形に掘られている。埋土は層上半に炭が含まれている。

**SK4019**(図版201) **SK4051**の西側に位置する。不整な楕円形を呈し、規模は長軸約1.15m、短軸約0.75m、深さ約10cmを測る。逆台形に掘られている。埋土は中層に炭が含まれている。

**SK4051**(図版201) **SD4049**の西側に位置する。不整な長楕円形を呈する。規模は長軸2.1m、短軸約70～85cm、深さ約8cmを測る。浅い皿形に掘られている。埋土は土坑底に部分的に炭が残存している。

**SK4035**(図版201) **SB4001**南側より検出した。流路**SR4001**上を被覆する水田土壌及び洪水砂層の上面において検出している。隅丸方形を呈し、規模は長辺約80cm、短辺約60cm、深さ約15cmを測る。船底形に掘られている。側面を中心に良く焼け少なくとも2度燃焼している。埋土は土坑底に炭が堆積している。

**SK4001**(図版192) 調査区北端より検出した。楕円形を呈し、長軸約1.4m、短軸約1.1m、深さ約24cmを測る。埋土は黒褐土が堆積しており、炭を含む。焼土坑として機能していた可能性が高い。須恵器杯蓋**977**が出土している。蓋とするが、加古川市白沢3号窯では杯Aとして類似する個体がある。その場合は8世紀前半の時期が当てはめられる。

#### その他の土坑

**SK4003**(図版202) 調査区北端、**SX4001**北側より検出した。隅丸方形を呈する。規模は長辺約1.25m、短辺約0.95m、深さ約34cmを測る。箱形に掘られている。

埋土は灰黄褐シルト質極細砂・暗褐シルト質極細砂が堆積しており、中層に薄い炭層をかむ。

**SK4020**(図版202) 調査区北西側より検出した。**SX4001**の南西にある。卵形を呈し、長軸約1.7m、短軸約1.2m、深さ約22cmを測る。須恵器杯A**979**・須恵器杯B**980**・須恵器台付壺**981**が出土している。**979**は飛鳥編年Ⅲ期、**980**は加古川市白沢3号窯あるいは先行する6号窯に類似する個体がある。飛鳥編年Ⅳ期からⅤ期、7世紀末頃の時期と考えられる。肩部以下に丸みを残す**981**についても同時期と考えてよいだろう。

**SK4026**(図版192) **SK4040**西側、調査区西壁際より検出した。不整な四辺形を呈する。規模は長辺約1.2m、短辺約1.0m、残存する深さ約45cmを測る。深い箱型に掘られている。大型の柱穴の可能性もある。ブロック状に埋土の堆積がある。

**SK4037**(図版202) **SK4019**の北側より検出した。不整な隅丸方形を呈し規模は長辺約1.0m、短辺約0.8m、深さ約12cmを測る。皿形に掘られている。埋土は灰黄褐シルト質極細砂・にぶい黄褐シルトが堆積する。

**SX4001**(図版202) **SX4004**西側に位置する。不整な矩形を呈し規模は長軸約3.85m、短軸約2.4m、深

さ約12cmを測る。浅い溜まり状の土坑である。埋土はにぶい黄褐極細砂が堆積する。須恵器皿985・土錘986・土馬の脚987が出土した。985は投松1号窯などの類似が考えられる。平安京I新、9世紀前半の時期が考えられる。

**SX4006**(図版192) **SD4017・4018**の北側に位置する。不整形を呈し規模は長軸約5.4m、短軸約4.0m、深さ約6cmを測る。浅い溜まり状の土坑である。須恵器皿988は投松6号窯との類似が考えられる。平城宮V段階8世紀後半の時期が考えられる。

**SX4009**(図版192) **SD4017・4018**の西側に位置する。長楕円形を呈し規模は長軸約3.7m、短軸約1.5m、深さ約10cmを測る。浅い溜まり状の土坑である。須恵器皿989は白沢3号窯に類似する個体がある。8世紀初頭前後の時期が考えられる。

**SX4016**(図版202) **SD4041**が屈曲する東側に位置する。不整な長楕円形を呈し規模は長軸約8.8m、短軸約4.5m、深さ約10cmを測る。浅い溜まり状の土坑である。埋土は灰黄シルト質極細砂が堆積する。須恵器杯身990は7世紀後半に遡ると考えられる。

### 大畦畔(プランB)

大畦畔は北東に走る複数条の溝から構成されるもので、調査区の南端から調査区を縦断し北東へと抜けている。溝間の距離は約1.8mを測る。この大畦畔は現地表に残る条里型地割りの南北方向の延長上にあり、一部は調査前の現地表にも畦畔として残っていた。現地表に踏襲される古代の地割りの一部と認識できる。

検出された溝の多くは幅10～15cmの細い溝であり、V字に近いU字形の断面を持っているものが多いが、いずれも近世の耕作土より下から出現しており、その幾つかは洪水砂層と同質の砂によって埋没している。分けても**SD4060**は幅も広く、中世面よりも下層に存在している。また、中央部での断面(図版197)では大畦畔の隆起上に9世紀代の洪水砂が被覆することが確認されており、流路内の水田遺構同様8世紀後半代には機能していたと考えられる。

また、大畦畔に取り付く形で南東から北西方向に走る大畦畔と考えられる複数条の溝も検出されている。この東西方向の大畦畔は31区において検出された土橋、30区・32区・33区において検出された東西方向の大畦畔跡の延長上にあり、やはり現地表に残る条里型地割りに踏襲される古代の地割りの一部と認識できる。

### 水田遺構

律令期の水田跡は大畦畔や網の目状に巡る小溝の存在から推して、調査区のはほぼ全域に広がっていたと考えられるが、中世以降の耕作や洪水による削平・攪乱によって、良好な状態で残っている部分は埋没した旧流路**SR4001**及び**SR4001**から分岐する大溝**SD4015**の窪みに沿って営まれた部分にとどまる。

一枚の面積が10m<sup>2</sup>程度の小区画水田を18枚検出した。これらの水田は流路の窪みを利用しているため短辺の幅は2.5m前後、長辺は流路の傾斜に合わせて4.0m～5.0m前後ごとに区切っている。水田面は東から西側にかけて徐々に低くなってゆく。水田の両側には幅30～50cm程度の畦畔を介して幅30cm前後の溝が検出されている。東肩では**SD4010・SD4023**、西肩では**SD4012・SD4033・SD4035**が流路の肩に沿って流れている。溝は水田の用排水の機能を果たしていたと考えられる。

微高地上にあたる西側から流れ込む**SD4011・SD4049・SD4061**は西肩の水路に対して直角に近い角度を持って流れ込んでおり、かつ溝同士が並行している部分も多く、削平された水田の区画を反映している可能性は高い。微高地からの用排水は**SD4012・SD4033・SD4035**に集約され、流路上の水田

区画の西側を通過して南側へと流れてゆく。

流路東肩に沿う SD4010・SD4023からは水路が分岐する。SD4010は中程より SR4001から離れ、SD4036となる。平行して流れる SD4041へと続き SD4015上の水田区画に沿って巡る。SD4023は流路に沿い水田区画の東側を通過して南側へと流れてゆく。東側の水路の幾つかは水口を起点としており、水田部分からの排水に重点を置いている可能性が高い。

水田は9世紀代の須恵器を含む洪水砂V層によって埋没している。水田より下層の流路・溝内からは8世紀前半の遺物が出土しており、水田の機能していた時期は8世紀後半と考えられる。水田に関わる遺物は991・992・1025・1026・1039・1058があげられるが、991・992以外の説明については、流路SR4001の遺物と合わせて記述する。

**SX4019・SX4021**(図版193) SD4015内より検出した不整形の水田区画である。精査時にSX4019からは須恵器杯蓋991、SX4021からは土師器高杯脚992が出土している。991は飛鳥Ⅳ期7世紀末頃と考えられる。

**溝**(図版203・204)

大畦畔に伴う溝と、流路上に営まれた小区画水田に係る溝、更に微高地上から流路に向かい流れ込む溝に分かれる。

**SD4001**(図版203) 調査区北西端において検出した。現地表に残る地割と同じ向きに流れる。北東から南西方向に流れる幅80cm・深さ15cmを測る逆台形の溝である。灰黄褐細砂が堆積する。遺物は須恵器杯A994が出土している。8世紀後半と考えられる。

**SD4003**(図版203) 調査区西端において検出した。SD4011・SD4002と同じく、微高地上から流路に向かう溝である。溝は北へ分岐している。幅50cm・深さ35cmを測る深いU字溝である。溝底に灰黄褐極細砂が堆積する。

**SD4008**(図版203)

調査区北東半において検出した。SR4001と並行する。幅15cm・深さ5cmを測る浅いU字溝である。溝底に灰白シルト質極細砂が堆積する。

**SD4010・SD4036**(図版203) SR4001上の小区画水田の東肩を流れる水路。中程より流路から離れ、SD4036となる。幅22～35cm・深さ10cmを測る浅いU字溝である。にぶい黄橙極細砂が堆積する。

**SD4011**(図版203) SD4002・SD4003と同じく、微高地上から南に下り、SR4001上の小区画水田の西肩を流れる水路に合流する。幅30cm・深さ15cmを測るV字溝である。にぶい黄橙極細砂が堆積する。

**SD4017・SD4018**(図版203) 東西方向に走り、SD4032に合流する。SD4017はSD4018より新しく掘りかえと考えられる。SD4017は幅40cm・深さ20cmを測る、SD4018は幅28cm・深さ8cmを測る、ともにU字溝である。埋土はともに灰黄褐シルト質極細砂が堆積する。

**SD4022・SD4023**(図版203) SR4001上の小区画水田の東肩を流れる水路。流路中ほどより水田の水口を起点にSD4010と入れ替わって流れ分岐し、SD4022はSD4032に合流する。SD4023は幅55cm・深さ15cmを測るU字溝である。埋土はにぶい黄橙シルト質極細砂が堆積する。

**SD4027**(図版193) 大畦畔に伴う溝である。幅10～15cm・深さ8cmを測る。埋土はにぶい黄褐シルト質極細砂が堆積する。SD4026・SD4054と部分的に重複している。遺物は須恵器杯B1012が出土している。時期は8世紀前半代と考えられる。

**SD4032**(図版203) SR4001上の小区画水田の東肩を流れる水路である。SD4017・SD4019・SD4022が

合流し、SD4023と並行してSR4001に沿って西へ流れる。また、調査区西端付近ではSD4015側に小溝が分岐していたと考えられる。幅1m・深さ25cm、緩やかに開くV字溝である。溝下半には灰黄褐シルト質極細砂、上半にはにぶい黄褐シルト質極細砂が堆積している。遺物は層上半から土錘1013が出土している。

SD4041(図版203) SD4010・SD4036と入れ替わり、中程よりSD4015に沿って流れ、SD4046に繋がる。幅85cm・深さ14cmを測る浅い皿状の溝である。

SD4043・SD4050(図版204) ともに大畦畔に伴う溝である。北東・南西方向に走る。SD4043は幅40cm・深さ5cmを測る、浅い皿状、SD4050は幅40cm・深さ20cmを測る箱形の溝である。埋土は、SD4043は黄褐シルト質極細砂、SD4050はにぶい黄褐シルト質極細砂が堆積する。

SD4060(図版204) 大畦畔に伴う溝である。幅60cm・深さ10cmを測る、皿状の溝である。埋土は褐灰シルト質極細砂が堆積する。

SD4068(図版204) 大畦畔に伴う溝の可能性が高い。不定形の落ち込みと重なっている。幅23cm・深さ8cmを測る、U字の溝である。灰黄褐シルト質極細砂が堆積する。

## 第2面

第2面はⅧ層上面において検出した。検出した遺構の時期はおもに弥生時代中期・古墳時代後期・7世紀後半～8世紀前半である。

遺構は、第2面では弥生時代中期の土坑1基、円形住居跡状遺構1基・古墳時代後期の方形竪穴住居跡2棟、溝・流路・掘立柱建物跡1棟を検出している。

### 円形住居跡状遺構 SH4003(図版198)

調査区中央西壁際において検出された。幅約18cm・深さ約5cmの溝を弧状に検出した。径5m弱の円形竪穴住居跡の可能性が高い。遺物の出土は無く時期は不明である。

### 方形竪穴住居跡(図版198)

SH4001 SH4003の南側において検出された。南北辺約4.7m・東西辺約4.6m・深さ約15cmの規模をもつ。北壁の中央部には焼土があり、竈があったものと考えられる。柱穴は検出されなかった。壁溝の存在についても定かでない。遺物は土師器甕973・土師器杯974・須恵器杯975・土錘976が出土している。時期は出土遺物から7世紀後葉と考えられる。

SH4002 SH4003の南西側において検出された。北半部は調査区外にある。南北辺約4.5m以上・東西辺約6.5mの規模を測り、幅約40cm・深さ約15cmの壁溝が巡る。床面には東西方向に3.4mの間隔で2個の柱穴が並ぶ。図示できた遺物はない。時期は出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

### 土坑 SK4036(図版200)

流路SR4001肩部より検出された。不整な楕円形を呈する。規模は長軸約93cm、短軸約75cm、深さ約2.0mを測る。流路中心側に向かって傾斜し、皿形に掘られている。土坑内からは土師器甕982の破片が敷き延べられた状態で出土している。982は球形の体部をもつ古式土師器甕である。時期は古墳時代後期と考えられる。

### 掘立柱建物跡 SB4002(図版199)

調査区南西半、微高地縁辺において検出した。SB4001と重複し古い。建物の南東隅はSR4001上、流路上の水田面よりも下層から掘り込まれている。

桁行方位を東西方向N31°Wにとる総柱建物跡である。東西3間(4.8m)×南北3間(4.6m)以上の規

模である。建物の柱間は、東西1間約1.5～1.6m・南北1間約1.6mである。

柱穴は円形を基本とし掘方径約0.5～1.3m、深さ約50～60cm、柱痕は径約20cmである。

掘立柱建物跡は第1面のSB4001と重複して検出されており規模についても近似しているが、柱穴が小区画水田によって見えないことから8世紀前半以前に遡る可能性がある。

## 溝

第2面に伴う溝として、正南北から正東西方向へ直角に曲がるSD4015・SD4056、東西方向に走るSD4046・SD4077、第1面では一部が埋没しているSD4002などがあげられる。正方位にとる溝・畦畔は各地区において検出されている溝・畦畔と同じ地割に伴うものと考えられる(プランA)。

**SD4015(図版194)** SD4015は流路SR4001に取り付き西側へと延びる溝である。SR4001が3層まで堆積し半ば埋没した時点において掘削され、SD4015自体が半ば埋没した時点で水田化している(第1面)。規模は幅約2.1m・深さ55cm前後を測る。埋土は溝底に灰黄褐シルト質細砂が堆積する。

溝内からは7世紀末から8世紀前半の時期の遺物が出土している。1000～1011を挙げた。1000は土師器甕、1001は土師器鍋である。鍋は坂元遺跡SX4003(2000年度調査)、有年原田中遺跡(7世紀後半)出土例に比べ、口縁部の折り返しが緩やかであり、体部が深く丸みを帯びる点から8世紀代に入る可能性がある。1002・1003は竈である。1004は土師器高杯、1005はミニチュアの土師器鉢である。1006・1007は須恵器杯H蓋、飛鳥編年Ⅳ期にあたる。須恵器杯H身1008・1009についても同じ時期と捉えてよいだろう。7世紀末前後と考えておく。1010は鉢類、1011は甕である。

**SD4056(図版194)** SD4056はSD4015と切りあい先行する溝である。規模は幅約1.0m・深さ35cm前後を測る。埋土は灰黄褐シルト質細砂が堆積する。土師器甕の把手1017、須恵器高杯脚部1018が出土している。

**SD4046(図版194)** SD4046はSD4015とは約2.0mの間を開けてSD4015と並行して東西に走る溝である。第1面ではSD4041と繋がり、第2面では、先端がSD4015の屈曲部と揃う位置にある。溝の規模は約1.0m・深さ30cm前後を測る。埋土は灰黄褐シルト質極細砂が堆積する。

**SD4047(図版194)** SD4047はSD4046と接し、分かれて南西に流れる。第1面ではSD4010あるいはSD4041と繋がっていた可能性がある。第2面では、先端はSD4015の屈曲部近くにある。規模は北端では幅約50cm・深さ20cm前後、南端では幅95cm・深さ47cmのU字溝となる。埋土は褐灰シルト質極細砂が主に堆積する。

須恵器杯蓋1014、須恵器杯身1015・1016が出土している。いずれも飛鳥Ⅲ～Ⅳ期にあたる。

**SD4077(図版191)** 調査区を横断し、東西方向に走る溝である。溝は2本に分かれ、屈曲部があることから水田を区画する水路の可能性が考えられる。幅約40cm・深さ25cm前後を測る。埋土は褐シルト質極細砂が堆積する。

**SD4002(図版191)** 28区から微高地を横断しSR4001へ向かう溝である。幅約1.0m・深さ50cm前後を測る。埋土は黒褐シルト質極細砂が堆積する。遺物は995～999が出土している。995・996は土師器甕である。有年原田中遺跡の出土例から、7世紀後半の時期が考えられる。997は円筒形の製品である。器種・用途は詳らかではない。998は須恵器杯H身、飛鳥Ⅱ期にあたる。7世紀中葉頃か。999は須恵器高杯である。

## 流路 SR4001(図版191・205)

SR4001は調査区を東西に斜行し、29区・27区・20区を経て更に19区を通り段丘下へと流れだす流路

である。古墳時代後期には人為的な改変が加えられ、V字溝に近い形状となっている。古墳時代後期から奈良時代前期にかけて遺物が投棄されており、奈良時代後期には流路痕跡の窪地は水田として使用される(第1面)。9世紀に入り洪水砂が堆積、鎌倉時代には水田化し完全に埋没している。

40区における流路幅は約4.0m、深さは1.3mから0.85mと西側へ行くほど浅くなる。また、上層の水田面は東から西側にかけて低くなっている。しかし、流路底は調査区を通じて殆んど高低差なく、調査区の中央部でやや高い程度である。微高地の傾斜に沿って西側へ流れ出ているとは言い難い。中層に堆積する黒シルトについても同じである。SR4001の埋土は大きく5層に分かれ、遺物の取り上げについても則っている。5層：底付近では褐灰シルト質細砂(図版205-14・15層)、4層：中層下半では黒～黒褐シルト(11層)、3層：中層上半では灰黄褐シルト～黒褐シルト(6・7層)が堆積しており、更に2層：上層に堆積した、灰黄砂・にぶい黄褐シルト質極細砂(2・3層)が耕作され、1層：水田土壌(1層)となり、最終的には洪水砂礫によって埋没している。

流路及び上層の遺物1019～1063を図示した。

1019～1023は水田区画を被覆する洪水砂礫上面までの遺物である。1019・1021・1023は須恵器杯B蓋である。1019は天井部が削られており8世紀前半の時期が考えられる。1021・1023は摘みの形状・丸みを持たない扁平な天井部の形状から9世紀に入るものか。1020は杯身である。1022は底部に丸みを持ち、碗形態である。投松2号窯(2次)前後の時期が考えられ、9世紀前半の時期が考えられる。

須恵器杯B蓋1024は洪水砂礫中の遺物である。丸みを帯びた天井部に屈曲する口縁部をもつ。投松2号窯(1次)前後の時期が考えられ、8世紀後半の時期が考えられる。

1025・1026・1039・1058は水田遺構に伴う遺物である。1025は須恵器杯A底部である。外面に墨書が残る。1026は須恵器杯B蓋である。天井部が丸みを帯び、口縁端部の折り返しが甘い、中谷4号窯に類例をみる。8世紀前半の時期が考えられる。1039はイダコ壺である。1058は須恵器甕である。

1027～1063はSR4001が水田化する以前の遺物である。以下、層ごとに説明する。

1031・1032・1034・1038・1047・1048・1049・1061は2層あるいは2・3層から出土した。

1031は土師器甕、体部に把手が付く可能性がある。有年原田中遺跡土壇3(1987年度調査)に類例がある。時期は8世紀初頭頃か。1032は土師器甕である。有年原田中遺跡柱穴に類例がある。7世紀末～8世紀前半の時期である。1034は土師器鍋である。坂元遺跡SX4003(2000年度調査)、有年原田中遺跡(1987年度調査)に出土例があり、共伴遺物から飛鳥Ⅱ～Ⅲ期と考えられるが、3層の1035よりも口縁部の折り返しが緩やかであり、8世紀代に入る可能性がある。1038は土師器長胴甕である。類似のものは坂元遺跡SX4003(2000年度調査)より出土している。1047・1048・1049は須恵器杯H蓋である。1047・1049は天井部と杯部の境がなく、口径12cm前後と小径の杯蓋である。いずれも7世紀前半代と考えられる。1048については下端近くに凹線が廻り碗の可能性もある。1061は須恵器台付き長頸壺である。白沢6号窯出土例に対して肩部に丸みがあることから更に先行し、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期と考えておく。

1027・1028・1029・1030・1035・1036・1037・1040・1041・1042・1044・1045・1050・1051・1052・1053・1055・1056・1059・1060・1062・1063は3層から出土した。

1027・1028は土師器杯である。類似する杯が有年原田中遺跡石列南溝・溝2などから出土している。7世紀後半の時期が考えられる。1029は底の深い土師器盥である。坂元遺跡SX4003(2000年度調査)に類例がある。共伴遺物から飛鳥Ⅱ～Ⅲ期(7世紀後半)と考えられる。

1030は小型の土師器長胴甕である。1035は土師器鍋である。坂元遺跡SX4003(2000年度調査)、有年

原田中遺跡(1987年度調査)に出土例があり、共伴遺物から飛鳥Ⅱ～Ⅲ期と考えられる。1036は土師器甕である。1037は竈である。1040はフイゴ羽口である。1041は土師器こね鉢である。8世紀前半を遡るものと考えられる。1042は弥生土器底部である。底部に穿孔する。1044・1045は土師器高杯脚である。1050は須恵器杯H蓋である。天井部と杯部の境がなく、口径12cm前後と小径の杯蓋である。7世紀前半代と考えられる。1051は須恵器杯G蓋である。1052は小口径の杯Gである。1053は須恵器杯H身である。1054は層序不明である。いずれも田辺編年TK217型式に相当し、坂元遺跡SX4003(2000年度調査)の出土例と類似しており、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の範疇に入る。1055は須恵器甕である。時期は詳らかではない。1056は須恵器台付椀である。坂元遺跡SD4008(2000年度調査)からも出土しており、飛鳥Ⅱ～Ⅲ期と考えられる。1059は小型の須恵器長頸壺である。1060は須恵器台付長頸壺である。1061と比べ、球形の体部をもち7世紀前半代と考えられる。1062は須恵器長頸壺である。類似する個体は丹波市市辺遺跡から出土している。8世紀代と考えられる。1063は須恵器甕下半である。

1033・1046・1057は4層から出土した。1033は小型の土師器甕である。腹径が下半にある。1046は須恵器杯H蓋である。1057は須恵器台付鉢脚部と考えられる。時期は7世紀後半か。

1043は5層から出土した弥生土器底部である。

流路の遺物は水田下の2層に8世紀代の遺物が入るが、3層・4層は飛鳥Ⅱ～Ⅲ期の遺物で占められている。(西口)

## 【42～45区】(図版206～212・352)

### 土坑

SK4201 調査区東半部で検出した。平面はほぼ南北方向に主軸をもつ楕円を呈するとみられ、南半は調査区外へ続く。土壌層を削り込んで検出しているが、本来の規模は長さ1.1m以上、幅0.96mを測る。深さは10cmあり、断面は浅いU字状を呈する。埋土は上下2層よりなり、下層には炭が多く混じる。

### 溝

SD4201 調査区西半部、SR4202の南西側で検出した。南東から北西方向に直線的にのび、北西側は調査区外へ続く。検出長4.65m、幅は60cmである。深さは14cmである。断面は浅いU字状を呈する。

SD4202 調査区中央付近、SR4202の東側で検出した。南東から北西方向に直線的にのび、両端ともに調査区外へ続く。検出長25.0m、幅は0.5～1.5mである。深さは34～44cmである。断面は、南東側は逆台形を呈し、北西側は箱掘り状である。

SD4203～4205 調査区東半部で検出した。概ね南北方向に直線的にのびる。SD4203南端が調査区内で終結する他は調査区外へ続いている。規模は、SD4203は幅2.7m、深さ20cm、SD4204は幅65cm、深さ25cm、SD4205は幅75cm、深さ20cmを測る。SD4203を除いてラミナ状や砂礫の堆積状況をみせる単層で、流水があったことを物語る。

SD4206 調査区東半部で検出した。SD4203～4205の東側に位置するが、方向は北東から南西方向にのびている。両端ともに調査区外へ続いている。幅37cm、深さ13cmを測る。断面は浅いU字状を呈し、SD4205同様ラミナ状の堆積をみせる。

SD4207 調査区東端付近で検出した。北東から南西方向に直線的にのびる。南西端は調査区内で消滅し、北東側は調査区外へ続く。検出長約5.0m、幅45cm、深さ7cmである。断面は皿状であり、埋土

には粗砂が混じる。

**SD4208** 調査区東隅で検出した。調査区の制約によりその一部を検出したのみであるが、北東から南西方向にのび両端ともに調査区外へ続く。幅75cm、深さ15cmである。断面は逆台形である。

#### 流路

**SR4201** 調査区西端付近で検出した。東西方向に直線的にのび、検出長は約17.3mである。東半部は幅も狭く幅0.8~1.0m、断面が浅いV字状を呈し深さ25~35cmを測る。中央より西側は幅が広がるが、北側の肩は調査区外になるため規模は不明である。深さは20~25cmを測る。立ち上がりも緩くなり、底も平坦になる。埋土の大部分は砂礫が一度に堆積したものであり、底付近には粗砂混じりのシルト質極細砂が堆積している。

**SR4202** 調査区北西隅付近で検出した。調査区の制約により全容は明らかではないが、北東および南東からの流路、さらに南方向からの小規模な流路が集まり、西方向にのびている。埋土の状況から埋没と流水を繰り返していることがわかる。出土遺物は少なく、古墳時代の遺物が若干出土しているが、最下層より土師器碗が出土していることから、その所属時期は10世紀以降と考える。

#### 流路出土遺物

**SR4202 1064**は須恵器杯身である。立ち上がりは内傾し、端部は丸い。受部は短く外反する。**1065**は土師器碗である。貼り付けの輪高台の脇から斜め上方へ体部が立ち上がり、端部は丸く収める。(長濱)

## 【46区】(図版213~215・352)

#### 掘立柱建物

**SB4601** 調査区東隅で検出した。東西2間、南北1間を検出し、両方向ともにさらに調査区外へ続くものと見られる。桁・梁行は不明であるが、南北方向の並びはN-31°Eを示す。柱穴の芯々間距離は東西3.1m、南北2.5mを測る。建物を構成する柱穴は5基検出した。掘方は円形を呈し、径25~35cm、深さ15~30cmである。**P003**からは柱抜き取り後に須恵器碗を投入している。須恵器の年代から廃絶は10世紀と考える。

**P003**から須恵器碗**1067**が出土している。糸切り平高台をもち体部は内湾しながら立ち上がる。

#### 溝

**SD4601** 調査区中央付近で検出した。東西方向に直線的にのび、途中南北方向の小規模な溝**SD4602**と合流する。東西両端ともに調査区外にのびる。幅1.5m、深さ20~30cmを測る。新旧2時期が想定され、古い溝の埋没後、新たな溝が掘削される。古い溝は底部のローリングやラミナ状の堆積が認められるのに対し、新しい溝はシルトまたは粒子の細かい砂が堆積している。

**SD4605** 調査区西端付近で検出した。蛇行しつつ東西方向にのびる。東西両端ともに調査区外へのびる。幅80cm前後、深さ15~18cmを測る。断面は、東半部は浅いU字状を呈するが、西半部は箱掘り状で底部は平坦となる。埋土は比較的粒子の細かい砂層がほぼ水平な堆積をみせ、底部には粗砂や細礫が薄く堆積している。(長濱)

## 【47区】(図版216・217・352)

### 溝

**SD4701** 調査区西端付近で検出した。くの字状に屈曲し両端ともに調査区外へ続く。溝のごく一部を検出したため、その性格は不明である。幅65cm、深さ25cmを測る。断面は逆台形を呈し、底部は凹凸がある。遺物は出土していない。

**SD4703・4704** 調査区中央付近で検出した。北東から南西方向にのびる溝であるが、一部を検出したのみでありその全容は明らかでない。北東端は調査区内で収束するが、南西側は調査区外へ続いている。規模は、**SD4703**が幅75cm、深さ15cm、**SD4704**が幅60cm、深さ10cmを測る。いずれも断面形は浅いU字状を呈する。埋土は**SD4703**がの単層、**SD4704**が底部に荒い砂層が堆積する。

**SD4705** 調査区東半部で検出した。南北方向に直線的にのび、南北両側ともに調査区外へ続く。幅50cm、深さ16cmを測り、断面は浅いU字状を呈する。埋土はシルトの単層である。

**SD4706** 調査区東半部で検出した。北東から南西方向に直線的にのび、両側ともに調査区外へ続く。幅80cm、深さ10cmを測る。断面形は浅いU字状を呈し、埋土はシルトや粒子の細かい砂層が下層に堆積している。  
(長濱)

## 【48・49区】(図版218～223・352)

### 掘立柱建物

**SB4901** 調査区東半部で検出した2間×2間の総柱建物である。**SB4902**、**SD4901**と重複し、本建物を構成する柱穴が**SD4901**に切られている。建物の南北方向はN-36°Eを示す。規模は東西3.4m、南北3.6mを測り、柱穴の芯々間距離は1.45～1.85mである。柱穴は掘方が隅丸方形を呈し、それぞれの辺は建物の方向とほぼ一致する。一辺40～70cm、深さは30cm前後である。柱穴の形状から奈良・平安時代に属すると考える。

**SB4902** 調査区東半部で検出した。梁行2間、桁行2間以上の総柱建物である。**SB4901**、**SD4901**と重複する。**SB4901**とは直接切り合い関係を持たない。また**SD4901**に本建物が切られる。建物は南北棟と考えられ、南北方向はN-28°Eを示す。規模は東西3.4m、南北3.2m以上を測り、柱穴の芯々間距離は桁行が1.8mと1.5m、梁行が1.2mと2.3mである。柱穴は掘方が円形を呈し径20～30cm、深さ15～30cmである。**P021**から須恵器鉢が出土している。

**SB4903** 調査区東半部で検出した梁行2間、桁行2間以上の総柱建物である。他の遺構との重複は見られない。建物は南北棟であり、その方向は座標方位とほぼ一致する。規模は東西3.8m、南北4.5m以上を測り、柱穴の芯々間距離は桁行が1.5mと3m、梁行は1.9mである。柱穴は掘方が円形を呈し径35～50cm、深さ15～30cmである。

**P021**出土1074は須恵器鉄鉢形鉢である。内湾する体部をもち、内側を向く口縁端部は面をもつ。底部は平底状を呈する。

### 溝

**SD4901** 調査区東半部で検出した南北方向の溝である。**SB4901**・**SB4902**と重複し、これらよりも後出している。南端は調査区内で終結しているが、北側は調査区外へ続いている。幅55cm、深さ15cmを

測る。断面は浅いU字状を呈する。埋土はシルト質極細砂の単層である。

**SD4902** 調査区中央付近で検出した。ほぼ南北方向にのび、幅60～90cm、深さ20cmを測る。検出した溝は切り合いをもつ溝2本であるが、いずれも断面は浅いU字状を呈する。検出地点は水田の段差の裾にあたり、調査前に存在した水田に伴う水路も重複している。断面観察では埋土に地山や地山ブロックを多く含む層の堆積が見られ、一帯の開発に伴い埋め立てや掘削が繰り返されたものと考えられる。

**SD4902**出土**1075**は須恵器椀であろう。貼り付け高台の脇から斜め上方に立ち上がる体部の一部のみ残存しているのみである。

**SD4903** 調査区西端で検出した東西方向の溝である。両側ともに調査区外へ続いている。周辺で検出した鋤溝と重複し、本溝が鋤溝に先行している。幅0.8～1.1m、深さ14～23cmであり、西側が浅くなる。断面は浅いU字状を呈する。埋土はシルト、シルト質極細砂が堆積する。

**SD4805** 調査区北端で検出した南北方向の溝である。直線的にのび、両側は調査区外へ続いている。周辺で検出した鋤溝と重複し、本溝が鋤溝に先行している。幅45cm、深さ17cm前後であり、断面はU字状を呈する。埋土はシルト質極細砂の単層である。

**SD4806** 調査区南端で検出した南北方向の溝である。北端は調査区内で収束し、南端は崖面となる。南北両端の比高差は50cm、溝底は途中に約20cmの段差がある。幅45～80cm、深さは最大で25cmを測る。溝内には弥生土器が複数個体投入されている。溝の低位側には**SH5601**があり、本溝は斜面からの流水を受け、排水する目的があると考ええる。

**SD4806** 出土遺物は溝内より多数の土器が出土したが、多くは破片であり、完形のものはない。図化したものはいずれも甕である。**1069**は底部を欠く。くの字状に外反する口縁部をもつ。体部は球形に近いと思われ外面は右上がりのタタキの後にハケ目を施す。**1068**・**1070**は体部下半を欠く。**1068**はくの字状に外反し、大きく開く口縁部をもつ。体部外面にはハケ目を施す。**1070**はくの字状に外反する口縁部をもち、体部外面には右上がりのタタキが認められる。**1073**は体部下半である。形状は無花果形を呈すると見られる。外面は横方向のタタキの後タテ方向のナデを施す。**1071**、**1072**は甕の底部と思われる。**1072**は外面にタテ方向のハケを施している。**1071**は外面に横方向のタタキを施す。(長濱)

## 【50区】(図版230・231・353)

この地区は49・11区の東側に設定された調査区で、段丘の上面から緩やかに傾斜して東端の氾濫原に下る場所に位置する。検出された遺構は掘立柱建物・溝・土坑などがあり、遺物は中世の須恵器・土師器、古代の須恵器・土師器、縄文時代の深鉢などがある。

掘立柱建物**SB5001**は49区**SB4901**・**SB4902**の東35mに検出されたもので、検出箇所は50区東端から11区側にも伸びており、今回の調査で全貌を検出することができた。**SB5001**は南北3間×東西2間前後の規模の建物と推定される。ただし、3列の柱並びは検出されたものの、上面の削平なども関係して建物の全体を復元するには至らなかった。おそらく柱列の方向に並び、柱穴群の分布範囲前後の規模の建物と推定される。この柱穴を信じれば建物の軸は真北を向く。東柱は中央の2基が確実であるがその前後に並ぶ小型の柱穴も本建物に関連する柱穴と考えられる。柱穴は平面円形で直径20～40cm前後と小型である。

なお、確実に**SB5001**に含まれる柱穴ではないが、**P010**から平瓦片**T28**が出土している。凸面に格子

目、凹面に布目が観察される個体で、中世前半の瓦と推測される。これらの遺物や遺構の状況から、SB5001の時期は中世前半頃と推測される。

SD5001は11区から東に向って流下する溝で、長さ36mに渡って検出された。幅は0.7~1.4m、深さは20~30cmである。調査区内で大きく弧を描き、東側の末端は調査区北側に伸びている。おそらく段丘上から東側の白ヶ池川河床にかけて流れた溝と推定される。なお、この溝の上にSB5001の柱穴が検出された。

この溝からは弥生土器鉢1077・高杯1078の2点が出土した。鉢1077は底部片で体部下半にヘラ磨き、内面にハケ目調整が観察される。高杯1078は脚部片で底径10.5cm、残存高7.45cmを測る。このため溝の時期は弥生時代と判断される。

この他に、調査区東側で検出されたP001から縄文土器深鉢1076が出土している。口縁部から体部にかけての破片で、晩期のものである。口縁部に突起を持ち、外面に条痕が観察される。口径27.6cm、残存高6.6cmを測る。(山上)

## 【51区】(図版232)

別府川北側の調査区で、50区の東側に位置する。周辺は別府川の氾濫原に位置するため、砂層と粘土層・シルト層が断続的に堆積する。調査では表土・耕作土・床土を除去し、比較的シルト層が広がる安定した面を検出した。

調査の結果、溝・土坑などを検出し、中世前期の須恵器・土師器などが出土した。溝は調査区南側で検出されたもので、東側で大きく拡大して土坑状となる。(山上)

## 【52区】(図版233・234・253)

別府川の左岸、白ヶ池川と別府川に挟まれた西側の低地から段丘斜面に位置する。平成14年度の確認調査により、古墳時代前期の溝、水田が検出されたことから本発掘調査を実施した。

低地にあたる調査区南側の基本的な層序は、砂混じりの褐灰シルト、有機質を含む褐系のシルト層が続く。厚い黒褐シルトを挟んで灰黄系シルト、砂礫層となる。北半は段丘の斜面に位置するもので、耕土層下で黒褐シルトと礫混じりの黒褐シルト層、ベースとなる褐灰シルトとなる。

遺構は北側の段丘斜面で溝と土坑状の落ち込みを検出した。溝は低地部分と段丘の境目を南北方向にのびるSD5201・5202と、段丘北側で東西方向にのびるSD5203・5204がある。前者はSD5201の埋土から弥生土器直口壺1079が出土している。頸部から口縁部の破片で外面にタテ方向のハケ目、内面に横方向のハケ目調整を施す。後者は水田に伴う水路の可能性もあるが、水田畦畔は上層の攪乱もあって検出できなかった。土坑状落ち込みSX5201は調査区東端で検出し、調査区外へ続くため、全容は明らかでない。幅80cm、深さ10cmを測る。またこの付近では柱穴も数基検出している。

段丘斜面は調査区の制約によりその端部を検出したのみである。段丘上では表土直下で地山となり、数本の鋤溝の残欠と思われる溝状遺構を検出した。また斜面では近世以降の水田化に伴い造成されたと考えられるテラス状遺構を検出したが、近世をさかのぼる遺構は検出できなかった。

この地区から出土した遺物はSD5201以外では、南側低湿地からのものである。2個体を図化した。

すべて弥生土器で、蓋1278・台杯1277がある。蓋1278は外面にハケ目が観察され、円形の穿孔が入る。台杯1277は底部の破片である。土器のほか板材などの木製品が出土している。(山上)

### 【53区】(図版235～254・353～368)

53区は南北道予定部分で2420㎡と今回の調査では最も広い調査区である。ただ、調査区内に段丘崖が存在し、その上と下では状況は全く異なっている。南側は2004年に調査した37区に接している。

段丘上の基本層序はⅠ層 現耕作土・Ⅱ層 床土・Ⅲ層 褐色土(中世前期の耕作土 土壤層)・Ⅳ層 黒褐色土(律令期～古墳時代の包含層)・Ⅴ層 黄灰色細砂(地山)であるが、Ⅲ層は一部だけで全体には広がっていない。またⅣ層も薄い堆積層である。

検出された遺構は、方形周溝墓2基、古墳1基、埴輪窯1基と溝・土坑・不明遺構・柱穴である。柱穴の中には柱痕跡を確認したものもあったが、掘立柱建物跡には復原できなかった。土坑も性格が明らかな遺構はない。

弥生中期の遺構は方形周溝墓(落ち込み)・土坑である。方形周溝墓は調査区の南西部と段丘崖に近い中央部東側で検出している。SX5304は南西部にあり、古墳時代の落ち込みである SX5301と旧河道に切られている。北側は旧河道によって切られているが、ほぼ全体規模が確認できる。東西6.5m、南北10.0mで南辺と西辺に弥生土器が置かれていた。土器から推定される時期は他地区と同じ中期後半である。SX5301からも弥生土器は出土している。壺・甕で底部が多い。SX5304は方形周溝墓での原位置を保っているようである。1130は加飾ぎみの壺で波状文・斜格子文と円形浮文・棒状浮文で飾っている。体部下部に焼成後の穿孔がみられる。もう1基は複数の遺構に切られているが周溝の一部(SX5303と SX5302の下層)と主体部痕跡 ST5301が確認された。ST5301は深さ10cm余りでかろうじて確認されたもので遺物は出土していない。幅1.0mで長さ2.8mである。南側になる SX5303から壺1126・1127と甕1128が出土している。西側にあたる SX5302の下層からは壺底部1114以外は甕が多く出土している。1113はほぼ完形で平底が突き出している。1112は体部を欠いているが大形の甕である。

古墳は南西部の方形周溝墓とほぼ同じ位置に存在している。不定形で円墳か方墳になるか明確でないが、規模は10.0m余りと小さい。方形周溝墓よりも浅く幅の広い溝である。須恵器甕の破片が多く出土している。SX5302は長さ8.2m幅4.8mと不定方形の大型の落ち込みである。埴輪窯跡の延長上にあり、埴輪が入れられている。円筒はなく形象埴輪に限定されている。窯跡の製品と思われる。石見型盾が多く含まれ、特徴的な弧文が描かれている。斜め方向の孔も存在する。端部が大きく肥厚した脚台裾部1124もある。端部近くに円孔が巡っている。

埴輪窯跡は白ヶ池川南岸の段丘崖を利用して構築されている。長さ5.0m、幅2.0mの窯跡で長期間使用されたとは思われない。焼成部付近は平坦に近く長さ1.8m、その上の燃焼部床面も18°前後と緩やかである。煙り出し近くは40°近くの急傾斜となる。焼成部のみ粘土を貼っている。断ち割りで部分的に2面観察されたが、全体には及んでいない。小規模の補修を行った程度であろう。大きな特徴は形象埴輪を主体に焼成していることである。人物・家・鹿・馬・盾などで、円筒埴輪は少なく、円筒埴輪の多くは脚台になると思われる。特に盾が多く見られ、これらは石見型盾形埴輪に分類されるもので、その中でも新しい時期に編年されている埴輪である。6世紀中頃～後半の時期である。兵庫県ではじめて発掘調査された埴輪窯跡であり、特殊な形象埴輪を焼成している意義は高いものと思われる。種類による

窯詰の位置は中央付近に動物が多いようで、盾は全体に広がっている。灰原は段丘下に広がっている。埴輪以外は出土していない。石見型盾形埴輪が最も多く出土している。大きさは一律でなく大小がある。円弧と直線で装飾しているが小さいものは弧線が少なくなっている。外周に2本単位の直線(原体は竹管か)を巡らせ、中央頂部に2つの突起があり、そこから放射状に直線と円弧を組み合わせている。上下3段に左右3ヶ所の円孔を設ける。貫通していないものも多い。全体がわかる個体はないが、中央を大きく分離する直線帯はなく、左右も上下2段ずつの三角の突出部となる。色調は赤橙が多いが、灰原の水分の多いところは黄橙かにおい黄橙になっている。砂粒は多く含む。脚台のタガは2段あるものと思われ、間に透孔が存在する。端部が外に踏ん張るもの、タガ上方がしっかりした方を上とした。1151だけ外面ハケ整形で、それ以外は粗いナデ仕上げである。1152は人物の腕部分、1153は鹿の角、1154は馬か鹿の耳である。1155・1175・1176は馬の胴部である。馬具が表現されている。1156は盾持ち人の盾部分で、1157～1159・1177・1178は馬の脚である。タタキ成形している。1160～1162は家であろう。

SK5328は埴輪窯跡の北側にある。段丘崖上端に築かれている土坑であることから窯跡かと思われたが、焼土などは出土せず、土坑西側端部に須恵器が集中して置かれていた。杯セット2組と短頸壺・壺の6個体が置かれた祭祀土坑であろうか。幅90cmで残存長2.9mを測る。SX1705などの祭祀土坑と比べて段丘崖に作られている点は類似しているが、火を利用していないことが異なっている。段丘面の上を旧河道が通っている。崖に平行に近い角度でSR5301を確認した。他地区の流路とは異なり、完全に自然のもので、弥生土器から奈良時代の遺物が出土している。

段丘下の低地では水田を検出した。繰り返されて水田を営んでいたようで、畦畔痕跡を確認した。大畦畔は崖面に平行に南北に延びている。土師器・須恵器が出土しており、7世紀代の遺物で新しい時期の遺物を含まない。(渡辺)

## 【54区・55区】(図版255～257・368)

区画整理予定地の南西部の段丘下に位置する調査区である。すぐ西側に現在の別府川河道がある。54区は2004年調査の28区の西側に、55区は30区の西側に接して位置しており、ともに狭長な調査区である。調査結果は似たもので、段丘下の水田部分に相当する。54区では西側で溝SD5401・5402の2条を確認した。SD5401は南北にのびる幅50～90cm、深さ12cmを測る。断面台形の浅い溝で、有孔土錘1224が出土している。SD5402は南側で2股に分かれ深さ70cmを越えるU字形の溝である。55区では水田大畦畔を検出している。上端が2.0m前後で16.0m以上延びており、延長上に31区の土橋であるSF3101が存在する。東西方向の大畦畔は30区から延びてくるもので、条里地割りに関連するものと思われる。大畦畔南側を主に礫を張るように利用している。この大畦畔を断ち割った際に、地鎮に伴うと思われる遺構が検出されている。挽物の皿に五穀と桃の実、土馬を使って祭祀を行っている痕跡である。土馬1225は脚部の破片で股部分である。北側水田面から釣鐘形のイイダコ壺1226が出土している。(渡辺)

## 【56区】(図版218・219・224～228・368～370)

### 竪穴住居

SH5601 56区と48区の交点の南西隅で検出した。一部が調査区外となるがほぼ大半を検出している。

平面は方形を呈し、一辺4.0mを測る。検出面からの深さは最大で25cmである。床面中央部では東西方向に主軸をもつ楕円形の土坑を検出した。長径80cm、短径50cm、床面からの深さ8cmを測る。この土坑の周囲には幅30～40cm、高さ5cm程度の盛土による土手が巡る。この土坑をはさんで南北に柱穴を検出した。主柱穴は2本柱と考える。また壁面にそって周壁溝を断続的に検出している。埋土には多量に炭を含み、床面でも垂木と思われる炭化材が部分的に残存することから、本住居は焼失したものとする。斜面の高位側にはSD4806が巡り、本住居と一体をなすものとする。

出土遺物は、埋土および床面から多数の土器が出土したが、主に床面付近から出土した残存状態のよい10点を図化した。北壁中央付近では壺1232および器台1236が直立した状態で出土した。北半の床面からは鉢1233が出土した。西半には甕1228が横倒した状態で出土したほか、隣接して直口壺1227がある。中央の土坑を囲む土手上からは広口壺1230が、土手東側からは甕1231と広口壺が並んで出土している。

1232は壺の体部下半と思われる。体部の形状は下半部に最大形がくる球形に近いものと思われる。1229・1230は広口壺である。1230は体部を欠くが外反して開く口縁部をもつ。1229は口縁部は長く外傾する。体部は球形に近く下半部には指頭痕が残る。1227は直口壺である。口縁部は短く直立する。底部を欠くが体部は下位に最大径をもつタマネギ形になると思われる。1231・1228は甕である。1228は口縁部は外反し、長胴の体部外面は横方向のタタキの後タテ方向のハケ目を施す。内面はヘラケズリにより仕上げる。1231はくの字状に外反する口縁部をもち、長胴の体部外面には右上がりのタタキを施す。内面はハケ調整である。1234は底部のみであるが、底部が穿孔され、甕形の甑と思われる。1235、1233は小型の鉢である。1235は手づくね整形で口縁部は内湾ぎみに直立する。1233は碗形を呈し口縁部が内湾ぎみに立ち上がる。外面はわずかにミガキが認められる。1236は器台である。口縁部、脚部ともに筒部から大きく開く。筒部には透かしが2段、4方向に穿たれる。摩滅ぎみではあるが、外面にはミガキが認められる。

SH5602 調査区中央付近、北壁沿いで検出した。遺構の北半部は調査区外へ続く。平面は方形を呈し、東西方向は3.0mを測る。深さは最大20cmである。埋土には炭を少量含んでいる。床面では柱穴を3基検出したが、主柱穴は明らかにできていない。その他に土坑や周壁溝などの施設は検出していない。南隅付近が一部張り出しをもち、この部分から土師器壺が破碎した状態で出土している。また北壁付近で須恵器甕片が出土している。

1237は土師器壺であり体部下半を欠く。くの字状に外反する口縁部をもち、体部は球形に近い形状と思われる。

SH5603 調査区東半部、北壁沿いで検出した。遺構の北半部は調査区外へ続く。平面は方形を呈し、東西方向は5.5mを測る。深さは最大30cmである。埋土には土器片とともに炭を含んでいる。床面では柱穴を6基検出したが、主柱穴は明らかにできていない。その他に土坑や周壁溝などの施設は検出していない。図化する遺物は出土していないが、南隅付近で粘土塊を検出した。

#### 土坑

SK5601 調査区西半部に位置する。ほぼ南北に主軸をもつ楕円形を呈し、長径1.3m、短径1.1mを測る。底部は西から東へ傾斜をもち、底部に3ヶ所の柱穴状の窪みがある。深さは最大で20cmある。埋土は褐灰系のシルト質細砂が堆積し、埋土内よりサヌカイト剥片が複数出土した。

SK5602 調査区西半部、SK5601の北東側に位置する。やや不整な円形を呈し、径70cmを測る。深さは7cmあり、断面は皿状を呈し、底部はほぼ平坦である。埋土は細砂が上下2層堆積する。

**SK5603** 調査区西半部、**SK5601**の北側に位置する。北東から南西方向に主軸をもつ楕円形を呈し、長径1.4m、短径0.85mを測る。深さは9cmで断面は皿状を呈し、底部はわずかに凹凸がある。埋土はシルト質細砂の単層である。

#### 埋設土器(SI5601～SI5603)

土器1(SI5601)と土器2(SI5602)はSH5602の西側で検出した。東西に約50cm隔てて2基並ぶ。土器3(SI5603)と土器4(SI5604)はSH5602とSH5603の間で検出した。南北に約40cm隔てて2基並ぶ。いずれも後世の削平により上部を損なっている。

**土器1(SI5601)** 掘方はやや不整な円形を呈し、径54cm、検出面からの深さは15cmを測る。外容器には縄文土器深鉢を用い、横たえた状態で検出した。主軸はほぼ南北方向であり、口縁部を南側に向ける。

**土器2(SI5602)** 掘方はやや不整な円形を呈し、径50cm、検出面からの深さは18cmを測る。外容器には縄文土器深鉢を用い、横たえた状態で検出した。主軸を東西方向にもち、口縁部を東側に向ける。

**土器3(SI5603)** 土器4の西側で検出した。掘方の大半が削平され、土器の一部を検出しただけである。本来土器は掘方内に横たえた状態で設置していたものと考えられる。なお土器は残存状態が不良であるため、図化しえなかった。

**土器4(SI5604)** 掘方はやや不整な円形を呈し、長径50cm、短径40cm程度。検出面からの深さは17cmを測る。外容器には縄文土器深鉢を用い、横たえた状態で検出した。主軸はほぼ東西方向であり、口縁部を西側に向ける。

出土遺物は、いずれも縄文土器であり、土器3を除く3個体を実測した。いずれも広口深鉢である。胴部からわずかなくびれを経て外反する頸部へと続き、底部は径が小さい。1240は胴部の外面ハケズリを施し、頸部は条痕と3方向に連続刺突による文様を施す。口縁端部には刻み目を施し、3個1対の山形状突起を3ヶ所の配する。1239も外面の調整は不明瞭ながら、胴部は横と斜め方向の条痕、口縁部は横方向の条痕と思われる。口縁端部には刻み目を付す。1238は波状口縁をもち、端部には刻み目を施す。胴部外面の調整は不明瞭ながら斜め方向の条痕と思われる。いずれも縄文晩期、篠原式古～中段階のものと思われる。(長濱)

## 【57区】(図版218・229～371)

49区南側の段丘崖で検出した遺構で焼土坑・土坑と性格不明遺構を各1基検出している。すべて埴輪が出土しており、特に焼土坑**SK5701**は埴輪窯跡の可能性の高い遺構である。規模は東西90cmで南側に延びている。残存長は90cmで最大深さ23cmを測る。土坑肩はすべて強く焼けており、底面は南の方が低くなっている。底面は焼土・炭が充満しており、その上に埴輪が乗っている。埴輪は淡輪型と呼称されるもので6点1241～1246を図化している。粗い縦方向のハケ整形し、内面はユビ成形である。タガはM字の下側が崩れたもので高くはない。口縁端部が外側に肥厚し、裾部は特徴的な段になっている。土坑**SK5702**は**SK5701**の東側に構築されたもので、幅55cm、深さ20cmを測る。円筒埴輪口縁部1247が出土している。横方向のハケがみられる。**SX5701**は2.3m以上のもので、断面観察しか行っていない。西側底部のみに炭が検出されている。焼土はまばらで全体に広がっているものではない。4点の円筒埴輪を実測した。口縁部に向かって外反して広がっており端部は角張る。タガは低い台形である。1250・1251はヘラ描きの記号が施されている。にぶい赤橙～淡橙をし、小石粒を含んでいる。(渡辺)

## IV 遺物

### 1. 縄文土器(図版283・372)

138は深鉢の口縁片で1区から出土した。1252は深鉢の口縁である。外面には条痕が顕著に認められる。1254も深鉢の口縁部であると思われる。両者とも53区から出土した。1257から1261は深鉢・浅鉢の破片である。1261には連続刺突が認められる。すべて1区から出土した。

### 2. 弥生土器(図版279・372~373)

95は壺の体部片である。鋸齒文を施している。1区から出土した。1256は壺の口縁である。128と同様の器種ではないかと思われる。1262は口縁内突帯広口壺の口縁部片である。口縁部外側に連続刺突文と円形浮文を施す。1263は広口壺の口縁である。凹線を巡らせ、小形の円形浮文を付加する。他地域からの搬入品の可能性が高い。1264も広口壺の口縁部片である。1265・1266は中期後半の甕である。53区から出土した。1267は後期の甕で、40区から出土した。1270は直口壺の口縁部片である。後期初頭のものと考えられる。1268・1269・1271~1276・1280は底部片である。すべて53区から出土した。外面にヘラミガキを行うものとハケ調整を行うものがある。1277は無頸壺あるいは台付鉢の脚台である。脚部下方を円盤充填するもので中期後半のものと考えられる。1278は蓋である。紐穴と思われる円孔を穿つ。この2点は52区から出土した。1279は水平口縁高杯である。口縁端部を僅かに垂下させ、杯部底部に焼成後穿孔を行う。中期後半のもので、1区から出土した。1281は手捏ねのミニチュア土器の底部である。17区から出土した。

### 3. 古墳時代の土器(図版373~374・385)

他の遺物同様に坂元遺跡は段丘面の包含層は浅く、ここに図化した遺物は谷部や水田部分の上層から出土している。土師器も出土しているが、奈良時代との分別があいまいなもので、すべて奈良平安時代の遺物として扱っている。甕や竈は、この時期に該当する可能性が高い。

須恵器は杯・高杯・甕・壺・甕がある。杯蓋・杯身ともに時期幅がある。図化したものでは6世紀中ごろから7世紀代まで平均的にあるが、実態は7世紀代のものが圧倒的に多い。古い時期の須恵器は水田面から出土しているものが多い。

1282は包含層で最も古い時期を示す杯蓋で径も12.25cmと小さく、天井部から体部への稜線も明瞭で端部の作りもシャープである。搬入ではなく周辺で焼成されたものと思われる。1283は径は余り変わらないが稜線は甘くなり、端部も外側につまみ出しており1段階新しくなるものと思われる。胎土・色調は同じである。1284は器高が低くなり稜線もなく丸みを持つ。径は14.6cmと大きくなり、色調も淡く白っぽくなる。1285は短頸壺の蓋とすべきであろうか。径は9.2cmで端部は面となり、中央が凹み僅かに肥厚するシャープなものである。天井部は未調整で自然釉がかかっている。高温で焼成されており、濃い色調をしている。搬入品であろうか。1286の径は11.4cmと小さいが飛鳥期に下る蓋である。天井部未調整で自然釉がかかる。1287は大きく歪んでおり、体部の稜線は明瞭であるが、低い位置にある。内面は

不定方向のナデを多用している。1288は小形で短頸壺の蓋かもしれないが、端部は丸く天井部は平坦である。1289は平坦な天井部で端部上部で直立ぎみになる。端部は丸い。

1290～1298は立ち上がりのある杯身である。1290は径14.0cm・器高4.3cmと大きめで、立ち上がりもしっかりしているが、器壁が厚くボテッとしている。砂粒も他より多く含んでいる。1291の時期は下ろが丁寧に作られている。立ち上がりは内傾しているが薄くシャープである。底面に3本(1本は細い)のヘラ描き直線がヘラ記号状に認められる。ヘラ切り後にナデ調整した上に施されている。1292は立ち上がりが消失する寸前の身である。僅かに立ち上がりが高い程度で受部の高さと余り変わらない。外反し端部は尖る。1293はさらに立ち上がりが低くなっている。短く外反している。1294・1295・1297も同時期の杯身の破片である。1295は白っぽく焼き上げられている。底部未調整で器高が高い。1296も同時期であるが内面色調が赤灰と変わっている。高温で焼成されており、搬入品であろうか。口作りはシャープである。1298は受部に特徴がある破片である。受部を上方につまみ上げ端面のようにしている。立ち上がりはシャープで短く外反する。図上では一見古相を示しているように見えるが飛鳥期のものである。

1299～1305は立ち上がりのない杯身である。1299は端部が内傾し焼成が甘い。1300は体部に變化部があり稜線を持って直立する。色調は白っぽい。1301は縄蓆文のような細かい格子タタキを底面に施している特殊な身である。体部は外傾し端部は尖る。内面は丁寧にナデ調整している。1302は体部が外傾し凹線を有している。1303は2次焼成を受けたものか外面は赤化している。器肉と内面は灰白である。器壁が厚い。1304は内湾ぎみの口縁部で白っぽい。1305は器高4.2cmと高い。体部は緩やかに屈曲して外傾しており、端部は丸く反りぎみである。

1306～1309は壺である。1306は口径11.5cmと大きく外傾から端部付近で直立する。2条の突帯を有しその間に細かい波状文で装飾している。頸部で割れている。搬入品で古相を示す。1307は口径が最大径で体部が小さくなっている。扁平な体部で肩部はカキメが施されている。頸部は大きく長く外反し、口縁部は稜線を経て外傾する。体部の円孔部分は残っていない。1308は口頸部を欠いている。扁平な体部で自然釉がかかっている。1309は口縁端部を欠いているが完形に近い。自然釉が全面にかかり光沢を持つ。球形の体部で下半はケズリで成形しておりナデ調整を加える。2条の凹線があり、その部分に円孔を開けている。凹線の下にヘラで波状のものが一部見られるが明確でない。頸部は外反し2条の凹線を有する。内面に粘土塊が入って折り取れない状態である。意図的か円孔を作る際に入ったかであろう。

1310は高杯脚部である。3方に方形の透孔を配する。端部は内傾し脚部にはカキメが施される。杯部は残っていないが有蓋高杯と思われる。

1311・1312・1315～1322は甕である。1311は大型で径25.0cmを測り、タタキ成形である。端部は丸く納める。1312をはじめ端部は面となっているものが多く、タタキ成形である。自然釉がかかっているものも多い。1316は端部が内外に肥厚するもので、全体的にシャープである。頸部との中間に突帯があり、その上下に細かい波状文がある。体部は直線的に広がる。1320は直立ぎみの口縁部で端部は外側に尖らせている。端部下に波状文を施すが粗い施文である。1321・1322は端部が大きく肥厚するもので、ともに端部にヘラで刺突文を描いている。1322は綾杉状に施している。

1313・1314は壺である。1313はやや肩の張る球形の体部で肩部に2条の凹線がありその下に波状文帯がある。自然釉がかかっている。1314は口縁部を欠いている。肩が張り底部が不安定な体部である。タタキ成形で肩部には1条の凹線があり、カキメが施されている。

## 23区北側採集遺物

23区でも埴輪が出土しているが、その北側の排水路工事などによって出土した一群である。上げ土で採集した遺物である。SX2301出土遺物とともに一連の遺物であり、古墳が存在したものと思われる。1494は器台で、脚台部は5段の透孔があり、その間には凹線で画されている。透孔は方形で上下に振幅の大きい波状文が施されている。最上部は幅が狭く、透孔はあるものの波状文は認められない。脚台は裾部に向かって徐々に広がり端部近くで直立し、端部は内外に肥厚する。上台部は浅い半球状になり、端部近くで屈曲し端部は角張る。タタキ成形されており、ロクロナデで仕上げる。外面は凹線で文様帯を分けている。体部上部の波状文帯は幅広い。下半の3帯は細い波状文が施される。上台底内面に円形の剥がれた痕跡があり、上部に接合する土器があり、裝飾器台になるようである。1495の下部が割れており、同一個体である。1495は台付き長頸壺で、肩の張る内湾する体部に外反する口縁部が付く。端部は肥厚している。肩部に刺突文帯があり、頸部には上下に刺突文帯がある。台部は欠失している。1496は甕である。扁平な球形の体部に外反する頸部となる。肩部に刺突文帯があり縁孔が開けられている。頸部上部にも刺突文帯がある。1497は石見型盾形埴輪である。円弧で裝飾し小円孔が穿たれている。裏面は強いユビ成形がなされている。復原した石見型盾形埴輪(1500 第36図)もここから出土したものである。復原した器高は131.1cmを測る。

## 4. 奈良・平安時代の土器(図版375~381・386)

土師器・須恵器と緑釉陶器が出土している。土師器の中には古墳時代になる可能性もあるが、ここで扱う。

### 土師器

1323は杯である。丸底で内面はヘラミガキがなされている。内湾する体部で端部は丸い。1324~1326は椀である。1324は半球形で内湾し端部を外側に反りぎみに尖らす。丸底で比較的粗雑な作りである。外面はケズリのままで、内面はナデである。1325は平底に近く、内面の調整はヘラミガキであろう。磨滅が顕著である。1326は深めで二次焼成を受けている。ユビ成形から上半はナデで調整し口縁部はヨコナデである。端部は反りぎみで丸い。1327は杯である。内湾し端部が内側に面をなす作りである。端面中央が凹むもので内面には放射状のミガキが暗文として行われている。外面はユビ成形からナデとミガキが施される。1328は高杯の杯部である。磨滅著しいが内面は細かい暗文状のヘラミガキで調整している。口縁部はヨコナデで杯部は浅めである。端部は外側に引き出すようにしている。1329は坂元遺跡では数少ない土師器の高台付きの杯である。断面三角形の低い高台が付いている。口縁部は外傾し端部は内側に沈線を持つように仕上げられている。磨滅で表面が剥離しているが、ミガキがなされていたようである。

1330~1332は小型土器である。1330は甕である。歪な体部で内面ユビ成形からナデ、外面ユビ成形からハケ整形している。口縁部はハケ整形からヨコナデである。1331は古墳時代の小型丸底壺の可能性が高い。ユビ成形からナデ仕上げで口縁部を欠く。1332は鉢で内面から口縁部にかけて黒色になっている。火を受けており、何かの容器として使用されたものか。ユビ成形からナデている。1333は皿で、胎土精良で焼成も良好である。端部は肥厚ぎみで面となる。ミガキがなされている。

1334~1345・1347・1348は甕である。1334はユビ成形で口縁部を作りだしている。内面ヘラケズリ、

外面ハケ整形である。1335は端部が角張りやや肥厚する。ハケ整形からヨコナデで仕上げる。1336は口径14.85cmと小型である。磨滅が顕著で技法はヨコナデしかわからない。器肉は黒褐で表面はにぶい黄橙である。1337は薄手に仕上げられている。ただ、粘土紐の継ぎ目など明瞭で精製品ではない。口縁部は緩やかに屈曲し端部は尖っている。1338は角張る端部で肥厚している。端部下が凹んでいる。ユビ成形からハケ整形、それからナデ調整する。ハケは細かく丁寧である。口縁部はヨコナデ。1339は尖りぎみに丸い端部の外面下に浅い凹線が存在する。ハケ整形からナデしており、口縁部はヨコナデである。1340も角張った端部で内側につまみ出している。ユビ成形からハケ整形を行い、ナデ仕上げする。口縁部はヨコナデ。外面には有機質が付いている。1341は角張った端部で内外に肥厚する。体部は細かいハケ整形を行っている。口縁部は折り曲げて作っており、指圧痕がみられる。ヨコナデで仕上げるが、強いようで頸部に浅い段がついている。1342は焼成が甘く表面は磨滅している。端部はやはり角張っており、内外に肥厚している。1343は強く被熱しており、口縁端部は赤化している。短く外反する口縁部で体部は直線的に開く。マダコ壺の可能性がある。1344は胎土に小石粒を含む甕である。端部は角張り、口縁部は大きく開かず外傾する。1345は長胴になり余り開かない直線的な体部で、口縁部は外傾し端部は角張る。外面は縦方向の細かいハケ整形で、内面はユビ成形ののちナデである。小石粒を多く含み、搬入品であろうか。1347も残存状態が悪い。角張る端部でハケ整形である。1348は肩の張る体部で口縁部は外傾し端部は角張る。内外面ともにハケ整形である。

1346は高台部で外傾し内外に肥厚する台形の高台である。体部はミガキで仕上げていたと思われる。壺か盤などの高台と思われる。

1349は甗の口縁部で把手部も残存していない。端部は僅かに反り、外側につまみ出している。外面は縦方向のハケ整形で、内面はユビ成形からナデである。

1350は把手付き鍋である。尖った外反する把手で断面は方形である。体部とはユビ成形によって接合している。底部は不安定な大きな平底である。外面はハケ整形で、内面はユビ成形からナデている。1351は古墳時代初頭の壺口縁部の可能性が高い。口縁部は外反し、体部は緩やかに内湾する。

1352・1353は竈である。1352は内傾する体部で端部を内側に丸くしている。タガ状の突帯は水平でなく上下している。内面はユビ成形のままで一部ナデている。外面はハケ整形である。当然ながら強く火を受けている。1353も器形は似ているが端部は角張る。突帯は上下しており、断面台形で中央が凹んでいる。断面隅円方形の尖った把手が下に向かって付けられている。内外面ともにハケ整形である。

1253は鍋と思われる。外面にハケ調整を行っている。53区から出土した。1255も鍋で、10世紀頃のものと思われる。1区から出土した。

#### 須恵器

1354～1379は杯蓋である。1354はつまみ部を欠く。天井部は平たく、反りは短く断面三角形である。1355は扁平な宝珠つまみで天井部は平坦で外側に開き端部はつまみ出して面になっている。端部の一部を欠くが図上ではほぼ残っている。1356は大きな扁平な宝珠つまみで天井部は平たい。1357は小さな宝珠つまみで平坦な天井部から稜線を持たずに外傾し端部は下方に丸く引き出すことによって端面になっている。色調は白っぽく、胎土は精良である。1358は口径11.7cmと小型で天井部は平たく外傾し端部は短く外反させている。自然釉がかかっている。つまみ部は欠失している。1359・1360は器高が低く、端部を下方につまみ出しており、端面中央が凹んでいる。1361は頭が尖った低いボタン状のつまみから内湾する口縁部になる。口縁部は歪んでおり、外面には自然釉が付着している。端部は下につまみ出すこと

によって端面にしている。1362はボタン状のつまみで口径が13.7cmとやや小さい。器壁が厚めで小石粒を含んでいる。1363～1365も蓋口縁部の破片であるが、個々に口縁のつくりは異なっている。1363はほとんど水平に端部に延び僅かに下に引き出して端面にしている。端部近くはやや上に反りぎみとなる。1364は引き出して面にしており、1365は折り曲げるように引き出して面にはなっていない。1366は大きなボタン状のつまみで平たい天井部から内湾し下に引き出した端部である。1367・1369は丸みのある口縁部で器壁が厚めである。1368は平坦で端部をつまみ出す。1370も天井部が平たく端部近くで屈曲し端部を引き出している。内面を硯に転用している。1371は平坦な天井部から外反ぎみになり端部近くは水平に開く。端面になり中央は凹んでいる。白っぽい色調で胎土は精良である。1372～1375も端部近くで変化している。1372は器高が高く、1374は屈曲度が激しい。1376はボタン状のつまみ部を持ち器高は低い。歪になっているのであろうか、天井部が低くなり、端部近くで高くなり端面になる。1377は中央が凹んだボタン状のつまみを持つ。1378はつまみを欠く破片で、丸みのある口縁部でつまみ出している。端面になり中央が凹んでいる。重ね焼の痕跡が残る。1379は保存度が悪く磨滅している。ボタン状のつまみで重ね焼の痕跡が残る。

1390は壺用蓋であろうか。器高が4.7cmあり、口径8.4cmにしては高い。丸みのある天井部で口縁部は外傾し端部は外側に尖らせている。口縁部は歪んでいる。天井部はヘラ切りのままで未調整である。

1380～1389・1391～1398・1400～1404・1499は杯身である。高台のない杯Aと高台のある杯Bに分けられる。

杯Aは9点図化した。1380は口縁部の破片で内湾し端部は丸い。1381・1382は僅かに外傾する口縁部で端部は丸い。底部は不安定な平底である。1382は外面にヘラ記号(×)が存在する。1384も似たタイプであるが、口径がやや大きい。1383は底部が平坦で外傾する口縁部で端部は丸い。底面から外面に火襷状になっている。1385～1387は平底で体部との間が明瞭である。底径も大きい。外傾し端部は丸い。1499は丸みのある平底から外反する口縁部で外側に尖る端部になる。底に「林」の墨書が記される。

杯Bは14点図化した。1388は内湾ぎみに外傾し底部は平坦である。断面方形で端部が僅かに肥厚する高台である。1389は端部が反りぎみに尖る。高台は外側に開き踏ん張りぎみに端部が肥厚する。1391の高台は外側に開き断面方形で端部肥厚する。体部中央に稜線ほどではないが変化部がある。1392はやや外傾し端部が肥厚する方形の高台である。外傾し端部は尖る。体部下半に淡い稜線がある。外面は自然釉が付いている。1393は高台が外側に開くもので断面は方形である。1393の色調は淡い。1394はやや内湾ぎみの断面方形の高台で端面中央が凹んでいる。体部は僅かに内湾し端部は外側に尖らす。1395は高台端面が丸みを帯びる。1396は胎土精良で白っぽい色をしている。高台は断面方形のどっしりしたものである。1397も高台下面が凹んでいる。外側が地についている。底部と体部の稜線は明瞭で体部は外傾する。1398は高台が低く断面方形で下面中央が凹んでいる。体部は内湾し端部が尖る。1400は高温で焼かれ外面に自然釉が付着している。底面は歪んでいる。高台は外側に開く断面方形で外側に肥厚している。1401は体部の器高が高い杯である。外傾し端部は丸い。高台は断面台形である。1402は外側に開く方形の高台で体部は外傾する。高台がポテッとしており粘土が柔らかい他と異なる印象を受ける。1403は体部に稜線を持つものであるが器壁が厚い。高台も幅が厚く断面方形である。口径の割に高台の径が小さい。体部は稜線から外傾し端部は尖る。稜線下はロクロケズリを行い、それによって稜線が出来ている。1404は高台部分が完存している。外側に開く大き目の高台である。体部を意図的に割って高台周辺の円形にしたものと思われる。1339・1405は椀である。1399は高台は低く外側に踏ん張りぎみである。

径がやや大きい。体部は外傾し途中から外反する。端部は丸い。1405は小さな高台で外側に開いている。断面方形で外側に広げている。

1406・1407・1498は稜椀蓋である。1406は口径20.6cmと大型である。つまみ部は稜椀用蓋特有の高台が付いたような輪状のものである。つまみ部径6.0cmに復原され、器高は1.7cmである。天井部は平たく稜線を明らかにせず外反し端部は角張って下につまみ出す。天井部の変化に対応する内側から水平になっている。ヨコナデによって形成している。1407は器高3.2cm、口径18.1cmでつまみ部径5.55cmである。天井部は平たく稜線を持って外反し端部は角張って下につまみ出す。1498のつまみ部は高台状で端部は内外に肥厚する。天井部は平坦で口縁部への変化部は丸く屈曲して端部を下方に引き出す。つまみ部内に2文字の墨書が記されている。

1408～1410は稜椀である。1408は口縁部の破片で稜椀の可能性を求めてここに分類したが断定できない。端部近くで外反し端部は丸い。1409は端部が反って如意形になり体部に明瞭な稜線を有する。色調は白っぽく胎土も精良である。1410は端部の反りは大きくない。端部下に凹線状の窪みがある。体部外面には稜線がある。

1411～1414は皿である。1411は口径15.7cmに復原されるもので底面は平坦である。体部との稜線は甘く口縁部は内湾ぎみである。端部は丸い。1412は体部との稜線が明確で平底である。口縁部は端部付近で反りぎみになり端部は外側をつまんで尖らず。浅い凹線状に凹ます。1413は坂元遺跡では数少ない高台の付く皿である。高台は細く外側に開いている。底は平坦でなくやや上がりぎみで口縁部近くで外反し端部はさらに反る。1414は特殊な器形である。底面が未調整であることから皿とした。湾曲する体部から端部を水平ぎみに大きくつまみ出している。底部以外は強いロクロナデで仕上げている。器肉の色は赤褐である。

1415～1418・1420・1421・1423～1429・1432は壺である。1415は子壺の付いたもので多嘴壺と考えている。現地説明会などで古墳時代の装飾壺としたものである。片側の側面が平たくなっていることや突帯の付き方から多嘴壺とした。突帯は断面台形で長く上向きに付く。1416は小型の壺もしくは瓶子などの口縁部であろう。外反する口縁部で端部は内外に肥厚する。1417は高台の付く底部である。高台は径4.4cmの断面台形で低い。高台上部の体部に円形浮文のように粘土が付いている。焼成時のものだろうか。外面は自然釉がかかっている。体部は内湾する。1418は高台部で外に開く。1420は短頸壺で不安定な平底から肩の張る算盤玉状の体部から短く直立する口縁部になる。端部は内側に丸くしている。肩部に1条の凹線がある。1421は小形の壺完形品である。球形の体部に外反する口縁部となる。肩部に「十」の細いヘラ記号がある。1423は肩の張る体部で稜線が明瞭である。稜線上に1条、凹線がある。外面と内面底部分に自然釉が付着している。高台は外側に開き、地に付く部分は下の僅かである。断面三角形で厚い高台である。1424も高台を持つ壺底部である。外側に開き内外に肥厚する高台で、端面中央が凹んでいる。外面には自然釉がきれいにかかっている。1425も壺底部で、外面と内面底に自然釉が付着している。高台は外側に開く断面方形で端部内外に肥厚する。1426は生焼けの底部で中世に下るものかもしれない。底部が厚く、その割に高台は低く小さい。断面方形である。1427は台付き短頸壺で葉壺と称されるものである。直立する短い口縁部で体部は肩の張る球形である。高台は断面方形で端部が肥厚し外側に踏ん張る。ロクロナデで仕上げられており、肩部を中心に自然釉がかかっている。底面に別の破片が付着している。1428は口縁部である。内傾する体部はタタキ成形である。口縁部は外傾し外側に尖らせている。1429は縦耳部分である。中央に小さな円孔がある。1432は把手部である。幅広であ

ることから壺把手としたが明らかでない。縦方向に断面円形のものを半円形に付けるものでユビ成形である。

1419・1422は高杯である。1419の杯は大きく歪んでいる。内湾し端部の丸い杯部で、体部中央に幅の広い凹線が2条存在する。脚部は外反し端部は内外に肥厚する。表面は磨滅している。1422は脚部で外反し、裾近くで水平になり端部内外に肥厚する。杯部は水平に広がる。

1430は甗である。高台が付いており、球形の体部から直立する方向で割れている。体部は肩が張り稜線があり、その上に幅の広い凹線がある。稜線部分に円孔が存在する。底部は丸底である。高台は外側に開くものである。

1431・1433～1436は鉢である。1431は僅かに内湾し端部外側に肥厚するもので、小片のため口径は復原できなかった。強いロクロナデである。1433～1436も小片である。とりあえず鉢としたが、甕などの可能性も高い。1433は刺突文で装飾されており、古墳時代の甕のようであるが、口縁部が内湾しており、端部が内側につまみ出す内湾ぎみであることから鉢とした。刺突文帯は2帯あり、その間に凹線がある。1434は外反する口縁部である。1435は平底の浅い器形で体部は内湾ぎみで端部は丸い。外面に墨書らしきものがある。1436は大型で内湾する。器台かもしれない。

1437は横瓶である。1437はタタキ成形で体部に2個の別個体の破片が付着している。また剥がれた痕跡も多く残っている。自然釉がかかっている。

1440～1447は硯である。完全なものはなく、すべて破片である。1440は直立に近い脚で上部に断面方形の突帯があり、その下に綾杉文を縦方向に細かく刻んでいる。残存部で6組認められる。文様帯の下に2条の沈線があり端部に続く。端部は方形である。透孔の有無は不明である。海部は外側に突帯状に延びるであろうが欠失している。1441は方形の透孔があるが、残存部には自然釉がかかり、製品として使用されたか疑わしい。陸部と海部との高さの差が大きい。1442は端部方形の突帯状の口縁部が直下して外傾する脚部に付く。透孔の有無は不明である。端部下に断面三角の小さい突帯が付く。海部はロクロナデによって作っており、幅が狭い。1443は硯面の破片である。平坦である。1444は大形の方形の透孔を有するもので透孔の上に2条の断面三角形の突帯を持って方形の端部になる。端部はやや外に開き内外に肥厚する。端部から1.0cmくらい下がったところに海部を幅2.0cmで設け、突帯を伴った段によって陸部と分けている。1445は透孔は存在するが方形の大きなものになろうかと思われる。4方に大きく開く脚になりそうである。陸部と海部は比高差を持っている。三角形の突帯を付けている。1446・1447は脚部で、1446は方形、1447は円形のもが付いている。風字硯の脚である。

1438・1439は緑釉陶器の椀である。1438は稜線を持って外反する口縁部で外面のみ釉がかかっている。端部は外側に尖らせている。1439は低い断面方形の高台で体部は内湾する。見込み部には釉がかかっていない。

## 5. 中世の土器・陶磁器 (図版382～383)

坂元遺跡から出土した中世の土器・陶磁器は非常に少量で、土師器羽釜・甕・皿、須恵器皿・椀・鉢・壺、白磁皿・碗、青磁碗、瓦質土器火鉢、青白磁蓋が僅かに含まれるのみである。

### 土師器

1448・1449は羽釜である。1448は粘土紐巻上げ成形で、体部はほぼ直立し、口縁部外面に断面台形状

の幅の狭い鏝を貼り付ける。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施し、体部内外面は縦方向のナデ調整を加える。焼成は良好で色調はにぶい黄橙色を呈する。器面の摩滅が著しい。1449も1448と同様に、体部はほぼ直立し、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部外面には断面台形状の幅の狭い鏝を貼り付ける。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。さらに体部外面には縦方向の粗いハケ目調整を、体部内面にはナデ調整を加える。焼成は良好で、色調はにぶい黄橙色を呈する。器面の摩滅が著しい。

1450・1451は甕である。1450は口縁部が外方にひらき、口縁端部は外方に若干つまみ出す。内外面とも板状に工具によるヨコナデ調整を加える。焼成は良好である。色調はにぶい橙色を呈し、焼成も須恵器のように堅緻ではないが、形態・調整の特徴から須恵器甕の生焼けの可能性が高い。1451は体部がほぼ直線的に直上に延び、口縁部は大きく外方にひらく。口縁部内外面は指おさえのハケ目調整を施し、体部内面には板ナデ調整を加える。焼成は良好で色調は明赤褐色を呈する。また、外面には点々と黒斑が観察される。器面の摩滅が著しい。

1452～1454はいずれも皿である。1452はロクロ成形で、平底である。体部は短く直線的に外上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。体部～口縁部内外面は回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で、回転ヘラ切痕が残る。焼成は普通で、色調はにぶい黄橙色を呈する。

1453もロクロ成形で、平底である。底部の器壁は比較的厚く、体部は短く外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。底部内面～体部外面は回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で、回転糸切痕が残る。焼成はややあまく、色調は浅黄色を呈する。

1454は非ロクロ成形で、平底である。体部は短く直線的に外上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。体部内面～体部外面はヨコナデ調整を施し、底部内面には2方向のナデ調整を施す。底部外面には指おさえた後、ナデ調整を施す。焼成は普通で、色調は灰黄褐色を呈する。

#### 須恵器

1455は皿である。ロクロ成形で、器壁は全体に比較的厚い。平底で、体部は僅かに内彎気味に短く外上方に延びる。口縁端部は丸みをもつ。底部～体部外面は回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で、回転糸切痕が残る。口縁部内外面には重ね焼き痕が残る。また体部内面には灰被りがみられる。東播系須恵器で12世紀後半代～13世紀前半代に比定される。

1456～1462は椀である。1456・1457は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調は1456が褐灰色、1457が暗灰色を呈する。東播系須恵器と考えられる。1458は体部が僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。焼成は堅緻で、色調は灰白色を呈する。東播系須恵器と考えられる。

1459～1462はいずれも低い平高台をもつ椀である。いずれも、底部内面はやや窪む。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部は丸みをもつ。1466・1467は椀の底部である。1466は平底、1477は平高台である。

1463～1465はいずれも鉢である。1463は口縁部外縁が突出し、内面がやや窪む。内外面とも強い回転ナデ調整を施す。1464は口縁部の端面が丸みを帯び、内面が若干窪む。1465は口縁端部の縁が比較的シャープなもので、口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施す。いずれも東播系須恵器魚住窯の製品と考えられ、口縁部の形態から、1463は14世紀後半～15世紀前半に、1464は13世紀後半～14世紀前半に、1465は12世紀後半代にそれぞれ比定される。

1477は壺の底部である。平底で、体部は直線的に外上方に延びる。内外面ともナデ調整を施すが、一

部に指頭圧痕が残る。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。

#### 白磁

1468は皿である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は僅かに外方にひらく。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。口縁部の釉をかきとるいわゆる口禿の皿である。大宰府分類の白磁皿Ⅸ類に相当し、13世紀後半～14世紀前半代に比定される。

1469は碗である。1468と同様に口縁部が僅かに外方にひらく。内外面とも透明釉を施釉するが、口縁部の釉はかきとらない。口縁部のみの残存で詳細は不明であるが、Ⅴ類碗の可能性が高い。1474は碗の底部である。高台は比較的細く高く、体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がる。内外面とも透明釉を施釉し、灰白色に発色する。外面の高台脇は露胎である。また、底部内面は環状に釉ハギする。大宰府分類白磁碗Ⅷ類相当で、12世紀後半代に比定される。

#### 青磁

1470～1473は碗である。1470は内面にヘラ彫りと線描きの草花文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、暗緑灰色に発色する。龍泉窯系青磁劃花文碗で、12世紀後半～13世紀前半代に比定される。1471は内面に櫛描き雷光文を施文し、外面にはヘラ描きの沈線が巡る。内外面とも施釉し、淡黄緑色に発色する。外面の体部下半以下は露胎である。同安窯系青磁碗で、12世紀後半～13世紀前半代の所産である。1472は外面に片切り彫りで鐫のあまい蓮弁文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。龍泉窯系青磁蓮弁文碗で、13世紀中葉～後半代に比定される。1473は外面に剣頭と身の一致した線描きの蓮弁文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉し、淡黄緑色に発色する。龍泉窯系青磁細蓮弁文碗で、15世紀代の製品である。

#### 瓦質土器

1475は瓦質土器火鉢である。口縁端部を内側に引き出し、幅のある平坦な面をつくる。口縁部外面に凸帯が2条巡り、その間に格子目文をスタンプする。外面は磨耗が著しく、炭素の吸着は見られない。

立石分類の浅鉢Ⅴ類相当で、14世紀後半代の所産と考えられる。

#### 青白磁

1476は青白磁合子あるいは小壺の蓋である。型作り成形で、上面に型押しで草花文を施文する。また、下面には短いかえりを貼り付ける。上面には透明釉を施釉し、淡青灰色に発色する。下面は露胎である。13世紀代の景德鎮窯産の青白磁と考えられる。

#### 参考文献

- 1 横田賢次郎 森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館
- 2 立石堅志 1995 「奈良火鉢」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会

## 6. 土製品 (図版384)

紡錘車は3点ある。1478は断面方形の円板状のシンプルな形態である。中央に両側から開けた円孔がある。1479は断面が低い台形で中央に垂直な円孔がある。上面の稜線は甘く緩やかである。1480は底面は歪ながら平坦であるが、上面は中央の円孔周辺がドーナツ状に盛り上がっている。左右対称でなく、

片側の方が高くなっている。中央の高い部分周辺はヘラで調整している。

土錘は4点図化している。1481は大形の管状土錘である。両端はまっすぐになった断面方形である。径の割合が大きく長さが短いタイプである。351.2gと重量がある。1482も管状土錘であるが、小形で両端が細く中央が広いものである。片側の端部は残存していない。1483・1484は有孔土錘である。両端内側に円孔があるもので、端部近くが肥厚している。孔は両側から開けている。

1485は不明土製品である。棗玉状の破片で土錘の一部かとも思われるが明らかでない。1487も不明土製品である。底は平坦で上部中央が円形に盛り上がっている。上面中央は凹んでおり、断面台形の上部が弧状になっている。

1486・1488はイダコ壺の破片である。1486は把手部で角張っている。把手部側面に小円孔があるのが特殊であり、土錘として再利用の可能性もある。1488は釣鐘状のタイプの口縁部で内湾しており丸く納めている。ユビ成形からヨコナデで仕上げている。

1489～1493は土馬である。1489は馬の胴部である。ユビ成形からハケ整形とナデ調整している。脚部が取れている位置で後脚であろうか。1490は前脚で胴部との接合部で剥離している。1493も脚部である。ユビ成形のままで細かい調整は加えていない。

## 7. 瓦(図版387～397)

瓦は集中して出土しているわけではないが、26・28・31・37区などの掘立柱建物が多く検出された地区で出土量が多い。集落遺跡としては出土量が多いものと思われる。ただ、瓦葺建物を推定するほどの量は確認されていない。全地区合わせてコンテナで20箱近く出土している。大半は平瓦で、瓦当部は軒平瓦・軒丸瓦各1点だけである。

### 軒丸瓦(T1)

周縁だけの資料で文様部分がほとんど残存していない。ただ、復原される径が小さいことから、古い時期にはならない可能性が高い。復原径16.0cmになり、周縁の幅1.2cm、残存高4.1cmを測る。灰色を呈し、砂粒を多く含む。

### 軒平瓦(T2)

31区のSR3101から出土している。表面磨滅しているが、型式が判断できる資料である。平瓦部の端部を欠いているが平瓦の幅は残っており、瓦当面も残存している。どっしりとした重量感のある瓦である。瓦当面の幅31.1cm、最大高さ6.0cmを測る。瓦当面周囲はヘラ切りによって面を形成している。平瓦部も同様に端面をなしている。残存長20.8cmを測る。

平瓦は凹面布目で、凸面はヘラで調整している。布目は細かい。瓦当面の文様は圏線が巡り、内側下に唐草文、周囲に珠文帯を持つ。文様から北宿式とされるものである。平瓦と瓦当は播磨特有の包み込み技法によるものである。器表は黒色を呈しており、器肉部は灰白で、砂粒を多く含んでいる。

### 丸瓦(T3～T16)

量的にはコンテナ1箱余りと少ないが、色調・厚さなどで変化がある。厚さから平瓦と同様に3種に分類した。

I種 厚さ3cm程度の厚い瓦。灰色を呈し、焼成良好な瓦である。チャートなどの小石粒と砂粒を含んでおり、器肉は灰白である。凹面は布目が残り、側面はヘラで切っている。2面になっており、

凸面側の稜線はシャープである。凸面はヘラで調整している。(T16)

Ⅱ種 やや厚めの瓦で厚さ2～3cmの瓦。さらに2つに分けられる。胎土は似ており、白色の小石粒を含んでいる。

1 灰白で焼成良好なもので、側面は2面取りしている。Ⅰ種のようにシャープでなく、凹面との差も少ない。凹面は布目で、凸面はヘラで調整している。(T7)

2 茶褐から赤橙を呈するもので、焼成はやや甘いものが認められる。側面は1面となっており、稜線は鈍い。凹面は布目であるが、斜め方向のナデで消している部分がある。(T10)

Ⅲ種 厚さ2cm未満の薄い瓦。数は少なく、破片も小さいものが多い。端部が明瞭に残っているものはない。赤橙の焼成の悪いものが主体である。白色粒を含み、凹面はナデ調整している。(T12)

#### 行基瓦(T14)

上記以外に1点だけ玉縁の認められない瓦がある。丸瓦とすると、行基葺のものになる。もしくは道具瓦である雁振瓦かもしれない。

#### 平瓦(T17～T88)

最も出土量の多いものである。調査区全体から出土しているが、遺構の多い部分(26区・37区など)の方がより集中して出土している。

瓦の厚さ・重量感から大きく3種に分けられる。厚みのあるものとそれ以外で、厚みのあるものの凸面はヘラで調整している。厚みのあるものは量的には少なく数点だけである。軒平瓦と同じ奈良時代と思われる。

Ⅰ種 厚さ3cm以上と厚みのある瓦、凸面はヘラで調整、凹面は細かい布目(T77)

Ⅱ種 やや厚めの瓦で厚さ2～3cmの瓦。凸面の違いから分類した

- 1 ヘラで調整(無文)(T78)
- 2 格子タタキA 粗い菱形の格子タタキ(T40)
- 3 格子タタキB やや細かい菱形の格子タタキ(T53)
- 4 格子タタキC 長方形の凹凸のあるタタキ(T28)
- 5 不定形のタタキ(鳥足跡形)(T73・T74)

Ⅲ種 厚さ2cm未満の瓦。凸面の違いから分類した

- 1 ヘラで調整(無文)(T81)
- 2 格子タタキA 粗い菱形の格子タタキで周囲も幅広い(T45)
- 3 格子タタキB 粗い菱形の格子タタキ(T43)
- 4 格子タタキC やや粗い菱形(幅2cm)のタタキ(T39)
- 5 格子タタキD 細かい菱形(幅1.5cm)のタタキ(T29)
- 6 格子タタキE 粗い長方形のタタキで方形が崩れているもの(T67)
- 7 格子タタキF 細かい長方形のタタキで方形が崩れているもの(T62)
- 8 不定形のタタキ(鳥足跡形)(T68～T72)
- 9 縄目(T19～T26)

全体的に瓦は磨滅が顕著である。タイプによる極端な差はない。胎土は赤色粒やチャートを含んでおり、やはり大きな変化はない。色調は灰～灰白が多く、暗灰や灰黄と僅かな差がある程度である。破片も小片になっているものが多く、比較的Ⅲ-6類やⅢ-8類は破片が大きいようである。

## 8. 石器(図版398~403)

当遺跡からは少量ではあるが、旧石器時代から弥生時代にいたる時代の石器が出土している。以下、出土した石器を器種ごとに報告する。

### ナイフ形石器(S1)

横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器である。サヌカイト製で27区から出土している。なお、図示はしていないが2区でも原位置から遊離した状態で、サヌカイト製で小型の横長剥片を素材としたナイフ形石器が1点出土している。

### 台形石器(S2)

両側縁がほぼ並行し、末端下部に刃部を持つ。サヌカイト製で28区から原位置から遊離した状態で出土している。

### 石鏃(S3~S19)

S3・S5~S7は凹基式の石鏃である。S3はチャート製で、残りはサヌカイト製である。S6のように表面の風化が進んでいるものもあり、縄文時代のものと思われる。

S4・S8~S12は平基無茎式で五角形に近い平面形のものと同三角形のものがあるが、断面はすべて平坦になっている。

S13~S17は凹基無茎式で抉りの深いものから、浅いものまで認められる。

S18は僅かながら、基部の突出が観察されるので凸基無茎式とした。S19は凸基有茎式で、表裏に剥離面が認められる。

S4・S9・S10・S17・S19がSK0106、S8・S13がSX0101、S12がSX0103、S16がSK5601、S3が1区、S5が37区、S15が33区、その他は表面採集したものである。

### 打製石剣(S20・S21)

S20は先端と基部の一部に僅かな欠損は見られるものの、ほぼ完形である。作用部を連続する剥離により作り出す。SX0101の主体部から出土した。肉眼観察では金山産のサヌカイトであると思われる。S21もサヌカイト製で、半折した先端部側の破片である。身は厚く、断面形は潰れた菱形を呈する。丁寧な斜め目平行剥離が施されている。2区から原位置から遊離した状態で出土した。

### 石錐(S22)

頭部を直線的に終わらせる。切り部の先端が欠損する。サヌカイト製で41区から出土した。

### 削器(S23・S24)

S23は大振りの剥片を用い、一側縁を作用面とする。26区から出土した。S24は基部と側縁の一部に自然面を残し、直線的な作用面を持つ。53区から出土した。いずれもサヌカイト製である。

### 使用痕のある剥片(S25・S26)

S25は横長剥片の鋭利な一辺に使用痕の見られるものである。37区の包含層から出土した。S26は二辺に自然面を残し、鋭利な一辺に使用による剥離が認められる。52区の黒シルト層から出土した。いずれもサヌカイト製である。

### 楔形石器(S27~S29)

S27は上辺に階段状の剥離を持つが、下辺が自然面で上辺に対応する剥離は認められない。ただ、上

辺の剥離痕が作用部というよりも、潰れた連続剥離であることと、全体の形状から楔形石器に含める。1区の包含層から出土した。S28は上辺と下辺に対応する階段状の剥離を持つ。SR5301から出土した。S29は上下に階段状の剥離が認められると共に、右側に剪断面が形成されている。53区の包含層から出土した。いずれもサヌカイト製である。

#### 剥片(S30～S32)

S30はチャート製の剥片である。52区から出土した。S31・S32はサヌカイト製の横長剥片である。S31は36区、S32はSD3710から出土した。

#### 二次加工のある剥片(S33・S34)

S33はサヌカイト製の横長剥片である。表面に自然面を残す。40区から出土している。S34もサヌカイト製の横長剥片で、53区から出土した。

#### 石包丁(S35～S37)

S35・S36はサヌカイト製の打製石包丁である。S35は完形で、僅かに湾曲した背部と直線的な刃部を持つ。両端には自然面が残る。背腹両面から剥離を行って刃部を形成し、背縁部は階段状剥離の後、刃潰しを行う。30区から出土している。S36は欠損しているが、S35とほぼ同様の形態を持っていたと考えられる。37区の包含層から出土した。

S37は粘板岩製の磨製石包丁の破片である。直刃半月形態であったと思われる。両刃で研磨は全体におよび、穿孔は両側からの回転穿孔である。38区の包含層から出土した。

#### 砥石(S38・S39・S41・S42)

S38は薄い短冊状を呈する。長辺の2面および短辺に研磨面があり、表面として図示した部分にも研磨により溝状になったへこみがある。割れた砥石の剪断面を再利用したものと思われる。表面採集したものである。S39も短冊状を呈するもので、表裏および両側縁に研磨面がある。40区の包含層から出土した。S41は方柱状に加工したものである。両面と裏面の一部に研磨面が見られる。SX5304から出土した。S42は上面を中心に両側面に顕著な磨面が形成されている。被熱し、表面の一部が剥離したと思われる。59Tから出土している。

#### 石皿・凹石・敲石・磨石(S40・S43～S48)

S40は扁平な亜円磔を利用したものである。割れているが、両面の中央付近を中心に研磨面が見られる。SH3106の中央土坑から出土しており、石皿としておく。S43は扁平な自然磔の表裏に磨面が形成されている。小形の石皿としておく。S44は凹石である。亜円磔を利用し、上部中央に連続する敲打による凹みがあり、裏面にも若干磨り痕が認められる。36区から出土した。S45は敲石である。両端に敲打痕が認められ、裏面には磨り痕もある。SX2606から出土した。S46は楕円磔を利用した敲石である。両端に敲打痕が認められる。SK3704から出土した。S47は亜円磔を利用した磨石である。表裏に磨り痕が認められる。26区から出土した。S48は扁平な磔を利用した磨石である。表裏に顕著な磨り痕がある。SR3102から出土した。

#### 石棒(S49～S51)

S49は敲打により若干の成形を行った後、やや粗いながらも表面全体を研磨している。37区から出土した。S50は扁平な板状を呈する。敲打による成形と表面の研磨を行う。SX0102の北西溝から出土した。S51は円柱状を呈する。30区から出土した。石材はいずれも緑色片岩系のもと考えられる。

## 9. 金属器 (図版404~405)

### 鉄鎌 (M2)

平根系の圭頭式鎌である。長い鎌身の先端と茎端部を欠く。関部の形状は台形関で茎部の断面形は丸みを帯びた方形である。SD0101から出土した。

### 刀子 (M3・M4)

M3は刀子の刀身片である。全体に木質が遺存する。31区のP030から出土した。M4は三つ折りにされた刀子である。37区の包含層から出土した。

### 鎌 (M5)

刃部の破片である。刃部は背部に併せて湾曲する。SR3102から出土した。

### 釘類 (M6~M22)

M6~M10はほぼ正方形の断面で、端部を叩いて扁平にした後折り曲げて頭部を作った折釘である。M6がほぼ完形になると思われ、長さ2寸程度の部類になる。SK0201から出土した。M11も折釘であるが、4寸のものである。49区のP019から出土した。M12からM15は部分的な遺存状態のため、頭部形態は不明であるが、角釘の一種である。M12はSR1901、M13はSK3118、M14は37区包含層、M15はSK1304から出土した。M16からM18は断面形が平たい長方形を呈する棒状の鉄器で、平釘の可能性はある。M19・M21・M22は断面が方形を呈する釘類であると思われる。M19はSX3104、M21はSR3101、M22は31区包含層から出土した。M20は上半部の断面は半円、下半部の断面は三角形を呈する棒状の鉄器である。SR2601から出土した。

### 馬鍬 (M26)

折れた刃部の破片7本が融着した状態で検出された。確認調査の際に38T(22区)SD2201から出土した。

### 鉄滓 (M25)

椀形滓である。37区のP057から出土した。

### 不明 (M23・M24)

M23は縁が折り曲げられた板状の鉄片である。上辺と下辺の一部は生きているものの、形態・用途は不明である。40区の包含層から出土した。M24は板状の鉄片である。28区のP057から出土した。

## 10. 木製品 (図版406~407)

101点を図化した。板材や自然木は相当数出土している。遺構では旧河道を中心に出土している。28区・30区の西側低地や32~34区の水田部分、15~19区の水田部分で多く出土している。奈良時代から平安時代の律令期の木器がほとんどである。52区出土のナスビ形鋤(W18)大足(W19)以外は奈良時代以降の木製品と思われる。

### 木簡 (W1~W4)

4点とも律令期の遺構中心地域である28区谷部・30区段丘下から出土している。W1が28区で他の3点は30区から出土している。W1は先端を尖らせた木簡で上部を欠くが残存長で60.15cmを測る。残存状況は悪く、判読は難しい。肉眼ではほとんど読むことが出来ず、かろうじて数文字を読めるだけであ

る。木目の段であろうが、墨書面にも段がある。良好とは言えない材を使用している。木目間を平行に木取りをせず、斜め方向になっている。材が長いことも影響しているかと思われる。W2とW3は呪符木簡である。2点は似た形態で、頭部は丸く左右に切り込みを入れる。W2の先端は角を大きく切って尖らすが鋭角ではない。W2は長さ30.1cmである。一般的な「急々如律令」と記されている。W3は保存状態が悪く下部も折れて残っていない。残存長で29.0cmを測る。明確には読めないが、「急々如律令」であろうと思われる。W4は両面に記されている。文字は表面は判読出来るが裏面は明確ではない。

#### 祭祀具(W5～W17)

人形と齋串が出土している。足部分は確実に人形と断定できないので齋串としているが、W10は人形の足の可能性が高い。同様に足部にあたるものがあると思われる。W5は頭部に鬚を平面的に形取っている。左右に分かれた鬚である。首は左右からの切り込みで表現している。顔と髭は墨で描いている。眉毛は内側に下がっており、左右対称ではない。目はほぼ水平である。鼻と口は明確でなく、顎髭と頬髭が表現され、それによって口を表しているかもしれない。肩は撫肩である。手は残存していないが、右側の側面の段は手が取れた部分の可能性が高い。先端部は欠失しているが、かろうじて足部の切れ目が残っている。木簡と同じ30区段丘下から出土している。人形W8と齋串W12・W14も近いところから出土している。W6も墨書で顔表現する人形頭部である。頭部は丸く、顔は長くなっている。首は上の方から大きく切り込みを入れている。墨書の残りは悪く、口元付近の表現が残っている。首から下と右側3分の1は欠けている。W7も人形頭部である。表面の残存状態は悪い。頭部は丸く、全体的にもトラック形をしている。首は現状では上下両側から削り、首全体が細くなっている特殊な形態である。柾目材という兵庫県出土の人形として少ない木取りをしている。幅7.0cmと大形である。W8は小型の人形の下半部である。体部を削って細くしており、足部分より細くなっている。足は中央を折ることによって股を表現している。足は正方形に近い形で、残存部は足先に近い位置と思われる。体部はフラットではなく木目の段が残っている。

W9～W17は齋串とした。完全なものがないので分類は無理である。W13だけが細い棒状となり、それ以外は板材のものである。W15とW17は先端を尖らせており通有の齋串かと思われる。W9とW10は人形の可能性が高い。

#### 農耕土木具(W18～W20・W22～W25・W37)

W18はナスビ形鋤である。W19とともに52区から出土している。2分割しており、さらに複数の破片がある。残存長13.9cmを測る。W19は大足で、端部は残存していない。端部を欠くが、半分前後残っており全長50.0cm以上の長さに似る。W20は横槌である。敲打部は欠損しているがほぼ完形である。全長39.6cmで槌部は21.5cmである。把手部は幅が半分前後の3.8cmくらいに細くしており、端部は槌部と同じ幅のままで両側から削り端部を作っている。槌部の先端の加工は丁寧ではない。W22は農耕具の組み合わせの把手部と思われる。表面を粗加工した円形の材を使用している。W23は田下駄の破片であろう。方形の隅を円に削っている。板材で組み合わせるものである。W24は自然木に近い状態を円弧に曲げているもので、大足の柾木と考えている。断面の径1.5cm前後の材で枝部分も残っている。W25は角材で柄穴が3個開けられている。その方向から唐鋤の柄であろうかと判断した。長さ52.6cmで幅4.5cmを測る。柄穴は幅4cmと大きい。W37はやや薄いものの田下駄と考えた。隅円の長方形になり44.0cm以上の長さがある。

## 生活具(W21・W26～W36)

W21はムシロ編の錘である。中央を細く鼓形に形成している。両側から大きく削っている。中央部は2.2cmと細くなっている。芯部分を避けて木取りしている。W26は把手である。農耕具のものかもしれない。組み合わせであり、中央に柄が挿入される方形の穴が開けられている。両端は整形されており完形であることが理解される。長さ14.0cmと大きくないことから、強く力が掛かる柄とは思われない。W27は先端を尖らせたもので柄の先端であろうか。両側から削り出す。細く削り出す手前に圧痕があり、何か縛ったような痕跡とも思える。坂元遺跡で唯一の井戸から出土している。SE3701で奈良時代の井戸である。W28も柄である。径1.4cmの円形の断面で先端は断面形状を扁平にしている。W29はやや小型であることから断定しかねるが紡織具の棒と思われる。断面隅円方形の角材に穿孔しない穴を穿ちそこに棒を突き刺すものである。角材は先端が細くなっている。組み合わせの田下駄の棒の可能性もある。W30は棒状のもので不明品である。片側だけを削って尖らせており、陽物形の可能性もある。SR2803から出土しており、木簡や斎串などと隣接出土していることから、祭祀具の可能性も考えられる。

W31～W33は下駄である。すべて歯を削りだしている。W31は穴の位置から左足、W32とW33は右足である。W34は刷毛で柄部を細く仕上げている。全体的には下が広い枇杷形をしている。表面は丁寧に仕上げられている。W35は椅子の天板と考えている。両端が丸くなり長めで両側に方形の穴がみられる。4×2cmの長方形の柄穴である。穴の内側の下面に僅かな段を作ることによって低くなっている。上面は対応するように窪んでいる。木表を上になっている。W36は板材で刃物の使用痕が残っている。両端は生きており、比較的大きな材である。

## 容器(W38～W70)

W38は隅を大きくカットしている。折敷底板であろうか。端部の穿孔は側板との接合のものであるが、中央の穴は虫食いや後世の損傷かもしれない。片側には柔らかくするためと言われる傷跡が格子に認められる。W39は一木を削りだして作った槽の残欠で側部のみの破片である。

W40～W59は曲物である。W40～W45は側板、W46～W59は底板である。W40は平面形は隅丸にして穿孔が端部近くに4個あり折敷のようであるが、木取りから側板とした。W41・W43～W45には縦方向に切れ目(浅い刃痕)がある。W44は穿孔があることによって接続部と判断できるもので、W42は接合部の重なり部分が残っている。W45は蓋との接合の桜皮が残っている。曲物底板には刀傷が多く残されている。径はまちまちで、W58の47.2cmのものからW55の16.0cm位に復原されるものまで幅がある。

W60～W70は挽物である。小型のものが多い。復原径ではW69が22.9cmと大きい。W60・W62～W64は中央に孔が開くタイプである。方形と楕円形があるが、用途は同じであろう。挽物には刃痕が多く残っている。方向も複数で不定方向である。

## 建築材・用途不明など(W71～W101)

W71～W78は棒状の製品である。W72は端部を丸くし端部下を両側からの切り込みによって削り出している。紡織具の一種であろうか。W77・W78は先を尖らせている。

W79～W82は角材、W83～W86は板材、W87は角材ながら台形になった完形品である。W88・W89は柄穴のある建築材、W90～W92は楔状の製品である。W93は椅子などの端部であろうか。W94は形状は鍛製品のようなものであるが、先端に痕跡があることと木取りから矢板とする方が妥当かもしれない。W95は曲物底板に似るが厚いことから、不明品とした。径18.05cmの歪な円形である。W96は用途不明だがヒョウタンを加工したものである。

W97・W98は井戸枠である。出土地区は28区と30区と異なっているが、段丘西側の低地で木簡などの木製品が多く出土している地点から出土している。今回の調査では井戸は1基しか検出しておらず、それは素掘りである。この遺物の存在から横組の井戸が存在したことが確実である。2点とも両側にホゾがついているものである。W97は長さ125.95cmと大きく、全面に手斧痕が残っている。幅は10cm余りの角材で心持ち材である。W98は断面長方形で長さも83.9cmと短い幅は広くしっかりしている。W99・W100は板材でW99は矢板であろうか。W101は杭である。長さ71.0cmと長い径3.1cmと細い。

## V 科学分析

### 1. 坂元遺跡の地形環境

青木 哲 哉(立命館大学非常勤講師)

#### 1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。なかでも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を続け、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形の観察や堆積物の詳細な区分ができ、地形環境を細かいオーダーで復原できる。同時に、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。考古遺跡の発掘調査区では、地形環境と人間生活の関わりについても考察できるのである。

本稿では、坂元遺跡における地形環境について明らかにしたい。調査では、①1万分の1空中写真の判読にもとづく、遺跡周辺における地形面の区分、②5,000分の1空中写真の判読と現地踏査を通じた、遺跡付近における微地形の分類、ならびに③遺跡の各調査区における堆積物の観察を行った。堆積物については、遺構検出面以浅の地質断面とそこからさらに掘削したトレンチ断面の観察を通して捉え、同時にこれらの断面を観察することによって微地形の状況も確認した。こうして得られた調査結果に発掘調査の成果を加えて、遺跡における地形環境の考察を試みた。

#### 2. 遺跡付近の地形分布

##### (1) 白ヶ池川流域と別府川沿いの地形

本遺跡は白ヶ池川の下流部から別府川沿いに位置する。白ヶ池川は現在遺跡より約2km北東にあるため池から流れ出す。その後南西へ流下し、中流部ではほぼ西に向きを変えてから、加古川下流部に広がる沖積低地の東端で別府川に合流する。別府川は、加古川の分流で、加古川下流沖積低地の東端を流れる小規模な河川である。これは、加古川の旧河道に沿って概ね南西へ流下した後、南東へ流れて瀬戸内海に注ぎ込む。

白ヶ池川流域から別府川沿いにかけては、<sup>いなみの</sup>印南野台地の北西端にあたる。そこでは、7面の段丘と現氾濫原、開析谷などが認められる(第1図)。なかでも、段丘は5面の更新世段丘と2面の完新世段丘に分けられる。本稿では、便宜的に高位の更新世段丘から順に更新世段丘Ⅰ、Ⅱ……Ⅴ、また完新世段丘については高位のものを完新世段丘Ⅰ、低位のものを完新世段丘Ⅱと呼ぶ。これらのうち、本遺跡の各調査区は完新世段丘ⅠとⅡ、現氾濫原、および開析谷に位置する(第2図)。白ヶ池川流域と別府川沿いに分布する各地形には、次のような特徴がみられる。

〔更新世段丘Ⅰ・Ⅱ〕 更新世段丘ⅠとⅡは白ヶ池川上～中流部に認められる。そこでは、更新世段丘Ⅰの西側に更新世段丘Ⅱが分布する。白ヶ池川はこれらを横切るように流れており、更新世段丘ⅠとⅡの形成には、白ヶ池川があまり関与していなかったと考えられる。白ヶ池川流域より東側では、これらの



第1図 白ヶ池川流域の地形面区分図